反逆の勇者と道具袋

ストック

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
反逆の勇者と道具袋

【Ｎコード】
Ｎ３９７８Ｘ

【作者名】
ストック

【あらすじ】
前の勇者が集めた金銀財宝や装備品を、いきなり奪われて魔王討伐の旅をしろだって？手元に残ったのは道具袋のみ。これでどうやれっていうんだよ・・・。
一般人からまったく成長しないでいきなり魔王の前に立たされる勇者。使えるのは道具袋のみです。

召喚

あれ・・・？ここはどこだ？

目が覚めたら、いつのまにか知らない部屋だった。
おかしい。
いつものように自分の部屋で寝ていたのに。

寝ぼけた頭で現状確認する。
俺は菅井真一。１７歳。
両親と妹の４人暮らし。ごくごく平凡な高校二年生。
１５歳の妹晴美はアイドルとして大人気ブレイク中。ここだけが一般と違うとこだが、俺は何の能力もないし。

しかし、ここはどこだ？
俺の部屋はこんなに広くないし豪華でもない。
ベットなんか天蓋つきのキングサイズだし。

考え込んでいたら、ドアが開いて白いドレスを着た美少女と、メイド服を着た少女が入ってきた。
「お寝覚めになりましたか？　初めてお目にかかります。勇者様」
満面の笑みで話しかけてきた。

「勇者様？」
「はい。貴方様は、この世界を救う運命の勇者様。私は貴方に忠誠をささげます。申し遅れました。私はこのフリージア皇国第四王女、メルトと申します。貴方様のようなすばらしい方を召喚できて誇りに思います」
「フリージア皇国？第四王女？そんな国聞いた事もないけど？」

「はい。それは当然です。異世界から魔力が強く、勇者として才能がある方を召喚させていただきました。失礼ですが、この袋を開けていただけませんでしょうか？」
メルトは薄汚れた巾着袋を差し出す。ちょうど持ち歩けるくらいの大きさだが、中には何も入っていそうにない。
「何も入ってないみたいだが・・うわ！！」
袋を開けたとたん、空中に魔方陣が浮かび上がった。
「おお・・やはり勇者様。その勇者の袋は主と認めた者にしかその中身を取り出せないようになっております。その魔方陣に手を入れて、勇者にふさわしい装備を取り出すよう念じて見てください」
言われるままに念じてみる。すると、金色のフルプレートがでて、真一の体に装着された。
「なんだか夢を見ているようだな・・いや、これはきっと夢だ。寝よう」
現実逃避をしてベッドにもぐりこもうとしたが、鎧が邪魔で苦しい。
「ねえ、この鎧なんとかならないの？重くて邪魔なんだけど」
「あっ。はい。すぐ外させていただきます。ミル、お願い」
側に控えていたミルと呼ばれた少女の手を借りて鎧を脱ぐ。
「あの・・勇者様。お手数ですが、アルを全額と念じて袋から出てくるか試していただけませんか？」
「アル？まあいいけど。それじゃ」再び魔方陣に手を突っ込んで触れたものを取り出してみる。
次の瞬間、金貨で部屋が埋め尽くされた。
「すばらしいです。これでわが国も救われます。次はですね・・・」
さまざまな名前を挙げて取り出すことを要求される。言われるがままに従う真一。
鋭く輝く剣・きらびやかな鎧・美しい宝石・金銀財宝が出てくる。
途中から真一も面白くなり、何が出てくるか期待するようになった。
数時間ほどそうして、やっと終了した。

なにか体から力が抜けていくようで、相当疲労していた。

「お疲れ様でした。それでは明日、父である国王陛下と謁見していただきます。今日はごゆっくりお休みください」

メルトの指図で豪華な料理が運ばれる。美しい侍女が給仕をする。しきりに恐縮していたが、優しくいなされ、酒と料理を堪能してしまった。

食事の後は侍女達と広い風呂に入り、ぐっすりと眠った。

謁見室

「メルト、勇者の様子はどうだ」玉座から威厳のある声で問われた。

「はい。ヘラート陛下。今日のところは歓待させましたから、今はいい気持ちで寝ておりますわ」

メルトがこの国の王であるヘラート四世に返答する。その顔は嘲る様に笑っていた。

「ふふふ。先祖が魔王を倒して用済みになった勇者を始末したはいいものの、あの道具袋の封印が勇者にしか解けないとはな。おかげで勇者が世界中から集めた伝説の武器防具や金銀財宝もとりだせぬままだ。これでは今の世に再び現れた魔王に対抗できぬ。どうしたものかと思っていたが」

「勇者召喚術を習得して再び勇者召喚するのは骨がおれましたわ・・兄や姉は頼りになりませんし」

「メルト。数日かけて袋の中身を取り出させたら、しばらく鍛えて魔王討伐に向かわせろ。きちんと処置をしてな。くくく。」

「わかりました。」

二人で顔を見合わせて笑う。真一はそんな事も知らずに眠っていた。

謁見

次の日、メルトが呼びに来て、王様と謁見することになった。

「何か緊張するな」

元の世界では王様どころか、市長ですら会った事はない。

「大丈夫ですよ。シンイチ様はわが国の救世主さまですから。」

メルトが優しく手を引いて案内した。

謁見室は広間になっていて、壇上に玉座がある。

周囲には沢山の紳士淑女がいた。この国の貴族たちらしい。

玉座には堂々とした態度の中年男性が座っている。

メルトはその男性の前まで真一を連れて、膝を付く。真一もそれにならった。

「そなたが勇者シンイチか。余は皇国フリージアの王ヘラート４世じゃ。この度はよく我が娘メルトの召喚に答え、わが国に来た。勇者として存分に尽くすがいい」

人の上にたち命令しなれた口調でいう

「菅井真一ともうします。まず、事情を教えてください。勇者とは一体何をすればいいのでしょうか」

緊張して震えそうになる声を抑えて問いかける。

「わが国は北方に魔国といわれる魔族が支配する国に接しておる。魔族によりわが国の民が何人も不当に害されておる。その魔王は放って置けばこの世界を破壊しかねない存在であり、唯一対抗できるのは異世界にいる勇者の資質を持ったもののみじゃ。その為に召喚した。歴代の勇者は見事期待に応え、魔王を滅ぼし世の中を救ったのじゃ」

「今までに何回もそういったことがあったのですか？」

「そうじゃ。魔王は今までに何度も倒されている。勇者ならきっとできる」
煽るように王が言う。周りの紳士淑女からも拍手が巻き起こる。
「シンイチ様ならきっとできますわ。メルトは信じております」
頬を染めて言うメルト。
「はは、メルトも勇者様を信じているようじゃな。期待しておるぞ。それでは勇者の証として、勇者の冠を授ける」
王は玉座をたち、跪いているシンイチの頭に金で出来た輪をかぶせる。そうすると自動で輪が縮まり、ジャストサイズになった。
「こ、これは・・」
「勇者としての能力を引き出し、頭を守る聖具じゃ。役目を果たしたら自動で外れる」
「ま、待ってください。まだ俺は引き受けると決めたわけじゃ・・」
「シンイチ様。ぜひとも私達をお助けください。私達は貴方にすがるしかないのです。その冠は貴方様を守るもの。決して邪魔にはならないはずです」
「だ、だけど、いきなり嵌めるなんて・・」
「勇者殿！」王に強い視線を向けられる。周りの貴族からも強制するような視線を向けられる
「は・・はい。わかりました」シンイチは観念したように受け入れた。

「では、勇者シンイチの誕生と魔王討伐の旅の出発を祝って、乾杯」
大広間に移動して、パーティが始まる。
王族と貴族達はにこやかにシンイチに話しかけてくる
「勇者様のこれからの旅がお健やかでありますように」
「勇者様、期待しています。ぜひ魔王を倒して我等をお救いください」
身勝手な期待がかかる。

シンイチは段々腹が立ってきた。
（なんなんだよ・・人に勝手に魔王を倒せなんて期待して、自分達はその間パーティでお楽しみか？）
メルトが近づき、話しかけてきた
「勇者様、皆が期待しております。笑って安心させてやってください」
「そうはいっても・・」
「皆が貴方をお慕いしていますわ。もちろん私も」
シンイチの手を取るメルト
「え・・？あ、いや・・」
「さ、ダンスをおどりましょう。私がリードいたしますわ」
顔を真っ赤にするシンイチ。今まで彼女などできた事はない。絶世の美少女に手を取られて照れている
（単純な男。まあ途中でのたれ死ぬでしょうが、万一魔王を倒して帰ってきたら、当然世界中の財宝も集めてくるでしょうから、取り上げて暗殺すればいいわ。それまではこうやってあやしておきましょう）
腹の中でシンイチをみくだしながら、メルトはシンイチとダンスを踊っていった。

仲間

ダンスが終わると、メルトからパーティのメンバーになる予定の者を紹介された。

「勇者殿よろしく。私はアーシャ・カストールという者。皇軍獅子騎士団副長を務めている」
金髪碧眼の美形の青年が挨拶する。２０代前半くらいで、がっしりとした引き締った体つきをしている。
「よ、よろしくお願いします」
シンイチは握手する。どう見ても向こうの方が勇者っぽい。
「アーシャ殿はカストール伯爵家の次男で、皇国で最も強い騎士と名声が高いのです」
メルトが説明する。その目は憧れの人をみるように潤んでいた。
「いや、私など勇者殿の足元にも及びません。ですが、皇国のため、メルト様のため、必ず魔王を打ち倒してまいります」
アーシャはメルトの目を見て言った。
「期待しております・・アーシャ」
空気のようになるシンイチ。

「こほん・・それでボクの紹介もしてくれるかな？メルト姉さま」
振り返ると、中学生くらいの可愛い顔立ちをした少女が立っていた。
「あら、失礼しました。この子は私の腹違いの妹で、メアリーと申します。こう見えて、国一番の魔法使いになる素質があるそうですわ」
「よろしくね～勇者さん」
「よろしくお願いします・・でも、王女が魔王討伐の旅に同行するのですか？それもこんな子供が・・」
シンイチはいぶかる。

「子供っていうな。あんたも子供じゃん」
「まあまあ。実は、メアリーは公的には王族としては認められていないのです。彼女は王の庶子の上、身分の低い平民出身なので・・」
「別にいいけどね」
ふてくされたようにそっぽを向く。
「じゃ、これからよろしく」そういい捨てると、さっさと離れていった。
「・・・仲が悪いの？」おそるおそるシンイチが聞く。
「別に仲が悪いわけではありませんよ。普段はあまり接する事もありません。平民の母を持ちながら魔力が強いおかげでなんとか王宮に残れているような子ですからね」
冷たく笑うメルト。
シンイチその姿を見て、先ほどのダンスで高まった想いが少しずつ醒めていった。

「メルト姫さま、私も紹介をお願いします」
少ししてから、同い年くらいの怜悧そうな少年から声をかけられた。
「これはノーマン神官。シンイチ様、彼が最後のメンバーで、回復魔法の使い手です」
「よろしく。」値踏みするような視線を向けてくる。
「・・よろしくお願いします」握手するシンイチ。
何か虫の好かない奴のような気がした。

「勇者様はそれぞれのメンバーから戦闘の手ほどきを受けたあと、魔王討伐の旅に出発していただきます」
一方的に言うメルト。
シンイチはわけもわからないまま、とんでもない事に巻き込まれていく気がしてきた。
「す・・すこし外の空気を吸ってきます」
逃げるようにその場を離れるシンイチ。メルト達三人が冷たい目で

見送った。

王宮のベランダ

「はあ～。なんでこんな事になったのかな？てか、魔王討伐なんて軍の仕事だろ？なんで勇者とその仲間に任せるんだよ」

一人で愚痴をこぼす。

「まあ、それに関してはボクも同意見だけどね。しょうがない訳もあるんだよ」

後ろから可愛い声で話しかけられた。あわてて振り向くと、さっき紹介されたメアリーが立っていた。

「あ、メアリーさん。いえ、ただの独り言ですから」

焦って言い訳するシンイチ

「気にしなくていいよ。メアリーでいい。ボクもシンイチと呼ぶから。敬語も不要」

「わかった。それじゃメアリー、改めてよろしく」

「ん。これ飲む？」ワインが入ったグラスを渡してくる。

「ねえ、さっきの訳って？何で軍隊で戦争しないの？」

「魔法の存在が大きいよね。広域魔法を相手に使われたら、レベルが低い兵士はすぐ全滅。レベルが高くて魔法耐性を持つ個人の力に戦争は依存するの。雑魚が何万人でかかっても、一人の個人の方が強い」

シンイチは無言で考える

（巨砲主義と遊撃艦主義の永遠のテーマみたいだな。今のところ、個人の力で軍を敗れるくらい力が違うって事か）

「・・でも、俺は戦いの経験もないシロウトだよ？」

「そんなの知らないよ。姉さまの勇者召喚魔法は勇者として資質を持つものを選択して召喚する魔法だけど、何百年も前の失われた魔法を調べて、わかるところを断片的に繋ぎ合わせてやっと作り上げた魔法だもん。そこまで都合のいい事ができるか。勇者の財宝袋が反応したみたいだから、全くの失敗じゃないとはおもうんだけどね

ー。伝説の勇者みたいにすごい能力があるとは限らないし。現にこう話していても、魔力量が一般人程度しか感じられないし」

「マジで・・？そんな無責任な・・」

「まあ、がんばりなよ。ボクも正直気が進まないんだけどね。お母さんが死んで何か国に貢献しないと、王宮にもいられなくなっちゃうから参加するんだよ。自分の事で手一杯」

そういうと、メアリーは会場に戻っていった。

「マジかよ・・」

後には呆然とするシンイチが残された。

修行

それでは、今日から戦闘について修行していただきます。
パーティの次の日、メルトとアーシャが部屋に入ってきて言った。
「今日から兵士用の宿舎に移ってもらうぞ。鍛えねばならんからな。すぐに支度しろ」
「ハイ・・」
シンイチは逆らえるはずもなく、着替えを道具袋に入れて部屋を出た。

「遅い！！！。なんだそのザマは。もっと真面目に走れ」アーシャ
「ハァ・・ハァ。無理です」シンイチ
最初に基礎体力を見るといわれて、兵士用のグラウンドを走らせる。
シンイチはごく一般的な現代の高校生で、中世の一般人とくらべても大きく体力が劣る
「話にならんな・・それでも勇者か！！情けない」
１０周ほど全力で走らされた。アーシャは汗もかいてない。他の兵士達も平然としている。
シンイチは疲労でへたりこんでいた。

「おいおい・・あんなので勇者？大丈夫かよ」
「貴族のお坊ちゃんでももう少しマシだぜ」
「だらしねーなwなんか俺でも余裕でかてるんじゃね？」
兵士達の間で嘲りの声が上がった
（しょうがないじゃん。俺は文明人の一般人だぜ。野蛮人のプロの兵士に体力勝負で勝てるか！！）
心の中で叫ぶシンイチ

「まったく・・ほら立て！！次は剣術だ。」木剣を投げてよこすアーシャ
ようやく息を整えて、木剣を掴んでたつシンイチ。
「相手は・・そうだな。新兵ということで、ホライゾン。相手をしてみろ」
「は・・はい」
立ち上がったのは背の低い少年兵士。シンイチよりも華奢にみえる
「よかったな勇者様。さすがにアイツには勝てるだろ。まだ１２歳の新兵だからな」
「ホライゾン。俺たちが鍛えてやったんだ。負けたら承知しないからな」
周りからヤジがとぶ。

「開始！！」
木剣での勝負が始まった
（授業で剣道をしたことがあるが、防具をつけずにやるのなんて初めてだ。でも相手は子供だし・・なんとかなるか）
「面！！」
シンイチは木剣を上段から振り下ろし、打ち込んだ。

次の瞬間、いきなり足に激痛がはしり、もんどり打って倒れた。
ホライゾンと呼ばれた少年兵士が、脛に思い切り打ち込んできたのである
地面をころげまわるシンイチ。周囲は爆笑の渦
「あいつ馬鹿か？普通足を狙ってくるのは常識だろ？わざわざ足を止めて振りかぶるなんて何かんがえてんだ？」
「勇者様は俺たちの予想も付かないようなすごい技をみせてくれる予定だったのさ！！」
兵士は好き放題にいいつのる
「勝者。ホライゾン。まったく、これが勇者なのか？こんなド素人

をつれて魔法討伐とは・・もういい！！さがっていろ」
治療室に運ばれるシンイチ。
アーシャはこれからの事を思ってため息をついた。

治療室にて
「いてて・・やっぱり無理だよ。俺今まで戦いなんかした事ないもの」
治療室のベッドでぼやくシンイチ
「おかしいですね。勇者様は剣の才能もあるはずですし、その聖具は勇者としての能力も引き出してくれるのですが」
治療室に来たメルトが言う
「なあ、やっぱり俺には無理だとおもう。元の世界に返してくれないか？」
「それが、魔王を倒すまで、返送魔法が作動しないんです。私達も勇者様の希望はかなえてあげたいんですが・・」
すまなそうな顔をするメルト
「でも、魔法の才能はきっとありますよ。気落ちなさらないでくださいね」
優しくシンイチの手を握る。
「・・メアリーは俺の魔法量は一般人並だっていってたけど？」
ジト目でみるシンイチ
「いえ、あの、勇者でも最初は一般人と変わらないんです。戦いの経験をつんで、魔物が死ぬ時に落とす魔法玉を食べていけば、自然に魔法量は増えていきます」
「レベルアップか。そうだといいんだけど・・」
「さあ、気を取り直して、魔法の修行をしましょう。メアリーのお師匠様でもある宮廷魔術士フォンケル様が、午後から授業してくれます予定です」
「わかったよ・・・」

昼食後、魔術師フォンケルの修行を受けたが、そこでも問題が発生した。

魔術

「字が読めない・・じゃと？」
白いひげのいかにも魔術師といった風貌の老人がいう
「はい・・読めません」シンイチ
分厚い魔術書を開いても、書いている字は読めない
「そんな・・勇者召喚術には、言葉や文字の知識を植えつけるといった機能もあったのですが・・」メルト
「ふむ。我々が作り出した勇者召喚術は、失われた魔法技術の模倣じゃからの。完璧に再現するのは無理だったのじゃな」
首を振って諦めたようにいう宮廷魔術師フォンケル。
「しかし、どうするかのう。魔法とは概念じゃから、文字が読めないと話にならんぞ」
「少しずつ勉強していけば・・」シンイチ
「しかし、細かな概念まで理解するのにどれだけかかるか。このままでは魔法の習得に何年もかかりそうですね」
メルトが考え込む。
「わかりました。勇者様の役割は皆と相談しなければなりませんね。それでは、話してきますわ」
さっさと出て行く。後はポカンとした顔のシンイチが残された。

「す・・すいません。なんか一瞬で文字を習得するような魔法はないんですか？なんかこのままではマズい気がします」
シンイチはフォンケルに取りすがった。
「ふむ・・無いこともないがな。これがその魔道書じゃ」奥の本棚から薄い本を取り出す
「あ、ありがとうございます。早速使ってみますね」
「これ、待ちなさい。この本を使って文字解析魔法を習得しようとすれば、魔力量１２０００を消費するのじゃぞ。今のお前さんは魔

力量１５じゃ。魔力量をおぎなうために魔力玉を使うにしても、一体どれだけ集めればいいのやら。スライムだと１０万匹以上倒さないといかんな」
「そんなに・・・」
「だからその本は誰にも使われないのじゃ。文字を覚えるだけなら時間をかければなんとかなるからな」
「それじゃ、どうすれば」
「こればかりはワシものう。まあ、その本はあげるから、持っておきなさい」
「はい・・」道具袋にしまう。そのままとぼとぼと部屋に戻った。

会議室
「・・・というわけで、勇者には戦闘の才能も、魔法を習得する事もできない事がわかりました」
メルトがシンイチについて説明する。
出席者はメルト・国王・宰相・勇者メンバーパーティの一同。
「ふむ・・結局できる事は、財宝袋への収納と取り出しのみか。なんとも情けない」
宰相が首をふる。肥満した中年男だが、眼光は鋭い。
「まあわが国の国民でもないからのたれ死んでも構わんがな。どうせ魔王の脅威もこの国まで来るには時間がある。勇者に匹敵するような猛者は何人もいるし、前回の勇者の装備や魔法具も手に入った」
国王が言う
「私も見たところ、戦士としては役に立ちませんね。せいぜい荷物運びといったところでしょうか？」
アーシャが笑う。
「しかし、文字が読めないとはね」ノーマンがあざ笑う。

「みんな、ちょっと酷くないかな？勇者を呼んだのはボクたちの勝手なんだし、能力が無いならわざわざ魔王討伐の旅なんかに連れて

行かなくても・・」メアリーがシンイチに同情して言う。
「だが、考えてみれば、魔王の脅威にさらされている国々や、前回の魔王討伐時に結ばれている「勇者協力条約」に加盟している国にとっては、勇者の看板を出す事で協力してもらえるだろう。これからの旅を通じて各国秘蔵の装備や財宝を提供するよう呼びかける予定だからな」
「ふふ。勇者の名前を出せば、各国から好きなだけ財貨を引き出せますし、冒険者ギルドも逆らえませんからね。わが国が世界の支配者となるには、魔王討伐を名目で各国に影響をもたらさないと」
「しかし、魔王に対してはどうするかな。まさか本気で討伐するわけにもいかんし、そもそも無意味だ。魔王を倒しても次の魔王が生まれるだけだし、無用にわが国に敵意をもたらすだけだしな」国王。
「一つ提案があるのですが、魔国に使者を出してみれば？」ノーマンが言う。
「使者を出すのはかまわんが、どうするのだ？」宰相
「それはですね・・・・」
ノーマンが魔王に対しての提案を説明する

「なるほど。それならば、魔王に対して恩も売れる」国王
「ふふ、異世界の小僧には気の毒な事だがな」アーシャ
「みんな、いくらなんでもひどすぎるよ。ボク、シンイチに言ってくる」
席を立とうとするメアリー
「お黙りなさい。卑しくも王の血を引く娘ならば、国のことを第一に考えなさい」
メルトがピシャリという
「でも・・」
「メアリーや。お前の優しい気持ちは嬉しいが、あの小僧一人犠牲にすれば、世界中の人間が助かるのじゃ。我々は1人を犠牲にして残りの９９人を助ける決断を下さないといけない立場。それば王族

というものじゃ。この旅が終われば、お前も第五王女として正式に認められる。死んだお前の母もその事を望んでいたじゃろう？」
「・・・わかりました。お父様」メアリー
「ではこれで方針は決定じゃ。大丈夫だとは思うが、勇者にはこのことを気づかれてはならんぞ」
全員が頷く。

その様な会議も知らずに、シンイチは治療室でうなっていた。

使者

「しかし、勇者のこの体たらくでは、各国を回って旅などおぼつかないのでは？」
宰相が言う
「確かに、それぞれの国を攻めている魔族を倒せなどと言われては、真っ先に死んでしまいそうだ。そうなれば、先に各国の不信感を招きかねん。」
国王の言葉に全員が考えこむ。

もともと、魔国と接している国は大陸全土ではフリージア皇国だけだった。
しかし、魔族は空を飛んで攻撃できるので、もともと強国であるフリージア皇国を直接襲うのをさけ、周辺の弱国を直接襲い国土を占領して一定のコロニーを築いている現状だった。
補給の問題で魔族のコロニーはすぐには拡大しないが、各国にとっては国土が侵されているので頭がいたい問題だった。

「その辺のことを踏まえて魔国と交渉すべきでしょうな。魔国に対しては妥協を、周辺国については支配を。」宰相
「我々が一致団結して本気で戦おうとすると、まず戦場になるのはわが国。そんな迷惑をこうむる必要はないでしょう」ノーマン
「では、周辺国に対しては勇者を召喚した事を触れ回り、魔王討伐をすると宣伝して各国所有の国宝級の装備や軍資金の提供を命令。そして魔国に対しては、現在の魔族コロニーを各国に自治区として承認させるかわりにこれ以上の拡大を自粛するように交渉しましょう。もちろん勇者を交渉の材料にして」メルト。
「決まりだな。では、各国に対して使者をだす。」
国王の採決により、方針は決定され、各国に使者が向かった。

魔国　魔王城にて
「フリージア皇国の使者殿か。よく参られた」
魔王アンブロジアが玉座から話す。
魔族といってもそれほど人と変わりない姿をしていて、耳が長く黒い翼がついているところが特徴である。ただし、魔力は人間よりはるかに高い。

「魔王陛下におかれてはご機嫌うるわしく。わが国と誠実な友好関係をいつも王は感謝しております」
使者が発言する。
実は、魔国とフリージア皇国は平和条約を結んでおり、かなり大規模に貿易もしていた。
「ふむ。しかし、最近わが国との友好に傷をつける噂があってな。おぞましき勇者を貴国が召喚したとか」
魔王がプレッシャーをかける。
魔国にとって、数百年前に魔王を倒した勇者は悪の元凶そのものとして伝えられていた。

「相変わらず耳が早い。しかし、それは決して貴国に対して不誠実な行為ではないのです」
使者も負けずに自信を持って話す。
「ほう。面白い。では、どういった理由で召喚したのかな？」アンブロジア

「はい、説明させていただきます。

？前勇者が道具袋にしまいっぱなしになっていた伝説の装備や金銀財宝を回収するため。
？最近、周辺国がフリージア皇国に対して不満を持っている。勇者

を召喚して盟主国としての権威を取り戻すため。
この二点のために勇者を召喚いたしました。召喚した勇者を魔王討伐の為と宣伝するのは周辺諸国に影響を及ぼすためで、本気で魔国に対して敵対するつもりはありません」
使者は説明を終える。

「しかし、魔国にとっては不快なだけだが。それに対してどう補償するのかな？」
「はい。貴国に対してはーーーーーー」

「ふむ。それが本当なら、我等にとっても勇者召喚はメリットがあるな。」
「術式と現物は必ずお届けさせていただきます。そして、今後は永遠に両国の平和を」
「言葉だけでは信用ならんな。『呪力条約』を結べるか？」

『呪力条約』とは、国同士の条約を結ぶ時に使われる魔法である。どちらかが条約を破った場合、即座にやぶった方の条約主といわれる対象者が呪いを受けて死亡する。
その効力は双方の条約主が死ぬ時まで有効になる。

「わが国ではヘラート陛下を含む王族全員が条約主になる予定です」
「ふむ・・なるほど。こちら側は余を条約主に求める気だな」
「はい。それだけ我々は誠実でありたいのです」
「わかった。では呪力条約紙を与えよう。王族全員の署名をしてこちらにもってこい。使者の目の前で私が署名しよう」
「ありがとうございます。これで勇者がもたらした忌まわしき過去の過ちも償われ、魔族と人間の永遠の平和がもたらされましょう」
「期待しよう」

魔王と使者の会談は満足のうちに終了した。

森の国　ミールにて

「なんと！！わが国の国宝『森の杖』を差し出せと？あれを作り出すのに何人の神官が命を削ったか貴国はわかっているのか？」
ミール国王が怒鳴る
「存じております。３００人ほどが命をこめて寿命を縮めたとか」
使者が平然という
「確かにわが国にも魔族が襲来しておる。だが、大した規模でもないし、被害も些少だ」
「『勇者協力条約』をお忘れか？勇者に対して最大限に協力するという呪力条約。数百年前に結ばれた条約とはいえ、各国の王が即位する時に引き継ぐはず」
「ぐ・・・だが」
「それと、１００万アルの提供をお願いします」
「無理だ・・国家予算に匹敵する額など。そもそも、勇者の支援にそこまで必要ないはず」
「やれやれ・・まるでわかっていらっしゃらないご様子。わが国が盾となって魔国と接しているから、危機意識が薄いのですね。魔王が死んだ後も魔族は存在するのです。わが国に上空を通過する魔族を撃退する設備をつくるとか、魔国に妥協を求めるための根回しの費用とか・・わが国がそれをしなければ、いつまでも魔族の襲来は続きますよ」
「ぐっ・・」
「一ヶ月後に条約締結式です。ぜひご出席を。費用のほうは国債でかまいませんが、『森の杖』は本物をお持ちください」
意気揚々と使者は帰る。その後姿をミール国王は睨みつけていた。

フリージア皇国

「くくく・・光の国ミラーからは光の兜と２００万アル。海の国アトルチスは海皇の槍と２５０万アル。大地の国ガイルからは地獄熱の杖と３００万アル。その他の国も国宝と資金の提供をしてきた。これでわが国は大陸の覇者となるであろうな」
国王が笑う。
「私には『輝きのドレス』をください。これを着てアーシャさまと・・」メルト
「ふふ。わかっておる。すべて終わった後は充分に報いよう。ふふふ」
王族の親子は顔を見合わせて笑った。

出発

勇者召喚から一ヶ月。
今日は各国の王も招いての華々しい式典が開かれていた。
勇者が魔王討伐の旅に出るのを祝う式である。
同時に勇者協力条約が数百年ぶりに発効され、各国の間に同盟が結ばれた。

「本日はこのような式典を開き、誠に喜ばしく思います。私、フリージア皇国第四皇女が魔王を倒す救世主を招いた結果、非の打ち所のない立派な勇者を召喚できました。彼ならば魔族の脅威におびえる私達をすくってくれるでしょう。ご紹介します。勇者シンイチ様です！！！」
民衆の間から歓声がわきあがる。

フリージア城前の広場に作られたきらびやかな壇上の上にシンイチが姿をあらわす。
まるで王族がきるような豪華な服を着せられているが、その表情は硬い。
「勇者様！！！我等をお救いください」
「魔物に殺された息子の仇を！！」
「私の娘は魔族にさらわれました。今頃は奴隷として・・お願いします。娘をお救いください！！」
勇者を一目見ようと、他国からも民衆が押し寄せていた。
「はい。必ず魔王を倒し、この世を救います」
シンイチが言うと、再び歓声があがった。

シンイチは内心で恐怖に震えていた。
無責任な期待と崇拝は本人にはプレッシャーになるものである。

教えられた簡単な台詞を言うのが精一杯だった

（なんなんだよ・・俺には無理だよ。救世主でも勇者でもないよ）
しかし、ここで勇者のふりでもしないと、容赦なく見捨てられるであろう予測はこの一ヶ月でついた。
ちやほやされていたのは最初だけで、最近では城内の誰からにも馬鹿にされる始末。
寝る場所や食事も一般兵と同じ待遇で、さんざん馬鹿にされ苛められていた。
一ヶ月訓練しても、最下級兵士にも勝てなかったのでそうなったのだが。
よく見ると、フリージア皇国の兵士・役人・貴族たちは道化者を見る目であざ笑っている。

勇者パーティのメンバーであるアーシャ・ノーマンも同様だった。
仲間として認めてもらえず、面と向かって飾りだけの勇者、荷物もちだなと馬鹿にされた。
メルトも最初の頃の態度と違って、冷たく接するようになっていた。
「貴方は勇者としてただそこにいてくれるだけで結構です。下手に戦闘などなされぬように」
戦闘の才能もなく魔法も習得できないとわかった後、メルトからかけられた言葉である。
シンイチはすっかり孤独になっていた。

メアリーはシンイチを馬鹿にはしなかったが、できるだけ無視するようにしていた。
シンイチに対して同情していたが、親しくなると見捨てる時に辛くなると父王から言われていたからである
（・・ごめんね。私達が正しいとは言えないけど、これで平和になるんだよ）

「それでは他のパーティメンバーもご紹介します。フリージア皇国最強の騎士、アーシャ・カストール様！」
メルトの紹介で壇上から手をふるアーシャ。
若い女性から勇者に向けられる以上の歓声があがる
「神に仕える敬虔なる信徒、ノーマン神官！！」
「そして、我が王室からは、第五王女メアリー・フリージア！！」
王室からも参加するということで、民衆の興奮は頂点に達した。

各国の王は表面上は笑顔を浮かべていたが、内心では腸が煮えくりかえっていた。
（忌々しい。頼みもしないのに召喚されおって。勇者など不要だ）
（これでは魔物の被害よりも、勇者によって巻き上げられたせいで国が傾いてしまう）
（たとえ魔王が滅ぼされたとして、勇者の力が我が国に害を及ぼす可能性もある。どうしたものか・・）
シンイチも、各国の王の鋭い視線に気がついており、理不尽に憎しみを向けられておびえていた。

「さあ、勇者一行の出発です。皆様、盛大にお見送りしましょう」
メルト。
民衆の歓声の中、勇者パーティが馬車にのりこむ。
勇者一行を乗せた立派な馬車は、フリージア皇都を出て、北の魔国に向かっていった。

その裏では、魔国との「呪力条約」が締結されていた。
「ふむ。フリージアからの提供は、勇者の道具袋の返還か。あれはもともと先代魔王が開発した魔国の国宝。勇者に奪われ、専用化魔法をかけられたので勇者以外に使えなかったが、フリージアが開発

した道具袋の所有権譲渡魔法式と一緒にこちらに返還するということだ。現所有者であるシンイチとやらの命と引き換えに余に所有権が渡されるか・・くくく。結構な事だ」
魔王アンブロジアが条約の内容を確認する。

「はい。勇者シンイチの身柄と共にお渡しいたします。そして魔国側はフリージア国への友好条約と貿易の継続。そして同盟国の魔族コロニーを自治区とする代わりに、現コロニーのこれ以上の拡大をしないでいただきたい。あとは以前要求された人質を一人送るということですが・・」フリージア使者
「ふふ。よかろう。それでよい。この条件で署名しよう」

魔王アンブロジアがフリージア皇国王族の署名をされた呪力条約紙に血をたらし、署名する。
「ありがとうございます。これで両国の平和が永続いたします」
フリージア皇国からの使者は深く頭を下げ、感謝して帰っていった。

馬車

ゴトゴトと音を立てて馬車が行く。
周りは騎士隊によって固められている。
先頭の馬車にはアイーシャとノーマン。
次の馬車にはシンイチとメアリーが乗っていた。

シンイチは何度かメアリーに話しかけたが、冷たく無視されている。
馬車の中は気まずい雰囲気が漂っていた。

そのうちに会話を諦めて、この一ヶ月のことを思い返してみた。

「まったく、話にならん。馬にもまともに乗れないのか」
アイーシャに乗馬の訓練を受けたが、まったく乗りこなせない。当たり前だが日本の観光地で乗るような馬ではなく軍用馬なので気性が荒く、何度も振り下ろされて傷だらけになった。

「遅い！！剣くらいまともに振れるようになってほしいものだ！！」
木剣でめったうちにされ、気絶するシンイチ。

そのうちにアイーシャは相手もしなくなり、部下の兵士に訓練を丸投げするようになった。
「ほらほら、勇者様。俺たちが相手させていただきますよ」
そうなると、兵士から集団でいたぶられるようになる。彼らは勇者に対しての嫉妬を感じていたが、それを叩きのめすことができる自分達の強さに酔っていた。

「勇者様、掃除と洗濯もお願いしますね」
最後には、最年少のホライゾンからも容赦なく雑用を申し付けられ

るようになり、ただ耐えるのみだった。

剣の才能がないことは思い知っていたので、一刻も早く文字を覚えて魔法を習得しようともした。
しかし、既に勇者の才能は見限られているので、誰も教えてもらえない。
メアリーやフォンケルにも頼んだが、忙しいと断られるだけだった。
自分で勉強しようにも、辞典の一つもない状態では不可能。
結局何もできないまま、一ヶ月がすぎさった。

たまに、王宮内で王族や貴族の子弟からからかわれる事もある。
「おい、アイツが余にも珍しい無能勇者だぞ」
第一王子カリグラが取り巻きの貴族にそういってシンイチをからかう。
第一王子の癖に政治に携わる事もなく遊びほうけている彼にとっては、シンイチはいい玩具だったのだろう。
取り巻きの貴族も嗜虐心をそそられてあざ笑った。

「アイツが本当の勇者かどうか確かめてやろうぜ。ファイヤボール」
酔った勢いでカリグラがシンイチに対して炎の魔法を放った。
「あぐっ」
避けられずに背中に大火傷をおうシンイチ。
「ストーンスピア」「アイスカッター」
調子に乗って魔法をぶつけようとする取り巻きの貴族達。

「アースウオール」シンイチに魔法が当たる寸前、土の壁が出て、シンイチを守った。
「お兄様。そして皆様方。すこしお酒を召し上がりすぎですよ」
土の魔法をつかって助けたメルトが諌める。
「おお、可愛いメルト。冗談だよ。なあ、みんな」

周囲の貴族も同調する。
「もちろんご冗談ですわ。彼には魔王を倒すという使命がありますもの。お体は大切なもの。シンイチ様、お部屋で休まれては？」
「は・はいわかりました」
ほうほうの体でその場を逃げ出すシンイチ。後から王子と貴族達の笑い声が聞こえた。

このように、この一ヶ月は屈辱の連続だった。
（なんでなんだよ・・なんで何も出来ない俺が勇者扱いされるんだよ・・魔王なんか倒せるわけないよ）
毎日夜になるとその様に考えて眠れなくなる。
そして、いつ魔王討伐の旅に連れ出されるかおびえていた。

いろいろ試して、結局シンイチに出来ることは道具袋の使用だけだった。
道具袋を開けたら出現する魔方陣に手を突っ込んで念じると、該当した中の物が出た。
入れるときは反対側の手で物に触れて念じると収納された。
収納無制限で、持ち運びも重さを感じないので、それなりに貴重な物だというのはわかる。
だがしかし、できる事はまさに荷物運びだけなのだ。
（ふふ・・確かに勇者じゃないな。荷物運びだ）自嘲するシンイチ。

考えるのを止めて馬車をみる。
なぜかシンイチが乗っている馬車は護衛で固めてあった。
（まてよ・・何かおかしくないか？旅をして魔物を倒しながら強くなっていくんじゃないのか？護衛されながらじゃ一回も戦闘経験を積むことなく魔王の前についてしまうぞ？いったいどういうことなんだ？これじゃただ単に魔国に護送されているみたいだぞ）
少しずつ、少しずつおかしな点に気がつきはじめるシンイチ。

どんどんと不安が大きくなっていった。

魔街

フリージア皇国首都から出発して４日、一行は国境をこえた。
ここまでの旅の間、魔物は一度も現れず、全く戦闘はなかった。
それどころか、旅をする商人風の人間や、魔族の姿も見られたが、皆おとなしく一行に道をゆずって見送るだけだった。

その様子をみて、シンイチの違和感は頂点に達した。
（おかしい・・絶対におかしい。だいたい、なんで魔物が襲ってこないんだよ。こっちは勇者一行ですって宣伝しているようなもんだろ？周りに騎士隊に囲まれて旅にでる勇者なんているわけない！！）

「おい、メアリー。教えてくれよ。これは本当に魔王討伐の旅なのか？」
馬車の中で何度も聞くが、答えはいつも同じだった。
「うるさいなあ。そうに決まっているでしょ。ボクは疲れているんだよ。話しかけないでよ」
そういって無視を貫く。

野営の時も、アーシャやノーマンはシンイチを全く相手にせず、騎士隊の隊員と談笑してまったく緊張感がなかった。

そうしているうち、最初の魔国の街ナムールについた。
街は魔族やコボルト族、ドワーフ族、エルフ族など雑多な民族で溢れていたが、人間の姿も結構見かけられた。皆物珍しそうに勇者一行と騎士隊を見る

（おい！！こっちは敵国の軍だろ？なんで騒いだりしないんだよ！！）

シンイチの不安がドンドン大きくなっていった。

「よし。この後は半分は自由行動。残り半分は勇者の護衛につけ」
街で一番大きな宿屋に到着後、アーシャが命令し、騎士隊の半分は街に繰り出していった。

「勇者様は姿を見られると騒ぎになりますから、宿にいてください」
屈強な騎士に両脇を挟まれて、粗末な部屋に連行されるシンイチ。
そのままずっと監禁されていた。

料理亭「魔王の舌」ではフリージア国の騎士隊が大騒ぎしていた。
この数日の行軍でたまったストレスを発散している。
アーシャやノーマンも両脇に美しい魔族の娘をはべらかしていた。

「今日は無礼講だ。皆よく働いてくれている。魔王城まであと数日かかるが、ここで英気を養ってくれ」
アーシャの号令で乾杯する騎士達。
美味い料理や美しい女達に堪能していた。

店の隅で暗い顔をして料理を食べているメアリー。
「メアリー様。暗い顔をされて、どうされましたか？」
ノーマンが話しかけてきた。
「別に・・」
「勇者に同情されているのでしょう。メアリー様はお優しいですからな」
皮肉な口調で言う。
「別に優しいわけじゃないよ。でもさ、関係ない人を生贄に出して、それで平和になったからってどこか歪んでいるよ。そんな事してたら絶対手痛いしっぺ返しがくると思うよ」
「ほうほう・・例えば？」

「例えば、勇者の怒りをかって仕返しされるとか」
「あはは・・あのような最弱の荷物もちに何ができるとでも？」
ノーマンが笑い転げる。

「わからない。何もできないかもしれない。でも、こんな事続けていたら、何時か何処かで『何かできる人』に対して裏切りをして、こっちが酷い目にあう日がきっと来るよ」
「ははは、メアリー様の忠告、必ず国王陛下にお伝えいたしましょう」
そういうと、ノーマンは離れていった。

（・・別にアンタなんかに伝えてもらわなくても、帰ったら必ずお父様に言って、こんな事は今回限りにするように言わないと）
割り切れない思いを抱えながら、一人でワインを飲むうち、いつしか眠りに落ちていった。

「ふふふ・・平民王女様は心配性らしい」アーシャが笑う。
「第五王女様などに心配されなくても、フリージア皇国は安泰ですね。ふふ。まあ、一応陛下にはお伝えさせていただきますよ。ご本人様はお伝えできないでしょうからね・・」
「ははは・・」
腹に一物ありげな表情で、二人は飲み交わしていった。

ナムールに二日滞在し、すっかり英気を養った騎士隊は出発した。
その間シンイチは一室に監禁されたままで、食事の時でさえ部屋から出されなかった。
もはや、シンイチはこの一行が魔王討伐を目的しているとは信じられなかった。

相変わらず、メアリーと二人きりの馬車の仲。

シンイチは堪えきれずに何度も話しかけていた。

「なあ。本当に魔法討伐の一行なんだろうな」
「・・・そうだよ」
「このまま魔王城に乗り付けるのか？」
「・・・うん」
「なんでいきなりそんな事になるんだよ」
「・・・魔王が直接の戦いで勝負をつけようと言ったので」
「え？」
「前も言ったけど、軍を出して戦争するより、代表者の戦いで勝負をつけるの。そのほうが余計な被害がないでしょ？」
「そりゃそうだけど・・」
「・・・大丈夫。実際に戦うのは私達だから」
苦しそうに顔を背けて言うメアリー。
納得はいかなかったが、一応訳を聞けて、シンイチはすこし落ち着くことができた

到着

ナムールの街を出て数日後、ついに一行は魔王城についた。
漆黒の巨大な城で、数キロにわたる城壁に囲われている。
近づくにつれてシンイチは恐怖に震えた。

（だ・・大丈夫だ。俺は戦わないんだ。他の三人がきっと魔王を倒してくれる）
必死に呪文のように心の中で唱える。そうしないと恐怖で発狂しそうだった。

そして、そんなシンイチを痛ましそうに見つめるメアリーにも、予想もしなかった運命が待っていた。

魔王城の正面から近づくと、巨大な白馬に乗った巨人を先頭にした魔族の騎士隊が近づいてきた。
「勇者ご一行様、ようこそいらっしゃいました。私、１６魔将の一人ケルビムがお迎えに上がりました」
「おお、ケルビム殿。お久しぶりです。息災であらせましたか？」
アーシャが親しそうに挨拶する。
「はは、魔将としてこき使われておりますよ。再びお会いできて嬉しく思います」
二人はがっしりと握手をする。
その様子をみてシンイチは心臓が飛び出るほど驚いた。

「な・・なんで敵国の将軍と・・」
「・・アーシャ様は昨年の親善大使として魔国に赴いた際に彼と戦った事があって、引き分けたそうよ。それ以来友人なんだって」メ

アリー
「・・魔族と友人？おい！！本当に魔王を討伐にきたんだろうな？？」
シンイチがメアリーの肩を掴んで揺さぶる。メアリーは切なそうに視線を下に向ける。
そうしているうちに一行は魔王城の正面門から入っていった。

魔王城の城壁内に、何千人もの魔族の姿があった。
全員整然と隊列を組んでいる。
「これは！！」シンイチ
「みごとな軍ですな」アーシャ
「はは、勇者と魔王様の戦いを見るために、我が軍の精鋭が集まったのですよ。数百年前の雪辱を注ぐ姿をみせたかったのでね」
ケルビムが誇らしそうに言う。
シンイチはその中の一人にだって勝てそうになかった。

魔王城正門から入り数キロいったところで、巨大な神殿のような建物があった、その入り口で馬車は止まる。
そこで一行は降りた。
不安そうに周囲を見渡すシンイチ。周囲を騎士が取り囲む。
その時、周囲に屈強な兵士を引き連れた巨人の姿があった。
シンイチでもわかるくらいに圧倒的な魔力と強大な力が伝わってくる。

「皆のもの、ご苦労であった。よく勇者と人質を護送してきてくれた。」
「はい。魔王アンブロジア陛下。勇者と人質の引渡しをさせていただきます」
アーシャが言うと同時に、シンイチとメアリーが拘束される。
すぐさま、魔王がメアリーに首輪を付ける。

「な！！！どういうことだよ。今からお前達が魔王と戦うんじゃなかったのか！！」
「黙れ」
魔王が軽くこづくと、シンイチはあっけなく気絶した。
「シンイチ！！！・・ボクも拘束するということは、最初から人質に差し出すつもりだったんだな！！」
「ふふ・・魔王様から王族を一人差し出すように言われましたのでね。急遽貴方様を第五王女として擁立したのですよ」ノーマン
「まあ、当方としては王の血を引いて魔力が高ければそれでよい。よい子が生めそうだ」
「！！！！　大地の極熱よ。沸きあがれ。ボルケーノ」
メアリーが持っている杖を振って攻撃しようとするが、魔法が出ない
「ああ、地獄熱の杖ならば、すり替えさせていただきました。人質には勿体ないですからね。その杖はそこらの安物ですよ。そんな魔法どころか、小さい火一つ起せそうもありませんね」
ノーマンがあざ笑う。
「・・・くっ」
メアリーが観念したようにへたりこむ。
「二人を地下牢にでも入れておけ」
魔王に従う兵士が連れて行った。

「これが道具袋でございます」
シンイチから取り上げた道具袋を魔王に献上するアーシャ。
「ふふ。間違いなく『魔王の袋』だ。ついに余の手に戻ったか」
感極まったように道具袋をなでまわす。
「よくぞ取り戻してくれた。所有権譲渡の儀式は明日執り行うが、見物していかれるかな？」
「いえ、我々はすぐに呪力条約紙をお届けして、国王陛下を安心さ

せたいのでこのまま帰ります」
「ふふ。せっかちだな。良いだろう。これが条約紙だ。確かに渡したぞ」魔王
「確かに受け取りました。これで過去の過ちも償われ、人間と魔族の間も平和が保たれます」
「我等も過去の勇者の非道を完全に水に流そう。両国に末永く平和を」
アーシャとアンブロジアが堅く握手をする。
そのまま騎士隊とともに帰っていった。

懺悔

地下牢にて
「ううん・・ここは？」
シンイチが気がつくと、暖かい枕の感触があった
目の前に泣きはらしたようなメアリーの顔がある。
シンイチはメアリーに膝枕されていた
「うわ！！」
あわてて起き上がるシンイチ。
その姿をなきながら見たメアリーは、静かに頭を下げた。
「ごめん・・本当にごめん。」

少し落ち着くと、先ほどの記憶がよみがえった。
「お前・・知っていたんだな。魔王討伐なんて嘘っぱちで、俺を生贄にすることを」
メアリーは頭を下げたまま、「うん」と答えた。
「なぜだ。なぜわざわざ俺を召喚して、わざわざ魔王の生贄にするんだ？？」

激しく責め立てるシンイチ
メアリーは静かに理由を話し出した
「そんな・・道具袋を魔王に返すため、それだけのために・・」
「道具袋の持ち主は本来は魔王なんだ。前回の勇者が道具袋を奪って、勇者にしか使えなくした。その所有者を他人に譲渡する魔法式は先に完成してたんだけど、肝心の所有者である勇者がいなかったんで、わざわざ召喚したんだよ」
「最初からそのために？」
「ううん。召喚した勇者がすごい能力の持ち主だったら、それはそれで魔王や他国を攻める道具として使う予定だったみたい。シンイ

チが弱いから、各国から勇者支援の名目で国宝や資金を巻き上げた後に魔王に対しての生贄にしようってことになったみたい」

「てめえ・・人が弱いからって、何様のつもりだ」
「ごめん・・王様ってそういう立場だって。国を豊かにするために手を汚すべきだって・・」
「ふざけるな！！！」
怒りのあまり、メアリーをビンタするシンイチ。
メアリーは殴られても泣きながら頭を下げ続けた。
「ごめん・・いくら殴ってもいいよ。この身を好きにしてもいい。それだけの事をしたんだから」
じっと耐えるメアリー。

その姿を見て、幾分怒りを静めるシンイチ。
「・・・でも、結局てめえも裏切られて、人質にされたんだな。間抜けな話だ」
あざ笑うシンイチ。
「うん。そうだよね。馬鹿だよね。好きなだけ笑ってよ。自分でも馬鹿だとおもう」
乾いた笑みをこぼすメアリー
「・・・」
「王族は１００人のうち、１人を犠牲にして９９人を助ける役目だって。この件が終わったら、第五王女として正式に認めるから、国のことを考えなさいって。そんな偉そうな事言われて納得しちゃって、犠牲にされる二人目にされたんだから。馬鹿としかいいようがないよ」
「・・メアリー。なんでそんなに王族になりたかったんだ」
「決まっているよ。王族になれなかったら、どの道一生道具にされつづけるからだよ！！！！！」
泣きながら平民を母に持つ庶子がたどる運命を話し出した。

各国の王家は、代々巨大な魔力を受け継ぐ。
それは優性遺伝であり、生まれた子供は正妻の子でも庶子でも強い魔力を持つ。
だから、王は貴族・平民問わず自分の気に入った女を取り上げ、ハーレムを作った。
いや、ハーレムに入れられる女はまだマシで、そのまま捨てられる女の方が多いのである。
当然、何十人もの庶子が生まれた。

王の血を継ぐとはいえ、平民を母に持つ庶子の人生は過酷である。
正式に王族として認められる者は少ない。
魔力が強い男は軍隊に入れられ、一生使い潰された。
魔力が強い女は貴族に下賜され、妾として一生日陰の身になった。
魔力が比較的弱い者は、多額の上納金と引き換えに富裕な平民の家に押し付けられた。ただの奴隷として。
例外的に魔力が強く、美しく、国に貢献できた者だけが王族として認められる。
メアリーの母は運良くハーレムに入れられたが、体が弱かったために数年前に病死していた。

「メアリー。貴方は美しく、魔力が強い。必ず王族として認められるよう努力しなさい」
平民出身のためハーレムの中でも疎まれ、病死した母の最期の言葉だった。
その言葉に従い、王族として認められるため、必死に魔力を鍛えた。

「王族としてみとめられたら、妾にも奴隷にもならずにすむし、比較的自由になれると思ったんだよ。そしていつか立派な貴族のお嫁さんになって、穏やかに暮らせると思って・・」

「その結果が人質として魔王の物か・・」
シンイチがポツリというと、メアリーは号泣した。

(怒っても仕方ない。この子だって俺と同じように裏切られて生贄にされたんだ。中学生くらいの年齢で、頼りにする親もいない子が必死に生きるためにした事なんだ。考えてみたら、魔王の奴隷なんて俺よりもかわいそうだ・・)
そう思ったシンイチは、泣き伏しているメアリーに近づいて、ゆっくりと頭をなでた。
「シンイチ?」
「もういい。もう泣くなよ。悪いのはお前じゃなくて他の王族だ。お前は仕方なかったんだよ」
「・・・許してくれるの?」
「・・同じ裏切られた者を責めても仕方ないだろう。もういいよ」
「ありがとう。ごめん」
「もういいから」
メアリーを抱きしめて頭をなでる。シンイチの胸の中でメアリーは泣き続けた。

しばらくしてから、メアリーは泣き止んだ。
「シンイチの胸、あったかい。」ぽつりと言う
「そ、そうか」
「ありがとう。最後に人を好きになれてよかったよ」
「す、好き?」
「うん。好き。ねえ、お願いしていい?」
「お願い?」
「・・・ボクを殺して欲しいの」
「な?」
「ボクに付けられた『奴隷の首輪』は自殺しようとすると意識を止めるんだ。だから・・」

「イヤだ」
「お願い」
「イヤだ！！！必ず助けるから！！勇者である俺を信じろ。お前だけの勇者になって、必ず魔王を倒してやるから」
「シンイチ・・」
シンイチに抱きついて泣き出すメアリー。疲れきっていたのだろう。すぐに眠りに落ちた。
「なにか方法があるはずだ。俺が魔王を上回っている所、俺にできて魔王にできない事。考えろ、考えろ・・」
今まで読んだあらゆる物語を必死に思い出して、なんとか魔王に勝つ方法を考える。
夜は静かにふけていった。

次の日、兵士に地下牢から引き出され、魔王城の広場につれていかれた。
広場には魔方陣が書かれ、中央に道具袋が置いてあった。

「ただいまより、愚かなる勇者から魔国の至宝である『魔王の袋』を取り戻す儀式を始める」
魔王が高らかに宣言すると、広場を埋め尽くした魔王軍から歓声が沸き起こった。

「火と破壊の魔公イフリート　魔王に忠誠を」筋骨たくましい男の魔族
「水と癒しの魔公ウンディーネ　魔王に忠誠を」絶世の美女の魔族
「風と滅びの魔公シルフィールド　魔王に忠誠を」小柄な少女の魔族
「地と恵みの魔公ノーム　魔王に忠誠を」見上げるような巨体の魔族
「１６魔将を代表して騎士ケルビム　魔王に忠誠を」騎士ケルビム

と15人の魔族が唱和する。
それらを見ながら、シンイチは必死に考えていた。昨日一晩中考えても思いつかない。
だが、なぜかどこかに抜け道があるような気がしていた。

「ふふふ・・勇者シンイチとやら。膝が震えているぞ。我が父を倒した勇者とは比べ物にならんな。何か言いたい事があれば聞いてやるぞ」
魔王アンブロジアがあざ笑う。
（考えろ・・考えろ。そうだ！！なんでこんなに軍隊で取り囲まれているんだ。俺が弱いことを知っているはずなのに）
「ふっ。これは武者震いだ！！なにせ、我一人を倒すため、これだけの軍勢を用意しないといけない卑怯で惰弱な魔王など、我にかなうはずもないからな」
一世一代の演技を必死にする。
「シンイチ！！！！」その姿をみて、メアリーが気でも狂ったのかと心配になる。
その言葉を聞いて、魔王は一瞬キョトンとし、次の瞬間爆笑した。
周囲の魔族も大笑いをする
「何がおかしい！！」
「いや、すまんすまん。シンイチだったか？余をここまで笑わせてくれたのはお前が初めてだ。褒美に、永遠にその名が伝わるよう歴史に残してやる。魔王を笑わせた勇者としてな」
「なんだと！！」
「ふふ。冥土の土産に教えてやろう。ここにいる全軍はお前を警戒して集めたのではない。これから人間を攻めるために集めたのだ」
「・・というと？」
「つまり、余がお前の命をとり、『魔王の袋』の所有者となる。そうして、この全軍を袋の中にいれ、余が運んで人間の国を攻める」
「！！！！」

「ふふふ。今まで補給の問題で攻められなかった各国を蹂躙してやる。『現在の魔族コロニーの拡大』をする事は条約違反だが、『新たに魔族のコロニーを作る事』は条約違反にはならないからな」
「卑怯者！！！！！」メアリーが叫ぶ
「ふふ。フリージア皇国とは平和条約を結んでいるので攻められぬが、周辺国すべてを平定してしまえば、結局は属国も同然。有利な貿易でじわじわと絞り上げ、今の王族が寿命で死ぬと同時に平定すればよい」
その声を聞いて、魔族の軍が歓声を上げる
「魔王様　万歳！！！」「世界の征服を！！」
メアリーは絶望のあまり涙を流した。

魔王の話を聞きながら、シンイチはある物語を思い出した。
それは神の手にも負えない魔神を騙す人間の青年の話。
（これしか方法がない・・）

シンイチは魔王に近づき、土下座をした
「ん？なんのまねだ」
「先ほどの暴言、本当に申し訳ありません。ぼくは貴方の部下になります。許してください」
そのままジリジリと道具袋に近づく
「ははは、なんだその姿は。まあ、人間として身の程を弁えたというべきだが、残念だな。お前の命がどうしても必要なのだ。そうでなければ、その無様な様子に免じて奴隷にしてやってもよかったが」
「そんな事を言わないで。魔王様！！」
みっともなく土下座を続ける。
「シンイチ・・いや、当然だよ。責められないよ」メアリーは幻滅しながらも、仕方ないと思った。
「どうしても？」
「どうしてもだ！」

「では、こうさせていただきます」
「なに？？？」
シンイチは土下座をしたまま、道具袋の魔方陣に片手を突っ込んだ。
その瞬間、シンイチの姿がかき消えた。

収納

魔王城

シンイチが道具袋に手を突っ込んだ瞬間、その姿が消えた。道具袋もなくなっている。
「なんだと！！瞬間移動の魔法を身につけていたか。さすが腐っても勇者。しかし、この魔王城には結界が張ってある。逃げられるとでも？皆、全員で勇者をさがせ！！」
魔王の命令で、全員が魔王城を隅々まで探す。

「ふふ。残念だったな。あの勇者は一人で逃げ出す卑怯者らしい。まあ、逃げられるわけもないがな」
魔王がメアリーを言葉で嬲る
「シンイチ・・いや、シンイチだけでも逃げてくれれば・・」
メアリーが独り言を言う。
すると、いきなりその姿が消えた
「なに！！！」
驚愕する魔王
「人質も逃げた。探せ！！！！」
魔王が吼える。いつの間にか余裕が失われていた。

「ま・・魔王様　大変です！！」兵士があわてた様子で報告する
「なんだ！！！！！」
「魔王城の他になにもありません！！！！」
「何もないとはどういうことだ！！！」
「説明できません。こちらに来てください！」
兵士の後に続く魔王。城壁の正門から外を見る。

門の向こうには・・どこまでも続くなにもない白い空間が広がっていた。

あるところに、とてつもなく強力な魔神がいました。

その将来の力に恐怖した神は、幼い魔神を捕らえて、ちいさな小瓶にいれました

覚えておけ　この瓶のふたが取れた時こそ、世界のすべてを滅ぼしてやる

月日は流れ、魔神は瓶の中で、神をもしのぐ力を身につけました。

そうして、偶然にその小瓶を見つけた青年に言いました。

「この瓶のふたを開ければ、どんな願いもかなえてやろう。この魔神の名にかけて誓約する」

青年はその言葉を聞くと、瓶のふたを開けました。

「ふはははは。確かにお前の願いをかなえてやろう。その後に、この世界を滅ぼしてやろう」

「それでは、僕を死なせないでください」

「よかろう」

「外にいたら巻き込まれるので。僕を小瓶に入れてください」

「よかろう」

「そしてその小瓶を壊されたら死ぬので、壊さないでください」

「よかろう」

「あと、食料がないと死ぬので、全世界の食料も」

「よかろう」

「空気がないと死ぬので、全世界の空気も」

「・・・よかろう」

「あ、太陽の光がないと死ぬので、太陽も」

「・・・・・・・よかろう」

「もちろん地面がないと死ぬので、全世界の地面も」

「・・・・・・・・・よかろう」

「でも一人では寂しいな。多分孤独に耐えられず自殺するな。全世界の人々も」

「・・・・・・・・・・・・・・いい加減にせぬか」

「でも、最初の『僕を死なせない』為には必要なことですよ。あと・・」

延々と続く青年の要求

・・・・・・・・・・・・・

「もういい！！！！わかった。ぜんぶいれてやる」

その言葉を実行した瞬間、世界のすべての存在が小瓶の中に入った。

後は世界の外側で一人呆然とする魔神がとりのこされ、何一つ壊せないままにおわりましたとさ。

「あ、あれ？ここはどこ？？？」

いきなり目の前の光景が変わってびっくりするメアリー。

目の前には、広く平坦な更地があり、そばにはシンイチが立っていた。

「メアリー、大丈夫？」シンイチが声をかける。

「シンイチ。すごい！！いつの間に瞬間移動なんて超高等魔法を使えるようになってたの？」

助かったと思い、シンイチに抱きつくメアリー。

「瞬間移動？そんな魔法使えないよ。ここはさっきの場所から一歩も動いてないよ」

得意げな顔をしてシンイチが言う。

「？？？どういうこと？？」

「いやー。俺には俺にしかできない力があったってこと。剣でも魔法でもないね」

「え？それって？」

「道具袋を使える事。あと、俺の世界の物語の知識。笑っちゃうよね。子供の頃読んだシュールな小説と、魔王の言葉にヒントがあったよ」

「どういうことなの？じらさないで教えてよ！！」
「まず、魔王は全軍を袋に入れようとしてたね」
「うん」
「四魔公とか１６魔将とかいう強そうな人と何千人の兵士も入れられるよね。強さとか量とか大きさとか関係なく無制限に」
「うん」
「んで、俺の道具袋は、片手を突っ込んで『収納』と念じたら、反対側の手に触れている物を収納できるよね」
「まさか」
「はい。入れちゃいました。反対側の手に触れている『魔王城』を。その中に魔王も魔族も全部入っているよね」

しーん

しばらく二人の間に冷たい風が吹いた。

「入れたの？」
「入れた」

「・・魔王も？」
「魔王も」

「・・・・魔公も魔将も兵士も？」
「魔公も魔将も兵士も」

「・・・・・・あのでっかい魔王城も？」
「魔王城ごとぜーーんぶ」

「ぷっ」
「くくっ」

「あっはっはははははは」
「ははははははは」
しばらく、二人の笑い声が何もない更地にひびき渡った。

殺害（前書き）

今回はちょっとグロ入ります

殺害

「あはははははは　もうだめ。笑いしんじゃう」
涙が出るほど笑う二人。
「ははは。もうこれで心配ないよ」
「シンイチは本物の勇者だね！！」
二人ともこれほど爽快な気分になったのは初めてだった。
「さてと・・・それじゃ」
シンイチが立ち上がったとき、いきなり袋が動いた
「な・・なに？？？？」
二人で顔を見合わせる
まるで中で何かが暴れているような動きだった。

「もっとだ、もっと魔力を集めろ」
魔王を中心にして、周囲を魔族が取り囲んでいた。
「魔獄砲」
手を挙げて魔力を放出する魔王。
「ぐっ・・足りぬ。もっと魔力を余に集めろ」
四大魔公・十六魔将・数千人の兵士の魔力を集めても立っていられる姿は、魔王の威厳に満ちていた。
水の魔公ウンディーネと地の魔公ノームが必死に体を癒す。今にも魔力のオーバーフローでバラバラになりそうなくらい傷ついていた。
「もうおやめください。これ以上は・・」ウンディーネが必死に諌める
「・・・余にはすべての魔族の命がかかっておる。命果てようとも、この世界を破ってみせる」
鬼気迫る形相で魔獄砲を放ち続ける魔王。

山でも軽々と吹き飛ばす魔力砲を何発も放ち続け、道具袋の世界を破ろうとしていた。

激しくよじれる道具袋

「ど・・・・どうしよう。このままじゃ破れて、魔王がでちゃうよ！！！！」

メアリーが悲鳴を上げる

「えっと、えっと、そうだ！！！」

シンイチは必死の表情で道具袋の魔方陣に手を突っ込み、何かを力まかせに引き抜いた。

【ブチッ】

その直後、魔方陣からこの世のものとも思えない叫び声がひびき、メアリーが耳を抑えてへたりこんだ。

シンイチが気持ち悪そうに、手に握り締めたものを捨てる。

「ね・・ねえ。聞きたくないけど、なにをしたの？」

「と・・とっさに。魔王の心臓を取り出した」

「・・・・・・・・」

「・・・・・」

「・・・・・・ねえ」

「・・・はい」

「鬼？」

「鬼ですハイ。」

「魔王様ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！」

ウンディーネとノームが叫ぶ。全魔族の魔力を使って、必死に瀕死の魔王の体を治療する。

「許さん・・・許さんぞ勇者どもめ。八つ裂きにしてやる」

他の魔族の憎悪が魔王城を包む。

「まだ魔王は死んでないみたいだね」
少しして落ち着いたメアリーがいう。
「わかるの？」
「この『奴隷の首輪』の魔力が消えてないから。主人が死んだら外れるの」
「そうか・・中途半端はよくないな。魔王キッチリ殺そう」
「どうするの」
「心臓抜いても生きていられる化け物だったら、確実なところは一つだけだよ」
「ききたくない」
「後ろ向いてて」

道具袋に手を突っ込んで、何かを一つまみ取り出して捨てる。
【ニュル】

「聞きたくないけど、何取り出したのかな？残酷勇者さま」
「ひどい！！！　魔王の脳みその真ん中辺りを一つまみ」
「・・・・外道。ボクの勇者様は、魔王より怖いよね～」
「そんなぁ」
カランと音を立てて、奴隷の首輪が外れた。

「・・魔王様は息をひきとられました・・」
ノームの声に、全魔族が堪えきれずに泣き出していった。

「・・・どうやら、落ち着いたみたいだね」メアリー。
「ああ。魔王が死んだし、中から破ろうとするのは止めたみたいだ」
シンイチ
「これからどうする？」

「とりあえず、フリージア皇国まで帰ろうか。あいつ等にはお礼をしないといけないからな」
「・・そうだね。お仕置きしよう。」
二人で手を繋いで、フリージア皇国へと続く道を歩き出した

魔法玉

「・・そういえば、おなかすいたね」
歩き始めて二時間くらいたって、メアリーが訴える。
「そうだよな。考えてみたら、今日は朝から何も食べてないしなぁ」
シンイチ
「そうだ！！。その道具の中には、魔王城が入っているんだよね」
「ああ。てかそう考えたら気持ち悪いな。魔族を何千人とぶら下げて歩いているんだから」
「魔族だけじゃなくて、食べ物も入っているはずだよね。お城だもん」
「そうだな。出てくるか試してみよう」

魔王城にて。
魔王が死んだからといって、食堂の仕事がなくなるわけではない。
何千人もの魔族の食事を作るため、２４時間体勢で料理を作っている

何千皿もの料理。その中でも魔公や魔将向けに作られた特別な料理があるが、いきなり消えた。
「あれ？おかしいな。ここの料理を運ぶはずだったのに、なくなっている。」
新米の料理人が首をかしげる。
「おい！！！どこやったんだ！！！」
「いや、確かにそこにあったんですよ」
「現にないじゃねえか。てめえ、食いやがったな！！！」
先輩のコックに殴られる不幸な新米料理人だった。

外にて
「おいしい～。さすが魔王城の料理！！」メアリー

「上等な料理でろ～なんて注文つけたけど、ちゃんと答えてくれるとは、なんという性能！！」
道具袋に頬擦りするシンイチ。見た目は小汚い袋だが、どんな伝説の宝物より価値があると感じていた。
ワインも取り出して、道の真ん中で宴会状態。二人は満腹になるまで食べまくっていた。

再び魔王城
４魔公と１６魔将が円卓につく。中央には虹色に光る巨大な魔法玉があった。
魔法玉とは魔物が死んだ時に死体の側に出現する魔力の塊で、冒険者はそれを回収して売って収入にする。または、自分で吸収すると、魔力量の増大させることができた。他にも、魔法を使う際に魔力補助をするなどに使えた。
しかし、強大な魔物の魔法玉には、別な使い道もあった。

「・・・この『魔王の魔法玉』を吸収した者が次の魔王となります」
水の魔公ウンディーネが発言する。
「この中で前魔王についで魔力が強いのは、ウンディーネ魔公ですが・・・」
地の魔公ノームが発言する。

「だが、ウンディーネ魔公は戦闘向きではない。今なすべき事は、一刻もはやくこの世界から脱出することではないか？少々の魔力の強さに関わらず、戦闘に長けた者が次の魔王になるべきではないか？余にまかせてほしい」
炎の魔公イフリートが言う。彼が一番戦闘能力が高かった。
「あはは。その前に、この中の空気を浄化し続けていかないと。私

に魔法玉をくれなきゃ、いつまでも魔力がもたないよ。いいとこ保って一ヶ月だね」
少女のような姿をした風の魔公シルフィールドが発言する。
「その前に脱出すべきだ！！！！」イフリート
睨みあう二人。

「お二人とも、冷静になっていただきたい。そもそも、魔王の魔法玉とは、歴代の魔王の魔法を伝える至宝。魔王が世襲制であることをお忘れか？魔王の血を引く正当後継者に渡されるべきものです」
魔将ケルビムが二人を牽制する。

「控えていただきたいケルビム将。如何に魔将といえども、公爵同士の討論に割り込むべきではない」イフリート
「いえ、ここはあえて言わせていただきます。数多いる魔王の子の中で、たった一人魔将の地位まで上りつめた、私こそが魔王の正当後継者としてふさわしいはず。父の後を継ぎ、魔王玉を吸収させていただきます」
「その通りです！！！」残りの１５将が唱和する。

魔王の地位は世襲制ではあるが、寿命が長いため、正当後継者を指名するのに時間がかかる。
その間、血で血を洗うような魔王後継者争いに勝つためには、実力を示さないといけない。
四大魔公に告ぐ魔将の地位に上り詰めたケルビムは、明らかに魔王の後継者としての実力があった。
お互いに睨みあう。円卓での会議は混沌とした雰囲気に包まれた。

（ダメだ・・・・魔王が死んで、このような世界に閉じ込められたのに、誰もが権力闘争を始めた。このような争いをしている場合ではないのに）

魔族の中で最も知性と理性に優れているウンディーネがため息をついた。

再び外

「あっ　大事な事忘れてたよ」メアリー

「何？」

「魔族が死んだら、魔法玉って物を残すんだよ。それが高く売れたり、魔力の元になったり、レベルアップに使えたりするんだよ」

「そういや、フォンケルの爺さんもそんな事いってたっけ。」

「きっと魔王が死んだから、魔法玉でたはずだよ。取り出して！！」

「はいはい」

シンイチは魔王の魔法玉でろ～と念じながら道具袋に手を突っ込んだ。

「うお！！！でっかいし綺麗だ。」

目の前に巨大な虹色をした魔法玉が出現した。

「・・こんな大きい魔法玉なんて見たことないよ。それにこの魔力。すごすぎる」

メアリーが呆れたように言う。

「それでどうする？」

「えっとね、こうやって手を触れて、『吸収』と念じれば、自然に吸収できるんだけど。二人で分けようよ」

二人同時に手を魔法玉に触れる

「うわ！！！すごい魔力が流れ込んでくる」メアリー

「？？？？なにも感じないけど？？？？」シンイチ

魔法玉はすごいスピードで小さくなり、魔力がメアリーに吸収される。

「あれ？なんで私だけ？」メアリーが首をかしげる。

「よくわかんないけど、俺が魔力を吸収する能力すらないって事だけは分かったよ・・・」

地面に座り込んで落ち込むシンイチ。

「ま、まあまあ。シンイチには無敵の道具袋があるじゃない。それに、魔法についてはボクが全部役に立ってあげるから」

ポンポンと肩を叩いて慰めるメアリー。

「せっかくこの本が使えると思ったのにな・・・」

道具袋から文字解析魔法が書かれた本を出してため息をつく。

魔王城

魔王の位を主張しあう者同士が激しく言い争う中、いきなり魔王の魔法玉が消えた

「！！！！これは？？？？」

「どうやら・・外の勇者に取り出されたようだ・・」

一瞬呆然とする一同

「だ、だから早く余に託せばよかったのだ！！」イフリート

「何を言う。身の程を弁えろ！！」ケルビム

「あーあ。これでもうお終いだね。キャハハ。みんなのせいだよ」シルフィールド

お互いに責任を擦り付け合う魔族たち。

（これで・・魔族は終わりだ。情けない。どうすればよかったのだ）

ウンディーネとノームは頭を抱えて懊悩した。

不穏（前書き）

ついにランキングに乗りました。読んでいただける皆様に感謝！！

サービスで今日は３話更新します

不穏

外

「大丈夫だよ。さっきの魔法玉は特別性だったみたいで、いくつかの魔法も入ってたから。その中に『知識共有』の魔法があったから、今からボクの知識をコピーするからね。すぐ文字を覚えられるよ」

そういって接近してくるメアリー

「ち、ちょっとメアリー。近いよ」

「この魔法はおでこをくっつけないと使えないんだよ。そのままじっとしてて」

無邪気におでこをくっつけるメアリー。抱きついてくる。

シンイチはドキドキする。が、何もおこらない

「・・・え？」

「あ、ごめん。そういえば、ちゃんとした杖がないと魔法使えないんだった。」メアリー

「そうなの？」

「うん。魔法を使うには、魔力もそうだけど杖も必要だからね。という事だから、杖も出して」

「なんか、既に出てくる事が前提になっているよね」

そういいながら道具袋に手を突っ込む

「ちゃんとすんごい伝説の杖を呼び出してよ」

「そんな事いわれてもな～。えっと、魔王城内で一番すごい杖でろ」

魔王城

「え？？？」

ウンディーネが驚く。

長年愛用して、今も左手に握り締めていた杖が、いきなり消えたか

らである。
「ま、まさか、私の杖も外の勇者が取り出したの？。これでは、今の私達は瓶の中のアリに等しい。どうすれば・・いや・・・・これを利用すれば・・」
何か思いついて考え込む。

外
シンイチが取り出した杖をみて、メアリーが大喜びする
「シンイチ、すごいよ！！『女神の杖』だよ！！！」
「そんなにすごいのか？」
「伝説の勇者のパーティの魔法使いが使ってた杖で、彼女が魔王城で死んだ時に失われた伝説の杖だよ！！」
「ふーん」
「なんかリアクション薄いなぁ。これ、確実に国宝クラスだよ。売れば１００万アルは堅いよ。」
「どうせ俺には使えないし・・}
「もう。拗ねないの。それじゃ改めて・・」
シンイチに抱きついておでこをくっつけて、「知識共有」の魔法を使った。
「痛！！！！！」
「もうちょっとだから我慢して」メアリーががっちり抱きついてはなさない。
平原にシンイチの悲鳴が響き渡った。

「うう・・酷い目にあったよ」シンイチがぼやく
「よしよし、よくがんばったね」メアリーが頭をなでる。
「ん・・まあ、これで文字も覚えられたし、いいか」
座り込んで休むシンイチ

「ちょっと座ってて。ヒール」
メアリーが癒しの魔法を使う。シンイチの頭痛が消えた。
「魔法って便利だなぁ」
「そうでしょ。」
「俺もつかえるようになるかな？」
「うーん。シンイチの魔力量は１５だからね。使えてもライトの魔法一回分くらいかな？魔法玉吸収ができないからレベルアップも無理だし」
「魔王を倒しても最弱のままの勇者っていったい・・・」
地面に「の」の字を書いて落ち込むシンイチ。

「へへん。ただでさえ危ないシンイチにはそれくらいがちょうどいいと思うよ。ちなみに今のボクは魔法については魔王より上かも。えっへん」
腰に手を当てて胸をそらすメアリー
「理不尽だ・・」
ひたすら落ち込むシンイチであった。

魔王城が道具袋に入れられて数日

「ふざけるな！！！ただのポーションが２０アルだと？普段の１００倍じゃねえか！！！」
一人の若い魔族が魔王城内のショップエリアの店員にくってかかる。
「当然なんだよ。仕入れも見込めない以上、値上がりは当然だ。嫌なら買わないでくれ」
中年の魔族の店主が出てきて言う。
「貴様！！俺を誰だと思っている。１６将の一人、マルドーク様直属の兵だぞ！！」
「だからどうした？魔王様が死んで次の後継者も決まらない。こんな世界に閉じ込められて何日もたっていて、食料も水も天井しらず

の値上がりだ！！！。信用できるのは金だけなんだよ！！」
「き・・きさま。それでも魔族か」
「魔族だろうが人間だろうがメシを食わないと生きていけないんだよ。いいから帰ってくれ」
「よくわかった。殺してやる！！！」
剣を振り回す魔族
「おーい。後ろに並んでいる奴等、こいつを殺してくれた奴に特別にケセルの実を１０アルで売ってやるぞ」
「な・・なに？ぐわ！！」
若い魔族はすぐ後ろに並んでいる魔族に殺された。

もともと、魔王城に常駐していたのは５００人程度だった。その程度であれば、少々篭城しても食料も充分にあった。
しかし、人間の国の侵攻のために数千人の軍隊を呼び寄せた状態で閉じこめられたので、あっという間に食料不足になった。

それより深刻なのは水不足だった。
井戸は地下水脈につながっていないとすぐに枯れてしまう。
数千人の魔族の需要を満たす事はできなかった。
ウンディーネをはじめとする水の魔法の使い手が必死に空中から水を取り出そうとしているが、そうすれば当然空気が乾いてのどが渇くのが早まる。悪循環であった。

魔族同志の間でも争いが起き始めていた。

思惑

イフリートが滞在している西の塔

「・・やはり、その方法しかないか・・」イフリート

「・・はい。他の三人の魔公と、１６魔将と、兵士１０００人を殺して魔法玉を集めれば、計算上は魔王様の魔力を上回ります。その魔力をイフリート様が吸収し、魔力砲でこの道具袋の世界を破れば・・」

「まだ決断の時は早いが、わが配下を充分に掌握しておいてくれ」

「はっ」部下が下がる。

「・・・果たして、うまくいくだろうか?うまくいっても同族殺しの上、魔族の力が大幅に低下してしまい、人間に滅ぼされるかも・・」

イフリートは苦悩する。

ウンディーネが滞在している東の塔

「ウンディーネさま。言われるままに金貨を集めましたが・・どうされるのですか?他の魔公に知られたら・・」

部下に命じて、魔王城の財貨保管室から金貨を集めたウンディーネ。

「誤解を招く行為であることは承知しています。しかし、どうしても必要なのです」

集めた金貨を魔力で融合させ、一枚の純金の板を作る。

「もう我々には勝ち目はない。この上は、勇者の慈悲にすがるしかない。我々四大魔公や十六魔将の命を引き換えにしてでも、魔族を救わねば・・」

黄金の板に勇者に対しての手紙を掘り込んでいく。

「どうしてわざわざその様なことをするのです?」部下が聞く

「勇者に手紙を出そうとしても、そのままでは取り出してくれないでしょう。だから、勇者が『金銀財宝』を出そうとする時に、この金で出来た手紙も取り出してくれるはずです」
「そこまでして・・」
「我々には他に方法はないのです。」
ウンディーネはため息をついた。

ノームが滞在している北の塔
「なんですと!!!この世界に永住すると???」ノームの執事が叫ぶ
「永住とは言っておらん。脱出できる魔法を開発するまで、ここで生きていくしか方法がない」ノーム
「し、しかしどうするのです。食料も水も空気もエネルギーもないですぞ!!」
「あるではないか・・」
「まさか」
「我等四大魔公は精霊を先祖に持つものたち。精霊とは世界を司る力だ。我が大地に根を張り、生きるに足る果実を実らす大樹に姿を変え、ウンディーネ殿が清らかな泉に姿を変え、シルフィールド殿が世界を浄化する風に姿を変え、イフリート殿が天空にて光を照らす太陽に姿を変えれば、このような無の世界でも魔族は生きていけるだろう。もちろん、一族の者も相当数我等と共に姿を変えねばならんが、生き残った魔族がいつの日か世界に帰る魔法を開発できれば・・」
「お館様」
「すまんな。お前達も樹に姿を変えてもらわねばならん。無様な私を許してくれ」
「いいえ。魔族のために身をささげましょう」

中央の塔に滞在する１６魔将
「いいか。なんとしても他の魔族を滅ぼして、魔法玉を集めるのだ！！」ケルビム
「はっ」他の１５将
「イフリートはもしや同じことを考えているのかもしれん。よく警戒して、先手を取れ」

魔王城の中では緊張が高まっていった。

シルフィールドが滞在する南の塔

「キャハハ。皆いろいろな事かんがえているね～」
余裕たっぷりの表情で言うシルフィールド
「ふふ。風の末裔たる我等には水も食料も不要。あわてる姿が楽しいですね」
妖精のような少女が言う。彼女もシルフィールドと同じ容姿をしていた。

魔族のうち、風の末裔といわれるシルフィールドの一族だけは他と違い、肉体を持たないガス状生命体だった。
もっとも精霊らしさを残しているということでもある。
その種族特性ゆえに、個体という概念を持たない。すべて『シルフィールド』という存在の分身だった。

「まあ、私達にとって、ここから出ることなんてたやすいけどね。何回も『外の私』につながったし」
「勇者が何か物を取り出すたびに空気がつながりますからね。情報交換もできますし」
「しかし、こんな形で魔国の滅亡が現実化するとはね。予想も付かなかったよ。面白い」

「ええ。２０００年前でしたかねぇ。魔族が奴隷化されていた時代は」
「奴隷から解放して新しい世を作るんだーーーって言うあの子にほだされて協力しちゃったけどね」
「魔国を建国した初代魔王ですね。でも、結局は人間を奴隷にしたりしているんだから、同じでしたね」
「あの時は人間の帝国が滅ぶ様が面白かったから手を貸したけど、結局ずるずるそのまま協力しちゃったね」
「ふふ。私達は魔国が滅びる姿もみたかったんですよ。『風と滅びのシルフィールド』ですもの」

「あはは。じゃ、次は勇者君たちに協力しようか。勇者君たちが、今の社会を滅亡させるように。その後にくる新しい世をみたいしね。無力なくせに最強の勇者君はどんな世をつくってくれるんだろう」
「そうですね。それじゃ、勇者君のところにいってきます」
「たのんだよ～」
妖精のシルフィールドは消えた。

宝物

旅をして数日。メアリーはすっかり道具袋に味をしめていた。

「んふふ、今その道具袋は本当に宝の袋だね～。もっと試してみようよ」

「どうすればいいかな？」

「う～ん。例えば、値段の高い物でろとか？」メアリー

「身も蓋もない条件だね。んじゃ、取り出してみようか」

シンイチは例のごとく道具袋に手を突っ込んで、どんどんと取り出す

「うはっ。『炎の剣』『霧の羽衣』『地魔の槌』『天空の風石』その他いっぱい・・・素敵！！！」

目をハートマークにしてはしゃぐメアリー

「でも、俺には装備できないのね・・」シンイチ

『炎の剣』を持とうとしたら、熱くてもてなかった。

『土魔の槌』を持とうとしたが、重くてもてなかった。

『霧の羽衣』は女物だった・・・

「この『天空の風石』は使うのに魔力が必要みたいだしね」

ペンダントになっている『天空の風石』を首にかけてメアリーが言う。

「もういいや。どうせ俺なんて・・・」

魔王城

宝物を取り上げられた持ち主達が大騒ぎしていた。

「・・・まさか、着ている服まで取り上げられるとは・・ひどい。しくしく」
下着姿になったウンディーネは泣いていた。

外
「うーん。この『霧の羽衣』さわり心地バッチリ。最高！！そうだ、今の服何日も着てて気持ち悪いから着替えよう。えっと、シンイチ。下着も出してね♪」
「し、下着？？」
「だってナムールの街までまだ遠いし・・お願い☆」
「わかったよ」
「もちろんきれいな下着だよ」
「・・綺麗な女物の下着・・でろ！！」
道具袋に触れた物を掴んで出す

「・・・えっちだね。こんなの着れないよ！！というかサイズが合わない」
「・・・・」
取り出したのはセクシーな大人用の下着だった。当然、胸のサイズが大きすぎる

「なんでこんなのだしたのカナ？？ボクの胸に対するあてつけ？」
黒いオーラをまとうメアリー。
「ち、違うよ。『綺麗な下着』なんていうから、こんなゴージャスな下着が出たんだよ」
「バカ！！新品の下着っていう意味だよ！！」
「ご、ごめんなさい」

魔王城

「しくしく・・・なんで私ばっかり・・・もう勘弁してくださいよう・・」
素っ裸で泣くウンディーネ。

外

「でも、使い方がわからないと不便だよね。この『天空の風石』ってどう使うんだろう？」
「ああ、それはね。空を飛べるアイテムだよ。私の物だけど、あげるよ」澄んだ声がする
「え？すごいじゃん。・・・てか、キミだれ？」
いつの間にか、目の前に小さい妖精が浮かんでいた。
「初めましてだね。キミが魔王の後継者？そしてそっちの拗ねてるキミが勇者君？」
「えっと・・・？」
「あ、ごめん。私は四大魔公の一人シルフィールドの分身。シルフと呼んでね」

「「えええええ？？？」」シンイチとメアリーが声をあげる。
「あはは。そんなにびっくりしなくてもいいよ」シルフが笑う
「ど、どうやって道具袋から出たんだ！！！」
「ああ、魔法袋の物を取り出すときに中とつながるでしょ。その時に一緒に出たの。空気を扱う私しかできないけどね」
「ボ、ボクたちに仕返しするの？ボクは強くなったんだぞ！！！」
女神の杖を振り回しながらメアリーが言う。

「あはは。そんなに警戒しなくても。私はね、今度から勇者君のお供をする事になったんだよ、よろしく」
「「え？？」」
「これから私は役に立つとおもうよ～。」
にっこり笑うシルフ

「なるほど。魔王城のシルフィールドは、魔国に対してもう愛想が尽きているわけなんだ」シンイチ
「うん。せっかく魔族の国を作って何か別の社会を作るのかなとおもったら、結局人間と同じなんだもの。戦争と支配ばかり。自分達は奴隷はいやだ～なんていっておいて、人間捕まえて奴隷にするとか。そんなの同じじゃん。もう協力するのも潮時かなとおもって。そろそろ滅んでもらって、新しい事を始めて欲しいんだよ。」
「・・でも、キミは風と滅びのシルフィールドなんでしょ？一緒にいたらボクたちも滅ぼされるんじゃないの？」
「興亡一体だよ。作った国はいつか滅ぶべきなんだ。私達『風』は何億年もこの世界を見てきた歴史の生き証人なんだよ。『風化』という言葉があるように、万物は滅びる。それは、次に新しいものを生むために必要な事なんだよ。正しくは『風と滅びと新生のシルフィールド』と呼んでもらいたいね。私は期待しているんだ。勇者君と魔王ちゃんがこの世界で新しい何かを作り出す事をね。それが古くなって硬直化するまでは滅ぼさないよ」

「・・まあ、今すぐ俺たちに危害を加えないなら、一緒に来てもいいんじゃない。小さいし、危険なさそうだし」
「そうだね。まあいいか」
「決まりだね。楽しい旅になりそうだよ」
旅の仲間にシルフが加わった。

「それじゃ、空を飛んでナムールの街までいこうか。」
「え？」
メアリーがシンイチの手を取る。すると、二人が浮き上がった。
「ち、ちょっとまって。怖い怖い～」シンイチ
「あはは。気持ちいい～」メアリー
「そうでしょ。風になって世界を巡るのって気持ちいいんだよ」シ

ルフ

一行はナムールの街まで飛んでいった。

各国

フリージア皇国
「ふふふ。うまくいったようだな」国王。
「ええ、これが魔王からいただいた『呪力条約紙』です」
アーシャが取り出して渡す

「ふむ・・なに！！！！どういうことだ？」
「何か？」
「魔王の署名はあるが、血判が消えておる。これでは条約が発効しないぞ！！！」
「なんですと！！」
アイーシャが見ると、確かに押されていた血判が消えていた。
「もしや、謀られたのでは？？」
宰相が震える声で言う。

「い・・いや、この呪力条約紙は本物です。私達のこめた魔力も残っています。しかし、私達の血判も消えています」メルト
「確かに・・我等の署名した条約紙だ。両方の血判が消えているという事は・・」国王
「魔王に何かあったということ。もしや、あの勇者が魔王を倒したのでは？？」ノーマン
「そんな、ありえない」メルト
「ええい！！！！なぜ勇者が魔王に殺され儀式が終了するとこまで見届けなかったのだ！！」国王
「も・・申し訳ありません」アーシャが頭を下げる。

「とにかく、この事が他国に洩れたら・・・」
「い、いや。元々魔王を倒すためという名目だったはず。だから目

的が達成されたということで・・」宰相
「馬鹿者！！！魔王が倒されたとて、次の魔王が攻めてきたらどうする。わが国の魔国との平和条約すら魔王の死で失効するのだぞ！！他国も魔族の攻撃がおさまらないと、我が国に対して不信感を持つ。最悪、魔国と他国連合で挟み撃ちになるぞ！！」
「そんな・・」
「緊急会議じゃ！！」

急遽国内の貴族が集められ、会議が開かれる事になった。

数日後

森の国ミール
「ええい。フリージア皇国からの使者はまだか？」
ミール王が声を荒げる。
「まだ魔国から帰って数日です。そんなに早く使者はこないのでは？」王子が諌める。
「何を生ぬるい事を言っておる。魔王が倒されたのなら魔族がコロニーから撤収してもよいはずじゃ。最悪、勇者が死んだ場合でもコロニーから魔族が出ないように条約を結ぶとフリージア国王は約束したはず。しかし、未だ魔族は暴れまわっており、略奪や誘拐が横行しておる。１００万アルの大金と森の杖を提供させておきながら、今までと変わらないではすまさんぞ！！」

「・・使者をこちらから出されてみれば？」王子
「そうじゃな。光の国ミラー、海の国アトルチス、大地の国ガイルとも提携して詰問状を出そう。場合によっては、連合してフリージア皇国を討つ」
「ち・・父上、戦争をするのですか？」
「場合によってはじゃ。資金を国債で提供してよかった。踏み倒し

てでもあの国に一泡ふかせてやる。戦争に勝てばただの紙切れじゃからの」

人間の国にも不穏な雰囲気が流れだした。

各国の間で使者が行き交い、どの国も今までと状況が変わらない事が確認され、フリージア皇国に使者団が派遣された。

「貴国は約束したはず。最悪の場合でも魔族の暴虐はおさまるはずと」森の国の代表

「は・・しかし」フリージア国宰相。中年太りの体は汗でぐっしょりと濡れている

「しかしではない。我等が国の魔族コロニーはむしろ拡大しておる。どういうことなのかな?」光の国代表

「まず、魔国とどういった話し合いだったのだ。魔王と勇者パーティで勝負を決めると説明され、魔王が勝った場合は魔族コロニーの自治権の認証。そして、勇者が勝った場合は魔族コロニーの撤退。そして、どちらにしても貴国が今後魔国に対しての盾となるといった取り決めだったはずだ」海の国代表

「もしや・・我等に何か隠している事でもあるのかな?とりあえず、魔国との間に結ばれた呪力条約紙を見せていただこう」大地の国の代表

「いや・・今は手元には」宰相

「我等を愚弄するか???ならば我等にも考えがある。貴国に差し出した国債証書は無効にする。そして、我等は連合して宣戦布告をさせていただこう」大地の国の代表者が最終通告をつきつける。

「わかりました・・」観念して、呪力条約紙を見せるフリージア宰相。

「これは・・何という事だ。最初から勇者が勝つ事は考えられておらぬ内容ではないか！！！」森の国使者
「魔王に勇者を生贄として道具袋を渡す。フリージア皇国には平和条約の継続。そして魔族コロニーの自治化のみで、勇者が勝った場合の撤退など何処にも盛り込まれておらぬ！！」海の国使者
「ひどい内容だ・・勇者と人質を生贄にして差し出して平和をもたらそうなどと。」光の国の代表
「・・・貴国に魔国との交渉をすべて任せていた我等が愚かだった。一定の約定が結ばれれば、徐々に奴隷とされた者たちの解放も交渉すると貴国はいっていたが、平気で王族を奴隷に差し出す国がその様な事をするはずもない」大地の国の代表。

「・・・」フリージア宰相は無言
みな、それぞれの代表にも、魔族の攻撃で死んだ知り合いや、奴隷として連れて行かれた親族がいた。

「・・・それで、結果はどうなったのだ。いや、この呪力条約紙の状態を見れば、予測が付くがな」森の国の代表
「わ・・我等も予想外の結果なのです。あの惰弱な勇者がどんな卑怯な方法を使って、魔王陛下を害したのやら・・」
宰相が焦って言う

「惰弱だと！！！！」
「・・・卑怯だと！！」
各国代表が怒気を募らせる。

「・・惰弱で卑怯なのは貴国だ。勇者ではない。わが国は勇者が帰還したら、最大級の敬意をもってもてなす。我等が救世主としてな」
森の国の代表

他の国の代表も頷く。

「・・・我等は大使として、勇者帰還まで滞在させていただく。もし勇者に仇なす時は、我等がすべてを敵に回すと心得よ。それから、貴国に差し出した国債証書と国宝は返還していただこう。あれは『勇者』に対して差し出した物であって、貴国に対して出したものではない」

「・・はい」フリージア国宰相はがっくりと肩を落とした。

金貨

ナムールの街に着いたシンイチたち。夕方になっていた。
「やれやれ。これで今日から野宿しなくて済むね。とりあえず、お腹すいたから食べようよ」メアリー
「ああ。しかし賑やかだなあ。」
街は相変わらず多くの種族で賑わっていた。
料理屋を探して街をあるく。

「ねえねえ、あそこがおいしそうだよ」メアリーが指をさす。立派な建物で、高級そうな料理店だった。
「ちょっと高級すぎないかな？」
「いいじゃん。どうせお金なら魔王城から出せばいいし」
ポンポンと道具袋を叩いて言うメアリー。
「とりあえず出して見ようか。１アル出て来い」シンイチが道具袋から１アル金貨を出す。
「うん。問題ないね。それだけあれば足りるはずだよ」メアリー。
「私は食べる必要はないけど、いい匂いを嗅ぎたいわね。それが私の力になるんだよ～」シルフ
「そっか。ならここでいいか」
三人で中に入っていった。

「ふー。満足」シンイチ
「おいしかったね」
高級な肉料理、魚料理、フルーツのデザートまできれいに食べた。
「そういえば、通貨の単位ってどうなっているの？」シンイチ
「アルが金貨で、その１／１０の価値がギル銀貨。さらにその１／１０の価値がジル銅貨。」
「一般の人の収入は？」

「んー？平民の一般的な家庭で３０アルくらいかな？」

「だいたい１アルが一万円で、１ギルが１０００円、１ジルが１００円くらいか・・」

「今食べた料理が二人で９ギル５ジルだね。」

「そんなもんか。・・そういえば、その『女神の杖』って１００万アルって言ってたっけ？」

「そうだよ。この世に一つしかない伝説の杖だもん。でも、その袋の中にはそんなのゴロゴロ入っているんだけどね。ボクが着ている『霧の羽衣』と『天空の風石』もそれ位するし。そう考えたらボクたちってすごいよね！！」

「すごいというか・・メアリー３００億円ぶら下げて歩いている事になるの？」

「キャハハ。もしバレたらこの街中の人に追っかけられるかもね」シルフ

「・・・今日はもう服屋とか閉まっているから仕方ないけど、明日街をまわって必要なものを買おう。メアリーは街中でその服を着るの禁止！杖も風石もなるべく道具袋にしまっておこう」シンイチが言う。

「え～。この服気に入っているのに」メアリーが膨れる。

「国宝ぶら下げて街を歩いていたら命がいくつあっても足りないよ！！」

「その時は皆ぶっ飛ばしちゃえば？」メアリー

「そうだそうだ！！！私も協力するよ」シルフ

「ダメだ・・メアリー魔王になりつつあるよ」

シンイチは頭を抱え込んだ。

料理店を出た後、街で一番大きな宿に泊まった。

「うわ・・ふかふかベッド。王宮みたいな豪華な部屋だね～」メアリーがはしゃぐ
「・・・なぜに同室。しかもスイートルーム」
部屋の中央には大きなベッドがあった。

「ねえねえシンイチ。この部屋おっきなお風呂も付いているよ。ボク入ってくる」
さっさとバスルームに行くメアリー。
「・・・無防備すぎるよ。まあ、子供だから仕方ないか」
とか無意味に冷静さを装うシンイチだった。
「・・覗く？」シルフ
「・・子供には興味ありませんですハイ」シンイチ
「なぜか体温あがっているけどね～」シルフがからかう。
「ねえシンイチ。また新しい下着出して持ってきてね～」バスルームからメアリーが呼びかける。
「あ、また体温が上がった」
シンイチは無表情に新品の下着を出してバスルームに投げ入れた。

交代で風呂に入って、落ち着いた二人。
「ねえ、そういえば、魔王城の中にお金っていくらあるんだろう？」メアリー
「そうだな。確認しておこう。アル全額でろ！！」

とたんに、部屋中が金貨で埋まった。

魔王城内　酒場

「クッ・・金が儲かるのはいいが、それ以上に酒が高くなるのはな」
魔王城内の店舗エリアの道具屋店主。
「まあ、お偉方がどうにかしてくれるだろうぜ。俺らに出来るのは

儲けることだけだぜ」
武器屋の店主が言う。イフリート派、ケルビム派両方から飛ぶように武器が売れていた。
「だがなぁ。もうそろそろ品物がなくなって来てるんだ。はやくどうにかしてくれないと。ま、儲かるからいいけどな」
防具屋の店主がぼやく。
なんだかんだといいながら、彼らはこの特需を喜んでいた。

「兄ちゃん。勘定だ。いくらだ？」
「５０アルになります」酒屋のアルバイト魔族
「けっ。いい値段してやがるぜ。ほらよ・・なに？？？」
道具屋の店主が財布を開いて驚愕する。パンパンに膨れていたはずの財布から、金貨が消えていた。

「ど、どういうことだ！！！」
武器屋と防具屋の店主も財布を開いて驚く。綺麗さっぱり金貨が消えていた。
「店長・・大変です。金が消えています！！！」
酒屋のアルバイト店員も異変に気がついて騒ぐ。
「い・・一体何が起きているんだ。これ以上何が起こるんだ」
魔王城の中は大騒ぎになっていた。

「え？？メアリーどこ？？？」
焦ってメアリーを探す。
「んー。この辺に埋もれているみたい」シルフ
あわててメアリーを掘り起こす。
「・・ぷはっ　危うく金貨に埋もれて死ぬとこだったよ～」メアリー。
「・・そういえば、最初に召喚された時もアルを出したら部屋中金

貨だらけになったっけ。」
「金貨だらけどころじゃないよね。この広い部屋半分埋もれているもん」

「・・こんなにいらないなぁ。なくなったらまた出せばいいし」シンイチ。金貨を一つかみ取る。
「そうだね」メアリーも両手におさまるぐらい金貨をとる。
「それじゃ『収納』」金貨を収納した。

魔王城
「うひゃひゃ。金貨が降ってきているぜ！！」
魔王城の庭に金貨がどんどん降ってきていた。
兵士が必死に拾い集める。
「ま、まさか、あれって俺たちの金貨じゃ？？」
いきなり今まで貯めていた金貨がなくなって呆然としていた商人達が、我勝ちに金貨を回収しようとする。
庭では魔族同士の醜い争いが起きていた。

その様子を見て大笑いするシルフィールド
渋い顔をしているウンディーネとノーム。
殺気だっているイフリートとケルビム。
「もう限界です。何とかしないと秩序を保つことすらできません！！」ウンディーネが叫ぶ。
シルフィールド以外の魔公たちも同じ思いだった。

皇国

フリージア皇国城

数日前から国中の貴族を集めて対策会議をしているが、前向きな意見は出てこなかった。

「そもそも、このような卑怯な策をすべきではなかったのだ。勇者に対して誠実に接して、魔王を倒す事を目的としておれば、今頃は我等が魔国を征服することも可能だったはず」

「そもそも、このような策を立案したメルト王女に責任がある。」

「何を言うか！！！勇者があのような惰弱でさえなければ、我等も勇者に対して違った接し方があった。このような結果など誰も予想できん」

「現に魔王は倒されたではないか！！」

「そもそも、勇者が倒したとは疑わしい。あの人質となったメアリーとかいう平民の子が倒したのでは？」

「勇者が倒したと考えるよりは可能性があるが・・」

「誰も彼女に説得しなかったのか！！人質として役目をはたせと・・」

「いや、そもそも。勇者の残した伝説の武器や防具があるなら、アーシャ殿やノーマン殿が勇者と協力してれば充分勝算があったはず、

始めからそうしておれば、周辺諸国の信頼も勝ち得たものを・・これでは、わが国のみが周囲から孤立するぞ！！！」

「まず魔国の情勢を探るべきでは・・」

「いや、こちらから先手を取って周辺国に攻め込むべきだ！！各国の国宝を返還したとしても、前勇者の装備があれば充分勝算はある」

「・・それよりも、勇者や人質に対して手を打つべきでは？どちらが魔王を倒したにしても、間違いなく怒り狂って復讐に来るぞ」

「だが、勇者に対して手を出すと、周辺諸国が宣戦布告をしてくる・・」

「勇者とメアリー王女に対して謝罪して・・」

「いや、先手を取って・・」

「そもそも、我等に相談もなく国宝や国債を返還した弱腰な宰相殿にも責任が・・」

「勇者達が怒っているのは、裏切りをしたメアリー王女や勇者パーティに対してだろう、責任を取ってもらおうではないか」

議論百出。小田原評定。

誰もが不完全な情報を元に憶測で意見を言う。

国王や宰相、メルト、アーシャ、ノーマンもいい考えが思いつかない。

それぐらい勇者が魔王を倒すという事は予想外であった。

誰もが自分達に責任が向かないよう必死に誰かに責任をなすりつけ

ようとしていた。

会議がまとまらないまま、何日にも及んでいた。

フリージア城のテラス

「・・メルト王女様。お疲れのご様子」アーシャが声をかける

「いえ、アーシャ様こそおやつれになって・・なんとおいたわしい。これというのも、あの憎き勇者が余計な事をしでかしたから」メルト

二人とも連日の会議で責任を追求され、疲れきっていた。

「ああ、計画どうり勇者が殺されていれば、世界に平和が訪れ、愛しいアーシャ様と結ばれていたのに。そして、いずれは二人でこの国の王位を継ぐ事も出来たはず・・」メルト

「・・私はまだ貴方を諦めてはおりませぬ。我が愛しの姫。貴方こそ女王にふさわしい。第一王子は言うにおよばず、第二王女、第三王女も国のことなど考えもせず日々遊び暮らすのみ。この国のためには、どうしても貴方が女王になるべきなのです」

「アーシャ様・・」

絶世の美少女と美男子は、物語の主人公のように口付けを交わした。

フリージア城　教会

「ふむ。勇者が魔王を倒すとは、予想外じゃったの」

しわがれた声が言う

「悪いことばかりではありませんね。人類にとっての悪が滅びたという事ですから。マリコル大神官」

ノーマンが声を返す。

彼らは大陸全土に根をはる宗教団体「光の聖霊教」の神官だった。

「じゃがの、魔族の脅威があってこそ、我が教えも光を帯びるのじゃ。民草は一時的には勇者を崇め聖霊を尊ぶが、魔族の脅威がなくなれば神を信じなくなる」

「・・つまり，魔王を倒した勇者は邪魔だという事ですね」
「そういうことじゃ」
「・わかりました。勇者を堕ちた偶像にすべく、探りましょう」
「頼むぞ。わが子よ」

盗難

ナムール街

「うーん。よく寝た」起きて体を伸ばすメアリー
「・・あんまり寝られなかった・・・」シンイチ。目の下に隈が出来ている
「あれ？ベッドが堅かった？ボクには気持ちよかったけど・・」
「・・そうじゃなくて・・」

スイートルームにはなぜかベッドが一つしかなく、二人で寝たのである。
メアリーは子供っぽいが、１４歳の女の子である。ついでに言えば、可愛い。
「あはは。シンイチくん、男の子だね～」
シルフがからかう。
メアリーはわかってなくて首をかしげた。

「よし。今日は買い物だ！！」
「その前に、『霧の羽衣』と『女神の杖』と『天空の風石』は道具袋に入れるよ。持って歩いたら危ないから」
「え～。でも、ボクの着ていた服は洗濯してないし・・」
「道具袋から適当に取り出すよ。改めて街で気に入った服を買えばいいし。えっと、メアリーに似合いそうな服でろ」
シンイチは念じて取り出す。

「・・・メイド服？ボクにこれ着て欲しいの？」メアリー
「どうしてこうなった？」
「あはは、潜在意識に作用したんじゃないの？それがシンイチ君の

趣味か～」
「ち・・ちがう・・と思いたい」シンイチ。
「まあ可愛いからいいけどね。着替えてくるよ」バスルームにいく
メアリー
「あれ？また体温が上がっている。期待でウキウキワクワク？」シ
ルフ
「・・ノーコメント」
「でもね～魔王城じゃ多分一人メイドさんがひん剥かれているとお
もうよ」
「・・・あっ」

「どうして私まで・・」魔王城の廊下でウンディーネの侍女が泣い
ていた。

ポケットに金貨を入れて、ナムールの街を歩く三人
「あ、これいい。この服も可愛い。これも」
「はいはい」
メイド服を着たメアリーがどんどん買い込む。
シンイチは必死になってついていった。
（はあ・・なんか本当に勇者じゃなくて荷物もちのような気がして
きた。まあ、道具袋があるおかげで、荷物が重くならないで助かる
けど）
「あはは。シンイチ。この香水いい匂い。これも買って」シルフ
女性二人の買い物にかける熱意に圧倒されていた。

「ね・・ねえ、そろそろ休もうよ」
「「まだダメ」」
何時間も市場を連れまわされて、疲れきった様子のシンイチ。
二人に付いていこうとするが、つい引き離されていた。

「あっ！！！！」
その時、いきなりシンイチが持っていた道具袋がひったくられた。
「待て！！！」
シンイチは必死に追いかける。道具袋を取られたら破滅である。
「え？」「どうしたの？」
遠くで二人の声がするが、構わず追いかける。

盗人は裏通りに入っていった
「待て！！！ハアハア」
息が切れそうになるが、必死に追いかける。
すると、盗人が立ち止まった。犬耳と尻尾がついている小さい少女のようである。

「ハアハア・・お嬢ちゃん。もう逃げられないよ・・おとなしく・・グッ」
少女に近寄ると、いきなり後頭部に衝撃がきた。後ろから棒で殴られて昏倒するシンイチ。
「アンリ。よくやったぜ。こいつら結構高いもの買いまくっていたから、いい稼ぎになるぜ」
筋骨隆々とした男たちが数人出てきて、道具袋を探る。
「なんだこれ？開かないぞ。でも、触ってみたら何も入ってないみたいじゃねえか！！！！アンリ、失敗したな！！」道具袋を投げ捨てる
「そ、そんな。あたしは確かにその袋に物を入れたのを見たんだよ。」
「うるせえ。役立たずが。もういい。そこの男と一緒に、お前も今日限り売り飛ばしてやる！！」
「や、やめて。奴隷にするのだけはやめて。何でもして借金返すから・・」

「やかましい！！」男たちに縛り上げられるシンイチとアンリと呼ばれた少女。
そのまま袋をかぶせられ、連れて行かれた。

「シルフ、確かにシンイチはこの辺に来たの？」
「うん。シンイチの汗のにおいがこの辺に漂っているから」
メアリーとシルフは見失ったシンイチを追いかけて裏通りに来ていた。
「ここだよ。ここで倒れたみたい。地面に汗が染み付いている」
「・・・でも、シンイチいないよ？。あっ　これは」
地面に道具袋だけが落ちていた。

「ど・・どうしよう。シンイチが行方不明になっちゃったよ・・」
呆然とする二人だった。

奴隷

「どうしよう、どうしよう、シンイチー」
シンイチの名前を呼びながら闇雲に走り出そうとするメアリー
「メアリー落ち着いて」シルフ
「落ち着いてなんかいられないよ。道具袋がなかったらシンイチは無力なんだよ。しかも倒れていたって・・シンイチの身に何かあったら・・」
「落ち着いてってば!!ここでシンイチの匂いは途切れているけど、知らない男達の匂いが残っているから、それを追いかけよう」
「わ、わかったよ。シルフ、案内して!!」
道具袋を掴み、シルフについていくメアリー。

男達はシンイチとアンリを担いで、裏の奴隷取引場に連れて行った
「犬族の女の方は１００アルだな。男は・・ふむ。人族で魔力もないし、容姿もいまいちだ。５０アルだ」
「おいおい、それっぽっちかよ」男達
「そんなもんだ。最近は人族の捕虜が多いから、値崩れ起こしてんだよ。嫌ならいいぜ。奴隷同意書もないし、捕虜証明書もない。こいつらはどうせ誘拐してきたんだろ?俺のとこ以外でさばこうとしたら手が後ろに回るぜ。」奴隷商人
「ちっ　この業突く張りが。わかったよ。その代わり、次はいい値をつけるんだぜ」
「次はもう少しいい奴隷をつれてくるんだな。今日は奴隷市が立つ日だから、これでも色をつけてるんだ。メシ代がかからなくて済むからな」
軽口をたたきながら、男達は去っていった。
気絶から覚めるシンイチ。地下牢に入れられていた。

「またかよ・・でも、今回は膝枕じゃなかったな」
周囲を見回す。人間が半分、魔族や他の種族が半分といったところか
「・・・ごめん」
見た目が１０歳くらいの犬耳尻尾つきの少女が謝ってくる。
「・・さすがに二回目だとムカついてくるけど、まあいいや。キミの名前は？」
「アンリ」
「んで、アンリちゃんは何でこんなことしたのかな？」
「引ったくりをして、死んだ父ちゃんの借金を返せって・・」
「家には病気のお母さんや兄弟がいるってパターン？」
「・・なんでわかるの？」
「お約束。それで、道具袋の中には何もなさそうだったから、俺ごと奴隷にされたと」
「・・・うん」
はぁぁーとため息をつく

「何度経験しても、憎めないよね。自分をハメた奴が仲間に裏切られるのを見ると」
「・・前にもこんな事あったの？」アンリ
「ああ、結構酷い目にあったけど・・前よりマシかな？」
「なんで？」
「なんとなくだけど、助けが来ると期待できるから」
「でも、この奴隷商人の組織『魔獄』って、ナムールの街を取り仕切っているヤクザだよ」
「・・ま、前よりは規模は小さいね」シンイチ
こうなったらおとなしくメアリーやシルフが助けてくれるのを待とうと地下牢の床に寝転がった。
しかし、そんなシンイチの余裕は少し後で完全に吹き飛ぶ事になる。

「奴隷ども、服を脱いで出ろ！！」
人相の悪い鬼族の男が命令する。
地下牢の中の人々はノロノロと服を脱いでいった。
「え・・マジで？」
シンイチがためらっていると、容赦なくムチで打たれた

「いてぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ」
当たり前だがムチで打たれる事など経験した事もない。これほどの痛みは経験したこともなかった
「お兄さん、早く」
一足先に全裸になったアンリが言う
シンイチは転がりながら服を脱いだ。

全裸になり、両足首を鎖でつなげられるシンイチ。
奴隷達の後についていくと、一人一人押さえつけられて、背中に奴隷の印を焼鏝で入れられてた。
(マ・・マジか。魔王の時よりピンチか？)
逃げようとするが、周囲は屈強な男に囲まれている。
シンイチの番になり、必死にあがくが、取り押さえられて奴隷の印を押された。

「ぐっ・・熱い。痛い」シンイチ
その後、奴隷達は馬車でオークション会場まで運ばれた。
隣ではアンリがずっと泣いている。

「あんた達も魔族の捕虜になった口かい？」人間族の中年男が声をかけてくる
「いや・・俺たちは、街でチンピラに捕まえられたんです」シンイチ
「そうか。不運だったなあ」
「貴方はどうして奴隷に？」

「おれっちは海の国アトルチスの漁師でね。運悪く魔族のコロニー近くまで船が流されて、つかまっちまった」
「そうですか・・」

「まあ、捕虜証明書があるから、何年か奴隷をすれば故郷に帰れるんだが。しかし、あんたらみたいな不正につかまった奴隷は国の保護もないからなあ」
「国の保護？」
「ああ、借金が返せなくなった奴、自分で自分の身を売った奴、犯罪をして奴隷に落とされた奴、捕虜になった奴なんかは、奴隷の期間が決まっているんだよ。ちゃんと保護されていて、期間が終われば解放されるということ。だが、不正に捕らえられて奴隷にされた奴は裏でオークションにかけられるらしい。そうなったら期間なんかないからな。永遠に奴隷だよ」
「そんな・・・」
「まあ、兄ちゃんたちも強く生きろよ。そのうち勇者が魔王を倒してくれて、魔国なんかぶっ潰してくれるさ。そうなったら、奴隷から解放されるだろうよ」
「・・・」
自分がその勇者だなんて言えなかった。
「そうだ。勇者様一行がこの街を出て2週間。今頃勇者様が魔王を倒しているかもしれないぜ。」
「勇者万歳」
儚い希望にすがる奴隷達。
「・・・」
シンイチは初めて生で勇者に対する期待と言うものを感じた。

（この人達・・いや、魔族に虐げられている人達には、国が頼りにならない以上、勇者だけが希望なんだ。たとえそれが幻想であっても。どんな方法であれ勇者である俺は魔王を倒してしまった。だけ

ど、それだけじゃこの人達は救われない）

「・・・きっと、勇者が助けてくれますよ。噂じゃ、魔王城ごと魔王が消えてしまったとか」

「本当かい兄ちゃん？そいつは嬉しい事を教えてくれるねぇ」漁師が喜ぶ

（どうせ数日もしたらこの街にもその噂が広がるだろう。この人達の希望になれば）

シンイチの意識で何かが変わり始めた。

魔砲

「はあ、はあ、ここに本当にシンイチをさらった連中がいるの？」
メアリー。
シンイチを探して街中を走り回っていた。
「間違いないよ。大気中に存在している分身たちも集めて探し回ったもん」シルフ
何百体も分身を召喚して探したシルフ。

「よし。とにかく突撃！！！」
「あっ、待ってよメアリー」
メアリーが目の前の汚い家に突入する。
中では男達がシンイチ達を売った金で酒盛りをしていた。

「お前たち！！！シンイチをどこにやったんだ！！」
いきなり踏み込むメアリー
「な？誰だお前は？」
「誰でもいいだろ。シンイチを返せ！！」
「ぐふふ。威勢のいいお嬢ちゃんだ。それにめったに見れないくらいの上玉だ！！」
数人の男たちがメアリーに迫る。
「な、なんだよ。近寄るな。大地の極熱よ。沸きあがれ。『ボルケーノ』！！」
しーん

「？？？？なんだ？なにをするつもりだったんだ？」
男達がキョトンとしていた。
「そ、そういえば、『女神の杖』は道具袋に入れてたんだった・・」
メアリー

「・・だから待ってって言ったのに・・」シルフ
「何をするつもりだったか知らねえが、残念だったな。今からおじちゃん達といいことしようか」
酒臭い男達に捕まるメアリー

「イヤ!!シルフ。助けて!!」
半泣きになりながらシルフに助けを求めるメアリー
「・・残念だけど、私も魔力切れだよ・・街中分身たちと探し回ってたんだから・・」
「そ、そんな」

「おい!!今からこいつを売り飛ばしにいくか。今ならまだ奴隷市に間に合うだろう」
「その前に楽しもうぜ!!」
酒に汚れた手がメアリーに触れようとしていた。

「イヤーーー!!」メアリーの絶叫が響き渡った。

メアリーの絶叫と共に、抑えていた男と近寄ろうとした男は吹っ飛んだ。
「て、てめえ。今何しやがった」
「え?今の何?」メアリー
「そうだった!メアリーは魔王の後継者だったね。あの技が使えるはずだよ。メアリー、魔力そのものを放出して?」シルフ
「え?どうやるの?」
「いいから、何も考えずに魔力だけどかーんと出してみなよ」シルフ

「てめえら、何ごちゃごちゃ言ってやがんだ。お前等も倒れてないでさっさとふんじばれ!」

倒れた男達も起き上がって、メアリーに迫る
「え、えっと、魔力をどかーんとだす・・」メアリーが魔力を放出する
「「「「ぐぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」」」」
周囲の男達は全員吹っ飛んだ。

「ねえ、シルフ。これって何？杖もないのに魔法が使えたの？」
「正確には魔法っていうより魔力の放出だけどね。魔将クラス以上魔力が強くないと使えないんだよ。おめでとう『魔獄砲』が使えるようになったね。第二の魔王さん」
「『魔獄砲』かあ。えい！！」魔力を放出する。床でうめいていた男たちが失神する。
「・・・メアリー。失神させてどうするのよ。シンイチの居場所を聞きだすんでしょ」
「あっ・・」
すっかり忘れていたメアリーだつた。

その後、チンピラたちの家を漁ってみる。
「ねーシルフ。何かある？」
「うーん。こっちに盗品とか誘拐した人の持ち物とかおいてあるけど、ろくなものがないなぁ。あ、これは？」
「何か使えるのあった？」
「えっとね。『家事の杖』があったよ。これなら、補助魔法くらいなら使えるんじゃない？」
「今はそれで充分だよ。えっと、こいつがリーダーっぽかったね」
失神しているチンピラを椅子に座らせて、ロープで縛り上げる。
「よし。『知識共有』の魔法を使って、シンイチの行方をさぐろう」
シルフ
メアリーがチンピラに近づく。途中で動きが止まった。

「・・・どうしたの？はやくおでこをくっつけないと」
「・・気持ち悪い」メアリー
「シンイチだったら平気だったじゃない。」ニヤニヤしてシルフが言う
「シンイチだからだよ。気持ち悪いから顔を布で覆って」
「はいはい」
シルフがチンピラの顔を布でおおい、メアリーが魔法をかける。失神していたチンピラは、痛みで叫び声をあげた。

「よし。シンイチは奴隷商人に売られたんだね。そして、今日は奴隷市が立つから、郊外の奴隷市場に運ばれ・ると」メアリー。
「すぐに行こう。っとその前に、さっきの市場であれを買わないと。今から行くのは非合法の場所なんだから」
「でも、さっきお金使いすぎて、あんまり残ってないよ・・」メアリー
「こいつらから取り上げればいいんだよ」シルフ。
二人はチンピラたちが貯めていた有り金全部を奪っていった。

奴隷市場

「証明書がある奴隷はこっちだ」
漁師やその他、半分ぐらいの奴隷が兵士達に連れて行かれる
「兄ちゃん。希望を捨てずにがんばるんだぜ」
シンイチの肩を叩いて漁師は出て行った。

「残りの奴隷はこの服を着てこっちにこい」
奴隷市場の一番奥、古くてボロボロの建物に連れて行かれた。
そこには広間があり。かなり多くの席があった。

「兄ちゃん・・これからどうなるのかな」
アンリがおびえてシンイチの手を握る
「兄ちゃんもわからないよ・・メアリー、シルフ。早く助けに来てくれ～」
必死に助けを祈るシンイチだった。

競売

すべての正規の奴隷市が終わった後の深夜、裏のオークションが始まった。
「それでは、オークションを始めます。今日はいきのいい者たちが沢山入荷されました！皆様方のきっとよい奴隷となるでしょう」
司会の男が挨拶し、裏のオークションが開催された。

今回は誘拐されて奴隷オークションに出されたのは１０人だった。
年齢も性別もまちまちだが、皆粗末な服を着せられているだけの姿だった。
それぞれの首から札を下げられている。
アンリは八番、シンイチは十番だった。

「さあさあ、皆様じっくりとご鑑賞お願いします」
１０人の奴隷は壇上に上げられ、客達の視線にさらされた

「一番の女はなかなか美しい・・」
「五番の男はたくましいわね・ふふ。きっと私のよい僕になるわ」
「八番の子犬ちゃん。ふふ。僕のペットにいいなぁ」
それぞれ好き勝手に品評する。

シンイチは客の目を見てゾッとした。
奴隷達を舐めまわすような目で見ている。
まだペットを見る目の方がマシだった。

「さてさて、皆様方、お気に入りの奴隷は目に止まったでしょうか、それでは、それぞれの者に自らをアピールしてもらいましょう。そ

れから、このオークションでの開始価格は２００アルからです。売れ残った奴隷は、最後にこのオークションの目玉、公開処刑ショーの生贄にします。さあ奴隷達、自らを助けていただけるご主人様方に、命を賭けて慈悲を求めなさい！！」
奴隷達は恐怖に顔を引きつらせた。

「い、一番。ミール国のマチルダです。お、お願い。助けてください」
素朴な村娘のような容姿の女が、必死にアピールする
「さあさあ、この哀れな美女に救いの手を」
「２１０アル・・」
「３００アル」

狂気のオークションは進んでいった。

「ふふふ。奴隷達は必死だな」太った男が特別席から見下ろす
「この形式を取るようになってから、奴隷たちの反抗は少なくなったようです。何せ、ご主人様は命の恩人ですからね。マハーラ伯爵」
若くて美しい男が返答する。
「しかし、半年に一回で１０人とは、まどろっこしいのう。もう少し増やして、『魔獄』からの上納金を増やせぬかの。ラグル」
「ははは。あまりやりすぎると『魔王城』にバレますよ。そうなったら厄介ですからね」
「それもそうか。くくく」

マハーラ伯爵とよばれた男はこの街の領主であり、ラグルと呼ばれた男はナムールの街の裏を取り仕切るヤクザ『魔獄』の首領だった。
「しかし、最後の男に２００アル以上の値が付いたらどうするのじゃ？オークションの締めである公開処刑ができずに、奴隷達に恐怖と恩を植えつける事ができなくなるぞ」

「ふふふ。そうならないように一番価値のなさそうな男を最後に回したのですが・・一応手を打っています。ご安心ください」
「おぬしのやる事にぬかりはないか。半年に一度の楽しみじゃ。ゆっくり見物させていただこう」
オークションはどんどん進行していった。

「八番！！哀れなる犬族の少女です。皆様の慈悲を！！」
アンリが壇上に上げられる
「ア・・アンリで・・す」恐怖のあまり声が出ない。そのまま座り込んで泣き始める。
客達はその様子をみて嗜虐心をそそられる
「もっとはっきりと言えーーー」
「なにいっているかわからねえぞーーー」
「ハアハア。」
「かーわいそ。」
客達が騒ぐ

シンイチはその姿をみて怒りに拳を握り締めた。

（くそ・・）
出来れば暴れだして助けてやりたかった。しかし、奴隷オークションが開始されてから、シンイチ達奴隷は暴れないように、兵士によって首に剣を突きつけられていた
（道具袋さえあれば皆をすくえるのに。メアリー、シルフ。来てくれないのか・・）
客達を見回しても、二人の姿はどこにもなかった。

９番の奴隷が売れ、次はシンイチの番になる。
壇上に上がろうとすると、兵士に止められた

「お前はこうしてから壇上に上がれ」
その言葉とともに、頭から腐った生ゴミがぶちまけられた。
「なっ！！」
「いいからあがれ。せいぜい値が付くように頑張るんだな」
兵士たちがあざ笑う。

「さあ皆様お待ちかね。最も貧弱な人間の少年。果たして値が付くのでしょうか。素敵な香水をまとって登場です」

体中に生ゴミを付けられたシンイチが壇上に上がる
観客は爆笑していた。

このオークションに2回以上参加している客は、最後の奴隷は公開処刑ショーの生贄になる事が決定しているのを知っていた。
新規の客が間違って値をつけないよう、このような事をするのだった。
シンイチに思いつく限りの罵声を浴びせる客達。
シンイチは無言で仁王立ちしていた。

解放

「さあさあ、誰もいないのですかな？」司会の男が煽る
「３００アル」値をつける声がした。

一瞬静まる観客達。値をつけた魔族を見る。
首に金のアクセサリーをしている全身を筋肉に覆われた男だった。
シンイチに向かってウインクする

シンイチは全身に悪寒を感じた。
（ま・・まさか、ウホッな人？）

「ははは、慈悲ぶかきお客様がいらっしゃった。さあさあ、他にいませんか？」
「４００アル」最前列の男が値をつける。司会の男と目配せする。
この男は主催者側のサクラで、最後の奴隷の値が付いた場合、競り落としてその場で公開処刑のショーとする役割をしていた。
「５００アル」筋肉男が言う
「６００アル」最前列の男
「１０００アル」
「・・・・１５００アル」
「１万アル」
「・・・・」最前列の男が様子をうかがうように後ろを向く。視線がラグルと合う。

いつの間にか、会場は異様な雰囲気で静まり返っていた。
「２万アル」ラグルが値をつける
「１０万アル」筋肉男
「・・・き、貴様、いい加減にしないか！！。空気を読まないか！

！」
ラグルが痺れを切らしたように言う
「そうだ！！」
「俺たちはラストのショーまで見物に来てるんだ」
客達も騒ぎ出す。

「妙な事を仰る。このオークションでどのような値をつけるかは客の勝手のはず。貴方はオークションを否定するのか？」
落ち着き払って渋い声で言う男

「ぐっ・・・そもそも、なぜこのような男に１０万アルなどという値をつける。このオークションを侮蔑しているのか？」ラグル
「ははは、こやつには１０万アルどころか、一億アル以上の価値がある。よければ、我輩が証明してみせようか？公開処刑ショーよりはるかに面白い見世物になる事を請け負おう」
「・・いいだろう。もし我々が納得できなけば、お前が１０万アルを支払った上にその男を処刑させてもらおう」
「いいだろう」
筋肉男が立ち上がり、壇上のシンイチに近づいた。
「まて、何をたくらんでいる」ラグル
「人聞きの悪い。手ぶらで何ができると？」
「いいだろう。その奴隷の価値を証明してみせよ」
筋肉男は壇上に上がった。

近づいてくる筋肉男を見るシンイチ。何度みても覚えがない。
「ふふふ、やっと会えた。」
いきなり抱きついてくる。シンイチは泣きそうな顔で叫び声をあげた。
「う、うわわ。抱きつくな。俺にはそんな趣味は・・」

離れるシンイチ。
「もう。つれないなぁ。せっかく助けに来て上げたのに」
「え？」
筋肉男がアクセサリーを外すと、左肩にシルフを乗せ、右手に道具袋をさげたメアリーが現れた。
数刻時間を遡る。

「あった。これだよ。姿を変えるアクセサリー。」
先ほど買い物をした市場で見つけるメアリー。
「値段は・・１４０アル？よかった。ギリギリセーフ」シルフ
先ほどのチンピラの知識で、裏オークションに入場するのに身分証と入場料１０アルが必要な事がわかっていた。
身分証はチンピラ達が持っていたが、持ち金とチンピラから奪った金が足りるかどうかは微妙なところだった。
「急いでいくよ！！」
オークション会場に向かう二人。

身分証を持っていたチンピラの姿に変える。道具袋も体に密着させて姿を消した。
裏オークション会場に入場するメアリー。

「シンイチ！！。待ってて。今助けるから」
奴隷として壇上に上げられたシンイチの傷ついた姿をみて、思わず周囲に魔獄砲をぶっぱなそうとするメアリー。

「メ、メアリー。落ち付いて」姿を消したシルフがなだめる。
「落ち付いてなんかいられないよ。シンイチ！！」
「この会場にいる兵士はプロだよ。騒ぎを起こしてもまず奴隷を確保しようとする。シンイチを人質にとられたらどうしょうもないよ」

シルフ
「じゃあ、どうすれば・・」
「とりあえず、シンイチが壇上に上がった時に近づこう。作戦は・・」
シルフが作戦を練る

「いい、堂々としているのよ」シルフ
「わかった」メアリー
シンイチが生ゴミにまみれて壇上に上がったとき、怒りで魔力が暴走しそうになるのを必死で堪える。

「ははは、こやつには１０万アルどころか、一億アル以上の価値がある。よければ、我輩が証明してみせようか？公開処刑ショーよりはるかに面白い見世物になる事を請け負おう」メアリー扮する筋肉男
「・・いいだろう。もし我々が納得できなければ、お前が１０万アルを支払った上にその男を処刑させてもらおう」
「いいだろう」
メアリーは立ち上がり、壇上のシンイチに近づいた。

奴隷オークション会場
「メアリー！！」
「シンイチ！！」
壇上で抱き合う二人。シンイチは生ゴミの異臭を放っていたが、メアリーは気にならなかった。

「くっ。貴様達、何者だ！！」マハーラ伯爵が立ち上がって叫ぶ。
静かに離れる二人

「俺はお前達を滅ぼす勇者だ！！」シンイチ

「ボクはあんた達を滅ぼす魔王だよ！！」メアリー
「そして私は二人をサポートするマスコットかな？」シルフ

「ふざけるな。奴等を殺せ！！」ラグルが叫ぶ。兵士達がおしよせる。

シンイチは道具袋を開けて、魔方陣に右手を突っ込み、左手を床につけた。
「メアリーとシルフと奴隷達を除いてこの建物全部を収納」静かに念じるシンイチ。
三人と奴隷達を残し、オークション会場がこの世から掻き消えた。

更地になった建物のあった場所。
シンイチ達と奴隷達が立っていた。

「おっと、これも入れておかないとな」シンイチが付けられた足の鎖を道具袋に入れる。
「しかし、間に合って本当によかったよ。」メアリー
「助けに来てくれてありがとうな」シンイチ
「ボクにいっぱい感謝するんだよ」メアリー
「私にもね。シンイチを探し出したのは私なんだから」シルフ

「ああ、ありがとう。当分二人に頭が上がらないな」
「当分じゃなくてずっとだよ～」メアリー
「今までと変わらないね～」シルフ
「あはは、そうかもな」シンイチ

不安から解放されて笑い合う三人。

「あ、あの、お兄ちゃん」アンリが近寄ってくる。

「ああ、そういえばお前達の鎖も外してあげないとな」
アンリと奴隷達の鎖を道具袋にいれる。

「ね、ねえ、お兄ちゃん勇者様なの？お姉ちゃん魔王様なの？」アンリが聞く。
犬耳と尻尾がペタンと垂れている。
「ああ、そうだよ」優しく笑いかけるシンイチ。
「この子可愛いね。お持ち帰りしたいな～」メアリー

「・・・私達を助けてくれるのですか？」奴隷の一人、マチルダが問いかける。
「ああ、そうするよ。とりあえず街に帰ろう」

その言葉を聞いて、奴隷たちが歓声をあげる
「勇者様！！」「我等が救世主！！」人間の奴隷
「魔王様！！！慈悲ぶかき我等が王！！！」魔族や獣人の奴隷
「「「我等を救っていただき、ありがとうございます！！」」」

奴隷達の感謝の声を聞きながら、シンイチとメアリーは照れ笑いをした。

こうしてシンイチの長い一日は終わりを告げた。

感謝

「それじゃ帰ろうか、メアリーお願い」シンイチ
「任せて。」天空の風石を発動させる。
空を飛んでナムールの街まで帰った。

「それじゃ、今日のところは宿に泊まって、明日ゆっくり皆のことを考えよう」
宿屋の前に降りるシンイチたち。奴隷達に部屋を取り、休ませる。

「・・お兄ちゃん。お姉ちゃん。ありがとう。私は家に帰るね。きっとお母さんと妹が心配しているとおもうから」アンリ
「いまからかい？今日は泊まっていけば？」
「ううん。大丈夫。本当にありがとうね！！」頭を下げて走り出そうとする。
「まって。危ないから送っていくよ」シンイチ
「でも、お兄ちゃんも疲れているのに・・」
「大丈夫だよ。それに今から子供の一人歩きは危ないよ。道具袋さえあれば、俺って無敵だから」
「でも・・」
「しょうがないね。ボクも付いていくよ。飛んでいったら安全だからね。」メアリー
「お姉ちゃん・・ありがとう」
シンイチ達は再び空を飛んだ。

「・・この辺なのか？」アンリの家の近くで降りる。
「うん。ここからすぐ近くだよ」アンリ
「・・なんというか・・」メアリー

ナムールの街の表道りとちがい、ゴミだらけの貧民街だった。
周囲の建物はみなバラックで、いかにも廃材を集めて作ったようなもの。
それどころか、そこら中にみすぼらしい格好の人が道端で寝ていた。

「私達犬族って大した力もないから、皆貧しいんだ。この辺にしか住めないんだよ。」
「ひどい匂い」シルフ
この世界の裏側をみてしまったシンイチ。暗い気分になる
（こうしてみると、日本って平和だったんだな。奴隷制度もないし、貧しい人でもこんなに酷くないし）

「なあ、仕事とかはないのか？」
「魔力が弱い種族は、何も出来ないから低賃金の仕事しかないんだよ」アンリ
（何とかしてやりたいけど・・）シンイチ

「ほら、ついたよ。ここが私の家」
一際みすぼらしいバラックの前でアンリが言った。

「アンリ姉ちゃん！！」
アンリに似た小さな少女が出てきて、アンリに抱きつく
「借金とりにつれていかれて・・うぐっ・・帰ってこないから心配したんだよ。」
「ミスリ、心配かけてごめんね」妹の頭をなでる。
「ううん。かえってきてくれて、嬉しいよ」ミスリの尻尾がパタパタと振られた。

「ねえ、このお兄ちゃんとお姉ちゃんは誰？」ミスリが聞く
「あ、えっと、紹介するよ。私を助けてくれた・・」

「・・ア、アンリが、帰って来た、の？」
奥からか細い声がする
「母さん！！大丈夫？」アンリは一目散に家の中に入っていった。
「どうしようか？」メアリー
「あ、あの。お兄ちゃんたちもどうぞ」ミスリ
「とりあえず、お邪魔しようか」シンイチ達も家の中に入った。
「あ、あなたがたは・・？コホッ」
家の奥のゴザの上では、痩せた女性が横になっていた。
「お母さん、お兄ちゃんは勇者様で、お姉ちゃんは魔王様なんだよ！！奴隷にされそうだった私を助けてくれたんだ！！」
「ア、アンリを助けて、いただいて、ありがとうございました。私は、母のショリといいます。」
「いや、お気になさらないでください」シンイチ。
家の中には家具らしいもの何もなかった。ショリと名乗った女性も相当弱っている様子だった。
「いえ、誠に心苦しいのですが、お礼に差し上げるものもなく・・」
「いえ、お礼なんて不要ですよ」メアリーが言う。
「娘を助けていただいた上、お願いをするのが心苦しいのですが・・」
「なんでしょう？」
「私の命ももう長く保ちません。アンリとミスリをお願いできませんでしょうか？この子達は慈悲深いご主人様の奴隷になるのが、一番幸せに生きていけるのです・・」苦しそうな表情でいうショリ。
「「お母さん！！」」アンリとミスリが取りすがる。

「ねえシンイチ。可哀相で見ていられないんだけど・・」メアリー
「ああ・・。とりあえず、やるだけの事はやってみよう」シンイチ
「どうするの？」シルフ

道具袋の魔方陣に手を入れるシンイチ
「とりあえず、どんな病気でも治る薬でろ！！」
手の中には黄金色に輝く液体の入った小瓶があった。

「うっわ。それってエリクサー？初めてみた。王族でも死にかけるような時しか使われない高価な薬だね」メアリー
「それを売ったら１０万アルになるけど、使うの？」シルフ
「うん。使う」あっさりというシンイチ。
「そ・・そのような高価な薬をいただいても・・」ショリ
「どうせ俺のもんでもないし。薬なんて使ってナンボですよ。さあ、アンリ飲ませて上げて」
「うん。お兄ちゃんありがとう」
薬を飲むショリ。そのままゆっくりと眠りに落ちた。
「うん。薬が効いたみたいだね～」メアリー。
楽になったようで寝顔は安らかだった。

「さて、帰るか。さすがに眠い」シンイチ
「そうだね。」メアリー
「お兄ちゃんたち、本当にありがとう。このお礼はきっとするから！！」アンリ
「無理しなくていいよ。それじゃあね」
シンイチ達三人は宿に帰っていった。

次の日の朝

「本当にありがとうございます。助けていただいた上、お金までい

ただいて・・」
奴隷を代表してマチルダが言う。
「いえいえ、気をつけて帰ってください」
一人、旅費として１００アルずつ渡す。これでそれぞれの国に帰れるだろう。

「・・私達には何も返せる物はありません。しかし、私達は優しい少年勇者シンイチ様と、勇敢な少女魔王メアリー様のことをこれから出会うすべての人に話すでしょう。私達から話を聞いた者は、大いなる希望を感じ、それを広めるべくさらに多くの人に話すでしょう。あなた方は長く各国で語り継がれる伝説となっていくでしょう」
四番の札を付けられていた、長身の青年が言う。

「ウッ　あんまり広めて欲しくないような。生ゴミかけられてガチムチの男に抱きしめられた事とか特に」シンイチ
「あはは、そこのところは大いに話してね。ボクに抱きしめられて泣きそうになったシンイチの姿を」メアリー
「ははは。ありがとうございました。このご恩は、どこかで必ずお返しします」青年

「勇者様に栄光あれ！！」
人間の解放奴隷たちが唱和する。

「魔王様に栄光あれ！！」
魔族や獣人族の解放奴隷が唱和する

「「「「勇者様と魔王様に永久なる感謝を！！」」」」
最後に全員が唱和し、それぞれ故郷に旅立っていった。

歴史

「お客様、その、玄関前に来客が来ておりますが・・」
宿の従業員に呼ばれるシンイチ。
「誰だろ。行ってみよう」
玄関に行くと、アンリとシュリが来ていた。

「シュリさん。元気になったんですね」シンイチ
部屋に招き入れて話をする
「よかったですね」メアリー
「まあ、エリクサーを飲むと病気だけじゃなくて体力も魔力も完全に回復するしね～」シルフ

「皆様。この度は本当にありがとうございました」シュリが頭を下げる。
「いえいえ、よかったですよ」シンイチ。
「はい。それで、アンリからもいろいろ話を聞きました。それで、やはりアンリだけでも、シンイチ様の側に置いていただけたいのです」
「いや、それは。奴隷なんて・・」
「奴隷としてじゃないよ。私自身がお兄ちゃんたちに恩返ししたいんだ。それに、お母さんが元気になって働いたとしても、いつ何かあるかわからないし、ミスリだって育てないといけない。つまり、私を働かせて欲しいの」

「働く？」シンイチ
「うん。こう見えてもお母さんの家事を手伝っていたし、買い物でも掃除でもなんでもできるよ」アンリ
「・・・我々は弱い種族なのです。貴方たちのような慈悲深い方々

の側にいるほうが、アンリの幸せになります」
「どうせどこかで働かなくちゃいけないし、お兄ちゃんたちの側の方が安心できるよ」
「・・う～ん。でも、俺たちは旅にでるかもしれないから、家族の側にいられないよ？」
「大丈夫。しばらくお別れになるって、ミスリにも言っておいたから」アンリ。
すでに付いてくると決めているらしい

「・・メアリーやシルフはどうおもう？」シンイチ
「いいとおもう。この子可愛いし」メアリー
「まあ、勇者と魔王なんだから、従者くらいいてもいいよね」シルフ
「わかりました。奴隷じゃなくて使用人で雇います。月３０アルでいい？」
「そ、そんなにいただかなくても・・」シュリ
「いいですよ。どうせ金なんて大したつかい道ないんですから」
「ありがとう・・ご主人様、これからよろしくお願いします」シッポをふりながらアンリが言う
アンリが仲間に加わった。

「それじゃ、アンリに必要なものを買ってこよう。シンイチ。お金ちょうだい」メアリー
「はいはい。」袋から１００アル取り出す。
「ありがと。シンイチは今日は休んでいるといいよ。シルフはどうする？」
「ん～。昨日たくさん買ったから、今日はいいや。シンイチと一緒にお留守番するよ」シルフ
「うん。そうしてて。さ、行こう」
メアリー達は街に行った。

部屋でシルフと二人きりになるシンイチ
「・・・シンイチ。何か私に相談したいことがあるんじゃない？」
「わかるのか？」
「ふふ。私は数億年存在する精霊だよ。人間や魔族が生まれてからも、ずっと見てきたんだよ。それくらいわかるよ」

「そうか・・それじゃ、この世界の歴史を教えてほしい。なぜ人間と魔族たちの戦いが始まったのか？」
「長い話になるけど、いい？」
「かまわないよ。俺はこの世界のこと、なにも知らないんだ」
「わかった」
シルフはこの世界の歴史を話し始めた。

「２０００年前に、この大陸にはピザンチウム帝国って国があったんだ。そして、その頃には魔族も獣人族もいなかった。」
「えっ？」
シルフは魔族や獣人族の発祥から話し始めた。

「ピザンチウム帝国は、貴族や平民が、豊かな生活をしていたんだ。平民でも最低限の食料の配布があったり、無料で公衆浴場が使えたり、闘技場でショーを見たりして。皆が遊び暮らしていたんだよ。」
「へえ。良い国だな」
「・・平民以上にとってだよ。そのしわ寄せは誰に行くとおもう？」
「・・まさか」
「そう。ピザンチウム帝国は他国に攻め入り、その国の国民を全員奴隷にして、強制的に働かせていたんだ。そうした犠牲の上に成り立っていた」
「・・・・そうか」

「でも、ピザンチウム帝国が他の国をすべて滅ぼしてこの大陸を支

配した時から、歯車が狂った」
「もうこれ以上奴隷を手に入れられなくなった」
「そういうこと。そうなれば奴隷に対して、今以上に搾取するようになって・・」シルフ
「奴隷がどんどん死んで数が少なくなった」シンイチ。
「そうなると、豊かな生活ができなくなった平民達の不満が高まった。そこで、当時の魔術師が解決法を編み出した。」

「・・ろくでもないんだろ？」
「うん。奴隷の女性に呪いをかけて、普通の人間より強くて丈夫な子供をたくさん生ませるようにしたんだ」
「品種改良・・・」
「その結果、精霊の力を宿すもの、翼が生え空を飛べる者、角を持ち力が強い者が生まれた、彼らは寿命も長く、奴隷として役に立った」
「・・・・それが」
「そう。それが後の世で魔族や獣人族といわれる者達」

「そういう者たちを奴隷にして、生活水準を維持できた。しかしそれだけでは飽きたらず、奴隷達をショーの見世物に使い始めた」
「・・」
「魔族が生まれて１００年ほどたった頃、闘技場で殺し合いのショーをする剣闘士の中に、飛びぬけて強い男が現れた。名前は、スパルタクス。真剣勝負が売りの闘技場で、５年も生き抜いた伝説の魔族」
「元の世界にもそんな話があったな」

「彼は風の精霊力も強かった。そんなある日、私を呼び出して鎖を解いてくれるように頼んだんだよ。もうこんな生活はイヤだって。仲間と一緒に逃げ出して、新しい魔族たちの国をつくりたいって。

私はそれに協力した」
「そうか、そいつが」
「うん。彼は仲間の剣闘士と共に、ピザンチウム帝国に反逆した。奴隷達を解放し、軍を編成し、首都を滅ぼした。その後、北の領土を占領して、魔国をつくったんだよ。それが初代魔王スパルタクス」
「・・」

「でも、誤算だったのは、彼が必要以上に人間を憎んでいた事だね。魔国を作った後、南の領土のピザンチウム帝国は４つの国に分裂したんだけど、その後も戦争を仕掛けて人間を連れ去り、奴隷とした。きっと個人的な復讐心が満足されなかったんだろうね。それに対抗して人間も魔法技術を磨く。後は取ったり取られたり、慢性的な戦争が続いたんだよ」
「そうか・・」

「魔国建国から１６００年後、おもわぬ事態が起こった。それはフリージア皇国による、異世界の勇者の召喚だった。彼の名前はトモノリ・ヤギュウ。恐るべき剣の使い手に加え、召喚されてすぐ強力な魔法を習得した男。その男が各国の魔族占領地を滅ぼし、魔国に迫った。」
「・・一人の人間が？」

「魔国のナムール街で、当時その街を治めていたアンブロジア魔王子と戦って重傷を負わせ、下賜されていた『魔王の袋』を奪って勇者専用の魔法をかけたんだよ。そうして中に入っていた大量のエクスポーションやエリクサーを使いまくって、破竹の勢いで仲間と共に魔王城に迫り、先代魔王アパドンを殺した。その後、魔王を引き継いだアンブロジアと平和条約を結び、人間の奴隷を解放させた」
「すごいじゃん。俺にはそんな事できないな」

「人間側から見るとそうかもね。でも、各国も魔国も相当荒らされたよ。各国が必死に作り上げた国宝級のアイテムは取り上げるわ、占領した魔国の街の財産を全部取り上げるわ、それでも足りずに魔族を奴隷として人間の国に売り飛ばすわ」

「・・・」

「平和条約を結んだのも、これ以上の被害を避けたい魔王様の苦渋の決断だったみたいだね。世界中の財宝を道具袋に入れて意気揚々とフリージア皇国に帰った勇者は、その戦勝会のパーティで毒殺された。犯人は財宝を狙った仲間の一人、第一王子という噂があるけどね」

「・・バカな奴だ」

「ともかく、そうやってフリージア皇国とは平和条約を結んだけど、各国とはまだ小競り合いを続けていて、奴隷にされる人間が未だに魔国に運ばれるというわけ。もちろん、人間の捕虜になったり、誘拐された魔族は各国で奴隷にされているよ」

長いシルフの話が終わり、シンイチは考え込んだ。

反逆

「そうか・・。俺はこの街を出たら、すぐフリージア皇国に復讐するつもりだったんだ。」
「まあ、そうだろうね」
「人を勝手に召喚して、勇者なんてものを押し付け、弱いと見ると生贄にした王族。俺より力があるからって見下し、馬鹿にしてきた自称勇者パーティのアーシャ達や兵士達。人に危険を押し付け、自分達だけ安全にぬくぬくとしている貴族。魔族による被害があったからといって、勇者に勝手な期待を寄せる民たち」

「今はどうなの？」
「王族や貴族たちに対しては、今でも憎いよ。だけど、無力な平民達にとっては、勇者にすがるしかなかったというのが今回の件でよくわかった」
「平民については許してあげるの？」
「許すというより、うまく言えないけど、俺にもできることがあるんじゃないのかって思えた。いや、曲がりなりにも勇者として魔王を倒してしまったんだから、最後まで責任を果たしたいというか。」

「シンイチは何をしたいの？」
「勇者として、魔族の脅威を取り除きたい。いや、魔族や獣人族の人達だって、弱い人間はアンリ達みたいに蹂躙されているんだ。だから、助けたい」
「・・助ける、か。今回みたいに食い物にしている奴を倒して奴隷を助けたり、貧しい人にお金を出してあげるとか？」
「いや、そんな事をしても、ただの自己満足だよ。目の前の困っている人を助けて、感謝されたら素直に嬉しいよ。でも、それって『勇者』にしかできない事なのかな？それに、目の前以外の困ってい

る人間にとって、なんの救いにもならない。」

「まあ、お金持ちならお金あげることなんて誰でもできるし、力づくで押さえつけても根本的な解決にはならないし、他の人は勇者が助けてくれるまでずっと苦しみながら待ち続けて、そのまま死んじゃったりするよね。」シルフ

「俺が感じているのはそこなんだよ・・・。それに、今からフリージア皇国に行って、王族や貴族を殺しまくって、お金を奪いまくって、それで何か変わるかといったら、何も変わらない。俺は復讐できて快感を感じるかもしれないけど、国が滅んだら・・」シンイチ

「ま、周辺各国から軍隊が来て、徹底的に蹂躙されたり、魔族が無秩序に攻めてきて、たくさんの人が奴隷にされるとか」シルフ

「そうなんだよなぁ・・、そいつ等を全員道具袋に入れて力で押さえつけても、もっと大きな戦争が起こるだけで・・」シンイチ

「最後には、逆らうものすべてを道具袋に入れて、シンイチは恐怖の大魔王になる」シルフ

「そういう物語もたくさんあるんだよ。最初は自分の復讐しているだけのつもりが、最後は皆から恐怖され嫌われる存在になるってのは」

シンイチはため息をついた。

（これは・・シンイチは拾い物かも。スパルタクスはこんな風には考えなかった。ひたすら虐げられた自分と仲間を嘆き、復讐に猛狂って、今まで自分を虐げたものを皆殺しにしたり、その家族を奴隷にしたりして、魔国を作った。その結果、結局は自分が一番否定し嫌っていた弱い者を虐げる邪悪な者に成り果ててしまった。そこまで予測がつくって・・単に頭がいいとかではないね。）シルフが考える。

「ねえ。それって、シンイチが自分で考えたの？」シルフ
「いや。俺の世界にはさまざまな物語があって、いろんなシチュエーションがあるんだ。ハッピーエンドもあるし、バットエンドもある。弱い者が力をつけて強者に復讐を果たしたら、いつのまにか自分が復讐される対象になっていたなんて話もある」

「ふーん。例えば、魔王を倒したやり方なんかもそれをヒントにしたの？」
「追いかけてくる鬼を騙して姿を小さくして、餅にくるんで食べた話とか、そんなのをヒントにしたね。自分が強くない場合は、相手を弱める状況に持っていくやり方で倒すってこと。あの時はとっさだったけど」

（そうか！！シンイチは他人とはここが違うんだ。持っている情報量がこの世界の人間と比べ物にならないんだ。これが異世界の人間の特徴なのか、シンイチだけのものかはわからないけど）

一説には、江戸時代の農村で一生を終える人間の情報量と、現代人の一ヶ月の情報量がほぼ等しいといわれている。
現代社会は情報社会であり、普通に生活をしていても、さまざまな情報が入ってくる。
その中にはいくらでも応用が聞く情報があった。

「そうか。シンイチは私の期待どうりの勇者だよ。その知識で、今の世界に対して反逆してみない？」
「反逆？」
「強い者が弱い者を一方的に理不尽に虐げる。弱い者を助けたかったら、そんな世界そのものを変えるしかないんじゃない？」
「そうだな。俺の復讐の対象はこの社会自体だ。社会制度を変え、

奴隷制度を恥とするようにみんなの価値観を変え、王族や貴族を尊いといった価値観を変え、皆が平等という意識に変えよう。そうしたら、個人的な復讐相手であるフリージアの王族や貴族も自然に没落するだろう。その姿をみて笑い飛ばしてやろう」

シンイチのこれからの目標が出来た。

手紙

その日の夜
「そういう訳で、フリージア皇国に行って仕返しするのはしばらく止めようと思う」
一杯に荷物を抱え込んで帰って来たメアリーに言う。

アンリは子供らしい可愛い服に着替えていた。
「シンイチはそれでいいの？」
「うん。あいつ等に仕返しなんていつでも出来るし、そんな事より先にする事があるからな」
「それは？」
「とりあえず、戦争を止めさせて、奴隷を解放させよう。人間も魔族も関係なしに」
シンイチが言い切る。
「・・それは、出来たら素晴らしいことだけど、具体的にどうすればいいんだろう。各国の王様達は勇者だったら会って話を聞いてくれるかもしれないけど・・戦争をしないで奴隷を解放なんてできるかな？」
メアリーが言う。

「ああ、そういえば、魔公の一人、ウンディーネがシンイチに連絡取りたがっていたね。手紙を書いていたよ？」
シルフが思い出したように言う。
「手紙？」
「うん。シンイチが金銀財宝を取り出すときに出るようにって、わざわざ純金の板に手紙を書いていた。なかなか取り出さないからあては外れたみたいだけどね。可哀相だから読んであげたら？」
「そうか。それなら読んでみよう。俺宛の手紙出ろ」

道具袋から純金の板に書かれた手紙をとりだす。

勇者様へ。

我等が魔王と貴殿の戦いの結果、我等は敗北し、魔王城ごと袋の世界に閉じこめられました。
魔王様はお亡くなりになり、魔王玉すら勇者様に取り上げられたため、もはや自力ではこの世界から出られないと悟り、魔王城の者は絶望にかられております。

時間がたつごとに、水や食料が不足し、我々は塗炭の苦しみにあえいでおります。
ある者はこの期に及んでも権力を求め、ある者は金に執着し、魔王城内では混乱の極に達しております。
しかし、城内の宝物も金貨も、その気になればすべて勇者様に取り上げられるので、我々は瓶の中のアリと同じだと思います。
我々にはもはや勇者様のお慈悲にすがるしか道はありません。
魔王城のすべての物は、もはや勇者様の物です。お望みでしたら、私どもの命も差し出します。
何卒、お慈悲をお持ちして、兵士や民の命を救っていただきたく存じます。
我々は、勇者様が望むすべての要求にお答えいたします。ぜひ話し合いに応じていただけませんでしょうか。

追伸

四大魔公　水と癒しのウンディーネ。

城内すべての物は勇者様の物と書きましたが、どうか、『疾風のブラ』と『魅惑のショーツ』だけはお返ししていただけませんでしょうか・・。長年愛用した下着なのです・。

「・・・・」
「返してあげなよ・・。ボクにはサイズが合わないんだから」
メアリーが同情したような顔で言う。
「いかにも俺が持っているような事言わないでよ！。アレはとっくに道具袋にしまったでしょ！」
「ん～。収納した道具が袋の中のどこに行くかはわからないからね～」
シルフが面白そうに言った。

「それじゃ、ウンディーネさんと話してみよう」
シンイチがウンディーネを取り出そうと道具袋を開ける。

「ちょっと待ってよ！！相手は魔公の一人なんだよ。出てきた瞬間、ボクたちに襲い掛かってきたら？？」
「まあ、ウンディーネちゃんに限ってそんな事はないだろうけどね」
「わかんないよ。警戒しなきゃ」
『女神の杖』を構えてメアリーが言う。

「う～ん。どうしたらいいんだろう？」
シンイチがうなる
「ならば、ウンディーネちゃんだけ取り出すように念じたら？武器とかアイテムとか持ってなかったら、メアリーが勝つでしょ？」
「それしかないか。でも、シンイチ気をつけるんだよ。」

「わかった。何も持たない状態で、ウンディーネさんだけ出ろ」
魔法陣に手を突っ込んで取り出す。
部屋に２０才くらいの年頃の美しい女性が現れた。
・・・・・・・・・・・・全裸で。
一瞬、部屋のすべてが止まっていた。
美しい女性が叫び声をあげる。
メアリーがシンイチにビンタする。
シルフが大笑いする。
アンリは冷静に部屋の毛布を持ってきて、女性にかけた。
・・・アンリが入れたお茶を飲んで落ち着く女性。目には泣いた後がある。
「シンイチ。反省してよね。本当にえっちなんだから」
メアリーが腰に手を当てて説教する。それをシンイチが正座して聞いていた。
「だ、だって、シルフがウンディーネさんだけ取り出せって言うから」
「口答えしない！いくらなんでも、服まで取り上げる事ないでしょ！」
「いや、この場合服は袋の中にあるから取り上げてない・・ごめんなさいなんでもないです」
シンイチは正座を続けた。

交渉

シンイチが道具袋から取り出した服を着て、やっと落ち着いたウンディーネ。
シンイチは罪悪感で一杯である。

「・・お見苦しい様を見せてしまいました。勇者様」頭をさげる
「いえ、俺こそ失礼なことをしてしまい、申し訳ありません」シンイチも頭を下げる。
「それでは改めまして。私は四大魔公の一人、ウンディーネと申します。以後お見知りおきを」
「俺は一応勇者のシンイチです」
「ボクは、フリージア皇国・・いえ、一応魔王?なのかな。メアリーといいます」
「あはは。シルフィールドの分身のシルフだよ。道具袋から一足先に出させてもらっているよ～」

「よろしくお願いします。メアリーさんが魔王玉を継いだのですね。凄まじい魔力を感じます」
「あはは、勝手に継いじゃったんですけどね」
「いえ。それは今まで代々積み上げた魔王のすべてなのですが・・負けたからには、致し方ないことです」
沈んだ声でウンディーネが言う。

「はは・・それで、俺たちと話し合いをしたいということですが」
シンイチが本題に入る
「はい。その前に謝罪させていただきます。魔王がシンイチ様を生贄にしようとした件、誠に申し訳ありませんでした。我々には『魔

王の袋』は国を象徴するくらいの宝物であり、前勇者が前魔王を倒した原因ともなったものです。そういったことがあり、袋を放置しておけば、無限のアイテム収納という性能上、いつか召喚される勇者に魔国が滅ぼされると懸念したのです。・・結果はまさにその通りになってしまいましたが」

「・・・その事についてはもういいです。魔王は倒しましたからね。これからの事を話しましょう」

「はい・・。私達は、勇者様に全面降伏いたしましょう。我々四大魔公や十六魔将も捕虜となりましょう。魔王城や、その中にある金貨、宝物もそのまま勇者様に進呈いたします。そして、魔国もフリージア皇国に併合されましょう。ただ・・兵士達の命や、民達が奴隷にされる事だけは許していただきたいのです・・」

ウンディーネが土下座する。

「・・・頭をあげてください」シンイチが静かに言う。

「フリージア皇国に併合ね・・」メアリーが嫌そうに言う。

「ははは。ウンディーネちゃん。そんな事言っても、勇者君と魔王ちゃんは喜ばないんじゃない？そのフリージア皇国に生贄にされた二人なんだから」

「・・そうでした。では、勇者様と、魔王の後継者様のお二人に、この魔国を治めていただくというのは・・」

「私とウンディーネちゃんはそれでよくても、他の魔公や魔将とか、この国の民衆は人間を魔王に受け入れるかね～。先祖代々人間に奴隷にされた歴史を教育してきているんだから。なんとか無理矢理に魔王に押し上げても、すぐ反乱がおきそう」

シルフが真面目な口調で言う。

「そ・・それは、私が説得します。シルフィールド殿も協力お願いします」

「シンイチはどう思う？」
シルフが聞いてくる。

（これは試されているな）シンイチは感じた。
「う～ん。王様とか柄じゃないんだよね。元の世界ではただの高校生だったし。メアリーはどう？」
「王族になったら、豊かな暮らしとか、誰かの奴隷とかにされずに穏やかに暮らしていけると思ったけど・・考えてみたら、あんまりメリットないかも。
お金は埋まるほどあるし、シンイチとどこか穏やかな所で二人暮らしていくのもいいかな？」
メアリーがさらっと言う。

「メ、メアリー。いきなり何言い出すんだよ」シンイチが顔を真っ赤にする。
「前に言ってくれたでしょ。シンイチはボクだけの勇者だって。もともと王族になりたかったのも、どこかの優しい貴族のお嫁さんになって穏やかに暮らすためだし・・考えてみたら、今のボクってシンイチがいれば全部満たされているんだよね。シンイチは優しいし、貴族にならなくても大金持ちだし」
明るく笑うメアリー。
「はいはい。ご馳走様」シルフがからかう。
その様子をウンディーネは呆然と見ていた。

（わ、私達は差し出せるものをすべて差し出すつもりなのに・・彼らは何も必要としていないの？）
「お、お願いします。どうか私達をお助けください」
再び涙を流しながら、ウンディーネは頭を下げた。
「そ、そんなに泣かないでください。悪い事をしている気分になる」

シンイチが焦っていう
「あはは。実際にウンディーネちゃんを苛めているのはシンイチだけどね」
「シンイチ・・ウンディーネさんかわいそう」
「なんでメアリーまでそっち側？」
焦るシンイチ。

そのうち、ウンディーネの泣いている姿に耐え切れなくなった。
「も、もう止めてください。俺は魔族を滅ぼそうなんて考えていませんから」
「ぐすっ　ほ、本当ですか？」
「はい。ああもう。アンリ、タオル持ってきて。」
タオルをウンディーネに渡す。
「あ、ありがとうございます・・・」

「魔王城の中にいる人達は、全員解放していいです。四大魔公とか魔将とかもすべて」
「あ、ありがとうございます」
「しかし、彼らが俺たちに復讐するかもしれないので、それを絶対にさせないこと。あと、魔王城とその中の物については、そのまま俺の物にさせていただきます。」
「は、はい。当然のことです。」
「それから、これはキツイ要求かもしれませんが、魔国の奴隷をすべて解放していただきたいのです。そして、魔国から永久に奴隷制度を廃止していただきます」

「・・奴隷をですか？」
「奴隷制度があるかぎり、人間と魔族は永遠に憎みあいます。ひとまず、それを終わらせたいのです」
「・・・わかります。私も決して奴隷制度に好意的ではありません。

いつかは止めないといけないと思っておりました」
「もちろん、今後奴隷にされる人が出ないように、各国の魔族コロニーも撤退してもらいます」
「はい」
「それから、今後は魔族と人間の関係は、すべて俺が間に入ります」
「勇者様が？」
「貴方方は戦争の歴史を背負っています。話し合いをしようにも、過去の因縁が絡んで話がこじれるのがオチです。ここはいったん、俺が全部間に入って交渉するようにしましょう。一応勇者の看板をしょってますから、魔国が認めれば各国も無視できないと思います。」
「ほ・・ほんとうに我々の仲立ちをしていただけるのですか？」
「それが俺にとって一番いいやり方なんですよ」
「勇者様・・貴方こそ、われわれ魔族にとっても救世主になる方なのかもしれません」
ウンディーネはシンイチの手を握った。

「こほん・・いつまで握り締めているのカナ？」
メアリーがわざとらしく咳払いする
「あ・・私としたことが。失礼しました」赤くなって手を離すウンディーネ
「い・・いえ。ありがとうございます」シンイチが照れて笑う。
メアリーはジト目でみた。

仲介

「でも、魔族と人間の仲立ちなんて、本当にできるの？」シルフが言う。
「まあ、少なくても戦争にならないようにすることはできるね」
「どうやって？」

「俺たちの世界では、世界を巻き込んだ大戦のあと、二つの陣営に分かれて睨みあう状態が長く続いたんだ。どっちも核兵器という、使えばどっちも終わりっていう恐ろしい武器を向け合ってね」
「・・・そんな状態が続いたら、恐ろしくて暮らせないじゃん」
メアリーが言う。
「それが、そうでもないんだよ。その状態で得をした国もあった」
「得？」
「つまり、相手の大国が入ってこないように、間にある国を防波堤として置いたんだ。そうして対立しているけど戦争をしない状態、いわゆる『冷戦』という状態にもっていった。不沈空母と呼ばれたその国を盾にするために、一方の大国はその国を援助した。そして、その国は世界中で貿易を始めた。戦争で壊滅的な被害をこうむって一から始めないといけなかったのに、数十年後にはその間の国が世界中の富を独占いるようになって、世界で一番進んだ国になったんだよ」
「・・・詳しいね」
「よくわかんない」
実はシンイチは歴史が好きで、その手の本をよく読んでいたのである。

「つまり、人間と魔国の間に領土を作って、直接関わらせないようにする。そうして二つの国の貿易を一手に握る。もちろんお互いに

不干渉の条約を結び、経済的にもその貿易を仲介する領土がなければ両方が困るようにする。そうして、戦争を起こりえない状態に持っていく」

「・・そんなに上手くいくかな？」

「その間の領土が周囲から舐められないように勇者と魔王後継者の看板しょってたら、両方の国をうまく操れるよ」

「興味深いですね・・」

ウンディーネが感心したようにいう。

「あと、俺らの世界でも、２００年くらいまでは奴隷がいたんだ。それがどうやって解放されたかも知っている。今じゃ、その奴隷にされた民族から、世界一の大国の指導者が生まれているよ。」

「そ・・そんな事があるのですか？」ウンディーネが驚く。魔公として政治に携わる彼女は、自分の知らない世界のことに興味を持った。

「ああ。奴隷解放は理念とか人の情とかもあるけど、一番の理由は経済問題だな」

「経済？お金の問題のことなんですか？」

「その大国は北の工業地帯と南の農業地帯に分かれていた。発端は北の工業地帯で奴隷が解放され、奴隷は従業員として賃金を受け取る事になった。そうするとどんどん物が売れて、景気が良くなる、雇い主の工業主も儲かる。景気が良くなると人手が不足して、さらに人が必要となるといった循環ができた」

「ぐう」

「寝るなメアリー。それに反して、南の農業地帯は奴隷を働かせていたが、作物を作っても買い手がいない。買い手がいないので、北の地域まではるばる運ぶしかなくなり、作物を安く買い叩かれる。そうしたら地主である主人は儲からなくなる。という風に、両方の

地帯で格差がおきた。奴隷を解放して従業員にして人手不足を解消しようといる北部と、そのまま奴隷として酷使したい南部との戦争が起こった。結果は北の圧勝で、奴隷は解放されて一般民衆になったんだ」

「へえ・・面白いね。人を奴隷として酷使するより、物を買ってくれる一般人にしたほうが、結果的に上の人間は儲かるの？」
シルフが思ってもみなかった用に言う。
「そういうこと。そうすると、一般人の中からどんどん成り上がる者もでてきて、国が豊かになる。俺が読んだ本にはそう書いてあったよ」
シンイチが語る。ウンディーネは今までとは違った目で勇者を見ていた。

「シンイチ様・・とても興味深いです。その・・お願いがありますが」
「お願いですか？」
「シンイチ様の知識はとても面白いです。『知識共有』を私としていただけませんか？
ウンディーネがにじり寄ってくる。
「・・別にいいけど」
「ダメ」メアリーが間に入る
「なんで？」
「ダメったらダメ！！」駄々っ子のように言う。
「メアリーったら。でも、ウンディーネちゃんと『知識共有』するのはいいかもね。魔族の知識の中にも、シンイチの知らない有益なことが一杯あるだうから」
「うううう・・わかったよ。」メアリー
「ありがとうございます。・・それでは失礼します」
ウンディーネがシンイチに抱きつき、おでこを引っ付ける。

「・・・（スハッ。いい匂い）」
ウンディーネは絶世の美女である。大人の女性の匂いを纏っていた。
クラクラするシンイチ
「・・シンイチ」
怖い声で名前を呼ぶメアリー。シンイチは恐怖で震えた。

「痛！！。これは何回やってもなれないな～。でもいろんな魔法があるんだな。使えそうだ」
シンイチがウンディーネから離れる。
ウンディーネは呆けていた。

「・・？ウンディーネさん？どうしたの？何かあった？」
心配するシンイチ
「はっ・・何でもありません。心配していただけるのですか？シンイチ様は優しいですね・・」
ウンディーネが言う。
「いえいえ、そんな事ありませんよ」照れるシンイチ

（こ・・これは。ほんのわずかな知識を交換しただけなのに、なんなのこの情報量。空を飛ぶ鉄の塊。宇宙にまで飛び出していく筒。大地を走る蛇。都市を照らす光。豊かで種類豊富な食べ物。自動で動く馬車。しゃべって絵を写す箱。天まで届きそうな建物。奴隷など一人もいないのに、誰もが豊かに光溢れる街をあるく人間達。なんという理想郷。このような世界から来たの？私も、この世界に行ってみたい）
シンイチを熱い目で見つめるウンディーネ。
メアリーはウンディーネを警戒した。

「す・・素晴らしい国です。このような街を作り上げるのに、何年かかったのですか？」

「えっと・・だいたいの基本的なところは３０年くらいかな？」
「３０年！！！！！」ウンディーネは驚愕した。
それは数百年を生きる魔族にとっては、ほんの一瞬にしかすぎない。
「ぜ、ぜひこのような世界を作り上げましょう、私も死ぬ気で協力します」
シンイチに抱きつくウンディーネ。
「ええい。シンイチから離れろ。シンイチはボクのものだ」
メアリーが間に割って入った。

下着

魔王城

１６魔将の一人　ドレイク将軍の兵士達は、魔王城の錬兵場で模擬戦をしていた。

【シュパッ】音がして、高速の剣が相手の剣を叩き落す。
「勝者、タータルス！！」審判が試合をとめる。
全身筋肉で被われた体格のよい男が勝利した。

「すごいぞタータルス！」
「わが部隊で最強の戦士だな！」
周囲から歓声があがる。
タータルスと呼ばれた兵士は、右腕を上げて歓声にこたえた。

「いや、ここ最近の体のキレは素晴らしいな」
「どうやったんだ？お前は力だけは相当なもんだったが、動きが遅くて負け続けていたのに」
「その動きの秘密を教えてくれよ」
友に囲まれて持ち上げられる。
「ふっ。日ごろの訓練のたまものだ」
格好をつけて答えるが、敏捷性があがった理由は答えられないものだった。

数日前、タータルスのベッドの上に、布切れが落ちていた
（なんだこれ・・・女の下着？なんでこんなものが落ちてんだよ！）
あわてて同室の兵士に見つからないように隠す。

捨てようとしたが、その下着から魔力を感じた。トイレの個室にこもり、じっくりと見る
（これは、なかなか・・。いや、すごい魔力だ。何かの効果があるに違いないが・・）

中級兵士であるタータルスには、ここまでの魔力を感じる魔具はみたことがなかった。
売れば相当の値がつくだろうが、その為にはかかっている魔法の効果を知る必要がある。
もちろん、それを知るためには、むりやり装備するしかない。
意を決して、男としての尊厳を捨てた。
（これは・・軽い。体が羽のようだ。これなら・・）
体の動きが遅いため、戦士としては中級だったが、下着を装備する事で早く動けるようになった。

しかし、ここ数日、友たちの態度がおかしくなっていった。
やたらと遊びに誘われたり、食事に誘われるのである。
いや、別にそれ自体はいいことなのだが、なぜ二人きりで行こうと誘われるのか？
漠然とした不安を抱え込んでいた。

「まあまあ、いいじゃないか。それより、風呂いこうぜ！！」
部隊の連中が誘ってくる。確かに訓練の後は汗だくだが、下着を見られるわけには行かない。
「・・お前等先に言ってこいよ。俺はいい」
いつもはこうやって断っているが、今日はなんだかおかしかった。
「・・・ハアハア。遠慮するなよ。俺たちはお前と風呂に入りたいんだ。もう何日も我慢してたんだぞ」
「お前の匂い、たまらん」
「もう我慢できないんだ！」

取り囲まれ、全員に担ぎあげられるタータルス
「な、なんだ！何が起こっているんだ！」
同僚達から感じる異様な雰囲気に、タータルスは恐怖した。
「あの、それで、私の下着は・・返していただけませんでしょうか？」
上目遣いでシンイチに頼む
「は、はい。すぐに返しますから・・ええと、『疾風のブラ』と『魅惑のショーツ』でろ」
道具袋から取り出す。
「ええと・・これです、よね？」
下着は伸び伸びになっており、汗でぐっしょりと湿っていた。
「・・なんだか、誰かが使っていたみたいだね」
「・・ケホッ　シンイチこっちに向けないで、何日も風呂に入ってないような男の汗の匂いが・・」
シルフの言葉に、あわててウンディーネに差し出すシンイチ
「・・・うわーん。ひ、ひどすぎる。一番のお気に入りだったのに・・・。」
ウンディーネはまた泣き出した。
タータルスの体から下着が消える
「あれ？俺たち何してたんだ？」周囲の同僚が正気に戻る。
（危なかった・・金輪際女物の下着など着ないぞ！）
タータルスは当然の決意を固めるのだった。
「そ、それでは、ひとまず魔王城に帰って、他の魔公たちと協議い

たします。一日後、また呼んで下さい」気を取り直して、ウンディーネは魔王城に帰っていった。

「ウンディーネさん、大丈夫かな？精神的に大分ショックみたいだったけど」

「あはは。彼女はああ見えても魔族のトップだよ。あれくらいじゃへこたれないよ」

「そうだね。とりあえず、待ってみるか」

シンイチ達は魔族内の結論が出るまで、ナムールの街に滞在することにした。

条件

魔王城

魔公や魔将たちに召集をかけるが、１６魔将は代表としてケルビムを出席させるのみとなった。

「・・というわけで、私は勇者様と交渉をしたし、一応の合意を得ました。条件は以下のものとなります

?.魔国は国内のすべての奴隷を解放し、以後、奴隷制度を廃止する事

?.魔国は現在行われている戦争をすべて停止し、人間の国内にある魔族のコロニーを撤退させる事

?.魔国は勇者と魔王後継者に対して、復讐行為をしない事。

?.魔国は魔王城と中の財宝・金貨・物品すべて勇者に引き渡す事。

?.魔国と人間の国の間に中立地帯を作り、そこを勇者の領土とし、貿易や交渉はすべてそこを通して行う事。

?.勇者は魔国・人間国と協力して、勇者の世界の知識を世界のために役立たせること。

?.勇者は人間国内で奴隷とされている魔族を解放するように取り計らうこと。

?.勇者は魔王城にいるすべての者を解放すること

勇者の提案を飲めば、我々も救われ、これ以上不毛な戦争をする事もなくなります。それどころか、勇者の知識を使えば、たった数十年でこの世界が理想郷となります。私からの提案は以上です」

ウンディーネが席に座る。

この会議に出席前にウンディーネは他の四名と『知識共有』を行っていたので、その提案に嘘はないことを全員が理解していた。

「奴隷の解放とはな・・・・。昨日この世界に落とされた者たちは、勇者を奴隷としようとして反撃をされたと言っていた。バカなことをしおって。・・・・この世界から出られるというなら、ある程度の領土の割譲や、金貨や財宝はいたし方あるまい。魔族コロニーの撤退もだ。しかし、奴隷を解放するといっても、一度にすると大変な事になる。下手をすれば反乱がおき、魔国自体が滅びるぞ。もう少し、条件を妥協できないものか」
イフリートが考えながらいう。

「私はウンディーネちゃんに賛成だね。勇者すら利用して魔国を富ませるくらいのことはしてもらいたいもんだね～」

「・・私はイフリート殿に賛成だ。我々や魔王城の者が助かるとはいえ、奴隷を失う事で社会が混乱する。もちろん、このままでも魔国は滅びてしまうので、ある程度の条件は飲まねばならんが、奴隷の即時解放は現実的ではない・・。現に、勇者の世界でも奴隷解放のため内乱が起こったというではないか。勇者の異世界の知識の有用性は認めるが。」
社会の混乱を憂うノーム。

「私は反対だ。ここで弱腰になると、我々が奴隷とされた暗黒時代の再来だ。どれだけ犠牲が出ようが、袋を破り、自らの手で脱出すべきだ」
「ケルビム殿。犠牲を出して脱出するとは、いかなる方法によってか？」
イフリートが鋭く聞く。
「イフリート殿もお分かりのはず。貴殿の部下が武器や防具を買い占めているのは我等も承知だ」
「我等も１６将が同じ行為をしているのを掴んでおる。だが、我等

は貴殿とは違う。同族を犠牲にするくらいなら、勇者の提案を呑むほうがマシだ。その程度の誇りはもっておる」
イフリートとケルビムが睨みあう。

「お二人とも・・今は争っている場合ではありません。採決で決めましょう。条件付でもかまいません。勇者様の提案を呑む方は？」
ウンディーネ、シルフィールド、イフリート、ノームが手を挙げる。
「決まりです。魔王がいない以上、魔公の決議で決まります。１６魔将は代表者が魔公一人分の決議権を持っております。４対１で勇者様の提案を呑む事が決定しました。」
ウンディーネが採決し、方針が決定した。
「では、勇者殿に対して、条件の交渉の議論に移りましょう」
それぞれ意見を言う。だが、ケルビムは無言だった。

「・・・だいたい、勇者に提出する条件は、これでよいでしょうか」
魔公同士の議論で、シンイチに対しての魔国側の条件の同意が得られた。
反対したケルビムは採決直後、全権を委任して退去していった。

魔国側の提案として

?他の条件はすべて呑む。領土は国境の周辺一帯を勇者個人に割譲し、どこにも属さない領土として独立を認める。
?全部の奴隷の即時解放は社会不安をあおり、内乱の可能性があるので難しい。よって、捕虜証明書を持つ奴隷のみ解放して、人間国に帰国を認める。犯罪の罰や金銭を理由として奴隷になったものは、そのまま主人の所有を認める。
?今回を契機に奴隷について一斉に調査し、証明書をもたず不法に奴隷を所有する者には厳罰を与え、そのものの資産から奴隷に対して保障を与える。

?.同意後、人間国側に魔国側が使者を出し、不可侵条約と貿易、交渉を勇者に一任することを伝える。

以上の条件が数時間の議論を経て同意された。

反乱

全員がさすがに疲れたのでいったん会議を中断して休憩している時、それは起こった。
「大変です！！。ケルビム殿、叛乱！城内は反乱軍との戦闘で大混乱です」
イフリートの部下が注進に来た。

「・・なんという事でしょう」
「やはりな。心配なされるなウンディーネ殿。この中央エリアは我が軍で固めておる。半ば予想されたことだ」
イフリートが安心させるように言う。
「・・わが一族にも警戒するように言っておる。地の魔族はここに向かっておるだろう」
「１６魔将直属の軍は２３８１人。そして私達の軍は合わせても１７３８人。さらに、魔将軍はこの中央エリアに集中しているけど、魔公軍は四つの塔に分散しているね～。中央エリアにいるのはイフリート君の部下８００人程度か。」

「シルフィールド殿。結界を張り、城内外縁部にいる魔公軍に中央エリアを目指すように伝達していただきたい」
「了解。イフリート君とノームおじさんは皆を守って。あと、ウンディーネちゃんは勇者に呼び出されたら、訳を話して助けを求めなよ」
「でも、助けてくれるでしょうか・・」
「お人よしだから、一度知り合いになった人を見捨てたりしないよ。」

「ならば、我等は防御に専念しよう。この中央エリアにいるイフリート魔公軍は私が指揮を取る」
イフリートが前線に出て行く。
「ウンディーネ殿は篭城のための回復ポーションを作り出していただきたい。私は身を削り、魔力を込めた実をつくり出そう。」
体の一部を樹に換え、魔力実をつくるノーム。
「はい。勇者様・・早く私を呼び出してください」
ひたすら祈るウンディーネだった。

中央エリア前では、激しい戦闘が行われていた。
魔公軍のみ出入りできる結界を作り出すシルフィールド。
その結界を破ろうとする魔将軍。
防御に専念するイフリート直轄軍。
外から魔将軍を破ろうとする外縁部魔公軍。
戦場は混沌としていた。

戦闘は膠着状態のまま、時間が過ぎていった。
本来なら魔将軍の圧倒的有利のはずだったが、体力の回復ができるウンディーネ、魔力の回復ができるノームが魔公側に存在し、戦闘力が最も高いイフリートが回復しながら防御に専念するので、戦闘は決め手を欠いたまま時間ばかりがすぎた。

「ええい。戦況は？」
いらだってケルビムが報告を求める。
「中央エリアの結界は未だ破れず」
「魔将リーク将。イフリートと戦闘の結果、重傷を負って敗退」
「外縁部魔公部隊は、つかず離れず攻撃してきます。」

「進言します。外縁部魔公部隊を先に殲滅すべきでは？」

魔将ナルハルトが上奏する。
「・・いや、そうなれば、背後からイフリートの軍が襲い掛かってくる。挟み撃ちだ」
ケルビムが却下する。
「しかし、シルフィールドの結界は、やすやすとは破れそうにありません」
「しかし、ここは一点突破を計るしかない。外部はかまうな。攻撃を結界に集中させろ。」
魔将たちが前線に出て、魔力砲を放つ。結界にぶつかって霧散する。
「ふふ。その程度じゃ破れないよ～」
シルフィールドがからかう。

「魔将たちよ。いい加減にせぬか。今やっと勇者との交渉が出来るようになったところだ。同族を犠牲にせずとも、袋からでられるのだ」
全身に『太陽の鎧』をまとい、『炎の剣』を振りかざしてイフリートが言う。
何人かの魔将に動揺が走る。

「本当ですか・・ケルビム殿は、人間に屈することになると仰ってますが」
「現に我等は勇者に屈しておるのは間違いない。だが、勇者も闇雲に魔族を滅ぼそうとしているわけではない。もしそうなら、我等が今生きている道理はない。魔王様ですらなすすべなく一方的に殺されたのだ。我等などなんの抵抗ができよう」
イフリートの言葉にうなだれる魔将

「で、では、交渉とは」
「それは・・」

イフリートが発言しようとすると、ケルビムが前線に出てきてさえぎる。
「勇者に屈し、彼の差配に従って生きるなど、誇り高き魔王の血を引く我等にはできぬ。魔国を売り渡して、どうして生きられるか！」
「魔国を売り渡すのではない。彼らには我等の仲介をしてもらうだけだ。」

「戯言を。魔王を殺した勇者など信頼するにあたるか。子としても偉大な父の仇を取らずにはおれぬ！」
「仇だと！一国を指導するものにとって、私怨などもってのほかだ。我等は個人的な復讐より、大局をみるべきだ！」
「イフリート公！貴方は魔王玉を真っ先に要求した。それこそ私利私欲。魔王の座につきたいのであろう！」
「ばかな！魔王玉を要求したのは、それが袋の世界を破る為に必要だと思ったからだ！」
「私としてもそう思っておる。だからこそ、貴殿の魔力が必要なのだ！」
「・・・どうあってもか。交渉で外に出られるとわかってもか。同族殺しをしてもか。」
「くどい！誇りを持って外に出ないと、結局は魔国は滅びたと同じだ」

「・・・私を殺したとしても、袋を破る魔力を得るには足りまい。どうするのだ？」
「袋を破る魔力を得るまで、他の者にも犠牲になってもらうまでだ」
「我が一族も、他の一族も、魔将たちも、兵士も、民もか？」
「そうだ！！。私さえ魔王となって外に出れば、魔国は立ち直る」
ケルビムの言葉に、他の魔将や兵士達も目を剥く。

「・・よくわかった。この上は一騎打ちにて勝負をつけよう。我を

倒して魔法玉を吸収してみるがいい。他の魔将たちや兵士達もよく見ておくがいい。私が倒されたら、強大化した魔力をもってケルビムは見境なく虐殺を開始するだろう。その時は、結界内に逃げ込み、勇者に助けをもとめるといい。シルフィールド殿。お願いしたす」

「・・わかったよ。しんじゃダメだよ」

シルフが悲しそうな顔で言う。いつの間にか、魔将や兵士達も戦いをやめ、二人の対決を見守っていた。

戦闘

イフリートとケルビムの戦いは続いていた。
イフリートが炎の属性に特化した魔族ならば、ケルビムは全属性を均等に使える魔族だった。
イフリートの『炎の剣』をケルビムの『氷河の斧』で防ぐ。
ケルビムの魔力砲をイフリートがかわす。
全く互角のまま、数時間も戦い続けた。

『ボルケーノ』イフリートが広範囲の炎魔法を使う。
『ウインドレイン』ケルビムが風の刃を作り、無数に降らせる。
イフリートの体が切り刻まれる直前、イフリートは結界に逃げ込んでいた。

「卑怯者。一騎打ちに逃げをうつか」
「ほざいていろ若造。回復したらまた相手をしてやる」
イフリートは結界内に帰り、それをきっかけとして両軍の戦闘は中断された。

「これは・・ひどい怪我です。イフリート殿、無理はなさらないでください」
ウンディーネがエクスポーションを使うと、体の傷がどんどん回復していった。
「イフリート殿。よくあの猛攻をしのがれましたな。感服いたしました」
ノームが魔力実を作って食べさせ、魔力の回復に努めた。
「いや・・正直いって戦闘についてはケルビムの方が上だ。魔公として政治を行い、戦闘から遠ざかっていた私と、常に戦闘を繰り返

していた魔将ケルビム。いつの間にか逆転していた」
イフリートが言う。
「しかし、これで勝機が見えてきましたな。こちらは回復できるが、あちらには回復する手立てがない。次に戦えば確実に全快したイフリート殿が勝つ」
「そうだと良いのだが。ノーム殿、私はもう大丈夫だ。。引き続き皆をお願いする。」
「わかった。養生されよ」
ノームが去る。イフリートは疲労から、つかの間の眠りに落ちた。

ケルビム陣営
「もうポーションはないのか？」
「はい。もともと品薄だったのですが、この戦闘ですべて使い切ってしまいまして」
「回復魔法が使える者は？」
「癒しの魔法を使える水の属性を持つ者が少なく・・殆どがウンディーネの配下ですから」
「ぐぬぬ・・」
部下と現状確認をするケルビム。

イフリートと引き分けた彼も全身に傷を負っていたが、回復の手段がなかった。
（このままでは、再戦時には確実に負ける。やむをえん、もともと覚悟していた）

「他の１６の魔将を呼べ。軍議を行う」
伝令が伝えられ、１６魔将が揃った。

「ケルビム殿・・そのご様子では相当傷ついたようです。ここらで

停戦をされれば？」
魔将マルドークが言う
「あちらの提案では、勇者の出した条件を呑めば解放されるとのこと。それならば・」
魔将ドレーク。彼はもはや同士討ちにうんざりしていた。
他の魔将もそれぞれ満身創痍の状態であり、士気が目に見えて下がっていた。
「わかった。後は私が一人で戦う。皆ご苦労であった。『グラビティ』」
ケルビムが呪文を唱えると、軍議をしていた部屋の床一面に魔法陣が広がった。

「こ・・これは」
「動けない」
「まさか、重力魔法！！なぜこのような事をなされる」
体が動かなくなり、動揺する魔将
「貴官たちの犠牲は無駄にはしない。その魔力すべて私が受け入れる」
ケルビムが冷酷に言う
「き・・貴様！」
「くっ・・貴様についたのが間違いだった」
「た・・助けてくだされ！！」
魔将たちの体がどんどん潰れて消えていく。後には１５個の大きい魔法玉が残った
魔法玉に手を触れて吸収するケルビム。体がふた回り大きくなっていた。

再び進軍する魔将軍。
ケルビムがシルフィールドが張った結界に向けて魔力砲を放つ
ドガンと大きな音を立てて、結界が砕け散った。

「でてこいイフリート。決着をつけるぞ」
ケルビムが大声で叫ぶ。

イフリートが出てくる。
「貴様！その姿は・・」
「察しのとうり、１６将はもはや私一人だ」
「外道め！。貴様はもはや魔族ですらない。ただの食人鬼だ」
「上等。魔族のすべてを統べるには鬼でなくてはならぬ。覚悟！」
ケルビムの体から魔力が吹き上がる。
その魔力は父である魔王アンブロジアに迫りつつあり、まさに『魔王』と呼ぶにふさわしいものであった。

ケルビムと激突するイフリート。
「ははは、どうした。その程度か！！」
ケルビムが笑う。もはや力の均衡は完全に崩れていた。
「くっ　サンニードル」
『太陽の鎧』から無数の光の棘が出て、ケルビムに突き刺さる
「ははは、このような小技、今の私にはかすり傷程度だ」
突き刺さった光が弾かれる。
（くっ・・どうすれば）
必死に防戦するも、ケルビムの猛攻に耐え切れなくなってくる

「これで終わりだ。オメガブリザード」
戦いの場を絶対零度の吹雪が覆う
「くっ・・」
イフリートの動きが止まる。
「ハッ」
ケルビムの『氷河の斧』がイフリートを真っ二つに両断した。

「ククククク・・・これで私は最強の魔王になる。後は残りの魔族を皆殺しにして・・」
イフリートの死体の側にでた大きな魔法玉を吸収する。
ケルビムの体はさらに巨大になった。

切捨

道具袋の中で魔族が混乱に陥っている頃・・

フリージア皇都。カストール伯爵邸。

カストール伯爵は５０代の灰色の髪をした堂々とした壮年の紳士である。

今回の国内会議のため、北方の魔国に接している領地からフリージア皇都に赴いていた。

既に会議は開かれて何日もたっていたが、地方の領主は皇都から離れた領地に普段住んでいる為、到着次第出席することになる。

それで、会議に出席する前に今回の勇者召喚からの一連の経緯について報告を受けていた。

「ふむ。まず、最初に勇者召喚の計画を立てていたのは、メルト王女なのだな」

低い声で言う。

「はい。父上。この計画には、弟であるアーシャもからんでおります」

発言したのはドンコイ・カストール。カストール伯爵家の長男である。

普段は特に役職もつかず、皇都に滞在し、情報収集と称して同世代の貴族と放蕩を繰り返している。

体はぶくぶくと太り、目は細まっている。

彼が評判の悪い第一王子カリグラの取り巻きの一人であり、騎士副団長である弟アーシャを嫌っているのは周知の事実であった。

「はは、第四王女に取り入り、勇者を召喚して魔国に対して優位に立てば王位に近づくとでも吹き込んだのでしょう。勇者が弱いと見て生贄にするよう計画を立てたのでしょうが、ものの見事に策略がはずれ勇者が魔王を倒してしまいました。剣を振るしか能がない無能男がなまじ策を練るからこのような無様なことになるのでしょう」
ヒヒヒッ　と楽しそうに笑う。

「・・ずいぶん楽しそうだな。それでその間、お前は何をしていたのだ」
カストール伯爵が不快そうに言う。
「いえ、私は特に何もしておりませんでしたよ。余計な事は一切。本来、国事にかかる事は陛下や宰相殿の仕事ですからね」

「何もしていない・・か。確かにお前は昔からそうであったな。剣も才能がない。学問も長続きをしない。そのくせ人の批判は得意だったな。お前がアーシャの剣について批判した時は、家臣一同失笑したものだ」

以前、ドンコイはアーシャが剣の修行を続けて周囲から達人として認められるようになると、貴族に剣など無意味だ、木の枝でも振っているほうがまだ周囲が危なくないのでマシだとあざわらったのである

「ああ、あの件ですか。私は今でもそう思っておりますよ。戦場で命を散らす下賤な兵士でもない貴族が、剣を学んでなんとします？まあ英雄にあこがれるお馬鹿な姫君達の関心を得るぐらいのことですな。むしろそれで本人まで勘違いしてしまうので有害ですらあります」
悪びれない顔で言う。

「・・剣もまともに振るえないお前が、アーシャの剣技を批判するのか？」
「おかしな事をおっしゃる。剣について批判できる者は、剣技を極めた者しかできないとでも？」
ドンコイが顔を歪める。

「事実、アーシャが美しく、剣を使えるということだけで名声を得て、騎士団副長になり、現実を何もしらないお姫様とお近づきになりました。そのせいで、調子に乗って勇者召喚などという愚劣な計画をし、ものの見事に失敗。その結果、わが国は他国からも疎まれる始末。その責任をめぐり、カストール伯爵家が窮地に追い込まれている現状はどうお考えなのですか？」
かさにかかって言い放つ。

「・・・くっ。その点は確かにアーシャにも責任がある。だが、今ここでその様な事を言っている場合ではあるまい」
「・・・父上。本気でおっしゃっているのですか？今だからこそ、その事について目をそむけている場合ではないのでは？」
「どういうことだ？」
「つまり、勇者生贄計画に参加したのは、騎士副団長アーシャであって、カストール伯爵家次男アーシャではないということですよ」
「なに？？」
「アーシャの言い分では、フリージア皇国のために勇者を生贄にしたということでしょう。では、カストール伯爵家のためにアーシャが生贄にされても文句は言えますまい」
「貴様は自分の弟を切り捨てろと言っておるのか！！！」
伯爵は手に持ったグラスを投げつける。グラスがドンコイの額に当たり、血が流れる。

「父上。気が済みましたか？」

ドンコイは顔色も変えてなかった。平然としている。
「貴様は・・」
カストール伯爵は今までこの長男を見限っていた。醜く太り放蕩を繰り返す長男を廃嫡し、アーシャを世継ぎと考えていたのである。しかし、今目の前にいる男は、本当に自分の息子かと疑うほど圧力を与えてくる。

「気が済んだらご決断を。アーシャを取ってカストール家を潰すか、アーシャを切り捨ててカストール家を救うか」
「だ・・だが、アーシャを切り捨てるといっても、他の貴族が納得するまい」
「ああ、それでしたらこれをお使いください」
ドンコイが手を叩く。従者が書類と袋を持ってくる。
「これは？」
「袋には私が今まで横領したり略奪したりして貯めた金２０万アルが入っております。書類は私達放蕩息子達が今まで犯してきた罪が詳細に書かれております。暴行・略奪・殺人・横領。証拠も捜査したらすぐに見つかるようにしております」
「・・どうしろというのだ」
「私達の仲間の親は第一王子を筆頭として有力者ばかりです。金は買収に、書類は脅迫にお使いください」
「お前は・・だが、この書類を脅迫に使うといっても・・」
「ふふふ・・その書類には有力者の子弟の罪を個別に書いております。誰を罪に落そうが、父上の采配一つです」
「だ、だが、しかし、お前もその者たちと悪事をしていたのであろう。脅迫など・・」
「ああ、もちろん私が犯した悪事の証拠など残しておりません。当然の話です。証拠つきで訴えられた者が何を喚こうとも、責任逃れの戯言と言い張れば済む話」
「貴様・・」

「もちろん脅迫など使わない方が良いに決まっております。万が一のためです。その様な事をせずとも、金をばら撒けば味方につけることは可能でしょう。」
「・・・」
「父上、ご決断を」
「・・わ、わかった。アーシャを切り捨てよう」
その言葉を聞いて、ドンコイは満足そうにうなずいた。

数日後、皇国会議に出席したカストール伯爵は、伯爵家の責任はないと主張する

「何をおっしゃるか??。アーシャ殿は貴殿の次男。カストール家の責任は免れませんぞ」
「アーシャは確かに我が次男ですが、もはやカストール家には縁なき者です」
「どういうことですか!!」
「彼に対しては正式に勘当いたしました。いや、騎士として国に仕えると決まったとき、カストール家の者ではなくなったのです」

「・・ち、父上、何を仰るのですか?勘当など私は聞いておりません!!」
アーシャが悲鳴を上げる。カストール伯爵は今まで優秀な息子である自分を愛し、跡継ぎにすると公言していたはず。自分を切り捨てるつもりかと睨みつける。

「アーシャ。父として最後の言葉だ。お前は騎士になる時、カストール家よりも優先してフリージア皇国に忠誠を誓ったはず。お前が今生きているのも国からの禄を食んでいるからだ。そうである以上、お前はカストール家の者ではない。」

カストール伯爵が冷たく言う。

「・・言われてみれば一理ありますな」

「確かに勇者生贄計画に加担した時点では、身分は皇軍獅子騎士団副長でしたな」

「騎士団副長として失敗した責任を、実家に持っていくというのはいささか筋違いではないかと・・」

カストール伯爵の根回しを受けた有力貴族たちが同意する。

「確かになぁ。伯爵家に残った男子とはドンコイのみ。ドンコイの行いなら伯爵家にも責任があるが、騎士団副長殿の責任は騎士団にとってもらうべきだよなぁ」

ニヤニヤと笑いながら第一王子カリグラが言う。

（こ、この無能王子めが！まさかあの豚に買収されて・・くっ　この私がなんという屈辱を。これはドンコイの策略に違いない。あの無能者が余計な事を父上に吹き込んだのだ。卑怯者め・・）

今まで散々見下しあざ笑っていたドンコイに、アーシャは確実に追い詰められていた。

翌日、騎士団に対しての命令が下った。

「皇軍獅子騎士団は魔国に赴き、改めて経緯を確認して、勇者を丁重にフリージア皇国まで移送せよ。命令があるまで決して手を出してはならない。責任者はアーシャ副長を任命する。また、この命令は完全に非公式のものとし、途中何があっても国は関与しない」

「・・・謹んで拝命します」

騎士団１００人のみで魔王亡き後の混乱している魔国に非公式に潜入し、勇者を丁重に連れ帰れという、半ば死んで来いというのと同

様の命令である。
アーシャは観念し、膝を付いて命令を受けた。

「これでよかったのであろうか・・」
カストール伯爵が懊悩する。
「ご心配なく。どう転ぼうが、カストール伯爵家は安泰です」
「なぜだ。」
「アーシャが勇者と和解すればそれもよし。アーシャが勇者を暗殺すればそれもよし。勇者がアーシャの処分を求めてもそれもよし。どのような結果になろうが、カストール家に被害はありません」
ドンコイがしたり顔で言う。

「だが、もしアーシャが勇者と和解すれば、自分を切り捨てたカストール家に対して復讐を企てるぞ」
「ああ、その場合は生贄が必要ですな」
「生贄だと！！これ以上誰を犠牲にするというのだ！！」
伯爵が激昂する。

「決まっておるではありませんか。私ですよ」
ドンコイが涼しい顔で言う。
「なに・・・・？」
意外そうな顔をする伯爵。
「つまり、アーシャを切り捨てる事を提案した、私を勘当するなりアーシャに差し出すなりすべきでしょう」
「き・・貴様。一体何を考えているのだ。お前の考えていることはわからん」

今まで、ドンコイの事をすべてわかっていたはずだった。出来の悪い息子として見限ったはずだった。
しかし、今までの態度が仮面をかぶっていたとわかった後は、ひた

すら不気味さを感じていた。

「やれやれ。情けないですぞ父上。我等兄弟に対して常に伯爵家の為に行動しろと説いていたではありませんか」

「それは・・貴族としては当然のことだが」

「ふふ。私が家中でどう思われているか、すべてわかっております。剣でも学問でも容姿でもアーシャにかなわないと知れわたった頃から、父上やアーシャや家臣の見下す目。無能者とあざ笑う声、すべて私に届いておりました。」

ドンコイが父親を睨みつける。

「・・お前は・・」

ドンコイの濁った目に見据えられて、伯爵は身震いした。

「ですが、私はこれでも長男です。カストール家の為に役に立て、自らより家の事を考えろという教育はしっかりと根付いております。だから私は考えました。アーシャの逆を行こうと」

「逆だと・・」

「アーシャが痩せて美しくなるなら、私は太って醜くなりました。アーシャが金に執着せず清いとこを見せると、私は金を横領して溜め込みました。

アーシャが騎士や兵士達と修行して力をつけると、私は惰弱で放蕩者の貴族たちと遊びまわりました。アーシャが美しい王女と恋愛をはぐくむと、私は娼館に入り浸りました。アーシャが父上や家臣の評判を上げると、私は逆に評判をさげました」

「な・・なぜだ。わかってて今までなぜその様な事をしてきたのだ！！！」

「なぜですと？カストール伯爵家の為です。アーシャが伯爵家を継ぐなら、私はすべての悪評を背負って消えましょう。それでアーシャが伯爵家を掌握できるでしょう。もしアーシャが気の緩みでつま

らぬ醜聞をたてれば、私が身代わりになることが出来るでしょう」
「・・・・・」
「私がごく潰しの放蕩者である限り、家中はまとまっていたのです。アーシャを立てることで」

「・・・そのような事を考えておったのか。我等はお前の演技を見抜けず、騙されていたのか」
疲れた声で伯爵が言う。

「だが、それもすべてアーシャが順調に行っていればのことです。今回のような国を揺るがす失態をしでかした場合、アーシャのせいでカストール伯爵家そのものの存続が危ぶまれているのです。魔王を倒した勇者が戻ってきて、アーシャを裏切り者と非難した時、誰もかばうことなどできません。今までの実績も名声も地に堕ちて、うすぎたない裏切り者として滅ぼされるでしょう。我等も確実に巻き込まれます」
「・・そうだな」
「今までアーシャの味方だった清い者達はアーシャが失敗したとき、手のひらを返すように敵に回るでしょう。清い者を代表としていたカストール家の味方はいなくなります。そのような時にこそ、私の濁った生き方が生きてくるのです。今まで彼を妬んでいた醜く濁り堕落した者たちは、私を押し立てて彼に対抗させるでしょう。結果、カストール家は救われるのです。」
ドンコイが目を伏せる。

「・・私は今までお前を見損なっていた。お前はお前なりに考えていたのだな。伯爵家を継ぐのは、お前こそがふさわしいのかもしれん」
「それはわかりません。器量、時の運、状況によります。誤ちを謝罪して勇者をわが国に引き込めるか、あるいは愚かにも勇者に敵対

を続けるか。前者ならアーシャは一国の重鎮となるにふさわしい器量を示す事になるでしょう。私は自分なりの器量を示しました。後はアーシャ次第です。」
ドンコイは静かに言う。部屋には沈黙がおりた。

フリージア皇国、教会。
「ナムール街に侵入していた間者から、勇者についての情報を集めた手紙が伝書鳩で届きました。」
ノーマンが報告する
「ふむ。勇者がどうやってかは知らぬが魔王を倒した後、ナムールの街に来ていたのだな。そこで奴隷を解放したと」
「はい。ナムールの街では解放された奴隷が話を広め、噂になっております。領主やヤクザの首領が消え、不当に奴隷にされそうになっていた者達が助けられたと。それをしたのが勇者を名乗る少年と、魔王を名乗る少女だと」
「魔王を名乗る少女じゃと？」
マリコル大神官が首をかしげる
「はい。おそらくは、人質にされたメアリー王女かと」
「ふむ。あの小娘も生き残っておったか。しかも魔王を名乗るとは・・」
「はい。この話を使えば、勇者を堕ちた偶像にすることができるでしょう」
ノーマンが笑う。
「よし。光の国にある大神殿にはワシが報告しよう。お前は勇者が魔王と結託して魔族に協力していると広めよ」
「了解いたしました」

その後、国中の神殿に使いを出し、勇者が裏切り魔王と結託したという噂を流した。

フリージア城
玉座の前で膝をつくアーシャ。
「アーシャよ。いよいよ明日出発か。余が望んだ事ではないが、こうでもしないと貴族どもの不満は抑えられん」
ヘラート国王がアーシャに話しかける。
「陛下のご厚情感謝いたします。必ず勇者を探し出して連れてまいります」
アーシャが言う。
「・・アーシャと話がある。全員退出せよ」
玉座の間にいる者に退出を命じ、部屋の中には二人になった。

「アーシャよ。余は正直お主と、メルトに次代のこの国を任せるつもりであった。玉座が誰のものになるかは別として、実権はな」
「身に余る言葉、勿体のうございます」
「だが、ここまで貴族の間に不信感が広まると、そうも言ってられなくなる」
王の言葉に肩を落とすアーシャ。

「アーシャだけの話ではない。メルトも、余も今回の件で立場が危うくなっておる。もはや、勇者は存在するだけでフリージア皇国の害となる」
ハッとして顔をあげるアーシャ。
「よいな、今回は非公式での任務じゃ。つまり、お主も騎士団も皇都から動いていない事になっておる。対外的にはな」
「それは・・」
「国の支援を受けられぬということじゃ。同時に国の制約もない」
「・・わかりました。」
国王の意を察するアーシャ。

「よいか、必ずフリージア皇国の害を取り除け。それさえ出来れば、

後のことはどうにでもなる」
「はっ。必ず陛下の意に沿うようにいたします」
頭を下げるアーシャ。
「・・・メルトに会って行くがいい。お主の為に祈る女は、男に確実に力を与えてくれるものじゃ」
「重ね重ねのご配慮、誠にありがとうございます。もはや父にも見捨てられたこの身、陛下とメルト王女にすべてをささげます」
アーシャは涙を流して礼をいい、退出していった。
（・・この試練を乗り越える事が出来れば、父として安心して娘を託せる。頼むぞ・）
退出していくアーシャの後姿を見つめながら、ヘラート国王は思った。

「アーシャ様・・」
「メルト様・・・・・」
メルト王女の私室で抱き合う二人。
「必ず、必ずあの憎き勇者を滅ぼして帰ってきてください。そうしたら、私と・・」
「はい。その時には、堂々とメルト様に求婚させていただきます」
恋人同士の逢瀬はいつまでも続く。二人はこの時だけは幸せだった。

結界

魔王城

一回り大きくなった姿のケルビムが中央エリアに侵入する
「ノーム。シルフィールド、ウンディーネ。出てくるがいい。イフリートは既に倒した。お前達も新たなる魔王の贄となるがいい！」
叫びながら彼に従う魔将軍兵士と共に中央エリアを捜索する。
彼らはもはや勝利を疑ってなかった。

「クッ・・イフリート殿がやられたか。やむをえん。私が出て止めよう」
ノームが言う。
「ダメだよ。今彼の前に出たら、結局やられて彼に力を与えるだけだよ」
「だが・・」
「今はここにいて。姿を見えなくする結界を張っているから、しばらくは見つからないよ」
魔王城の魔公軍生き残りと非戦闘員は、シルフィールドが張った結界の中で息を潜めていた。

「ですが、いずれはここも見つかります。どうすれば・・」
「こうなったらシンイチに賭けるしかない。なんでもいいから道具袋さえ開いてくれれば、シルフとつながって情報交換できる。ウンディーネちゃんを呼び出してくれてもいい。今は時間を稼ぐしかないよ」
必死に姿を隠し、シンイチに希望を託すシルフィールド達だった。

外

「ああ・・よく寝た。」
朝になり、シンイチがおきて来る。
「おはようシンイチ。朝ごはんどうする？」
「んー。食堂で適当に食べよう」
メアリー達とのんびり朝食を取る。
「しかし、新聞とかないと読むものがないなぁ」
「新聞って？」
「それぞれの家庭に昨日起きた事なんかを記事にして伝える情報紙。だいたいの家庭が毎日取っているよ」
「紙？貴重な紙を毎日配るの？」
「貴重って・・ああ、こっちじゃまだ紙は貴重なのか」
「職人さんたちの手作りだよ。各家庭って・・一体どれだけの量になるの？」
「さあ・・毎日何千万部かわからないなぁ」
「・・・シンイチ達の世界ってすごいんだか無駄なんだか・」
メアリーが呆れたように言う。

「そもそも、毎日なんてよくそんなに書くことがあるねぇ。私は分身が世界中の情報を伝えてくれるけどね」
「その辺は俺もよく分からないけどね・・というか、シルフの方がすごい。この世界のことをなんでも知っているの？」
「うーん。その辺は微妙かな。分身が多すぎて情報を共有するのに時間がかかるからね。いちいち同期しないといけないし」
「まあ、そんなもんか。」
「魔王城の中のシルフィールドとは、道具袋が開くたびに情報交換しているよ。一番近い分身同士だからね」
「なるほどねぇ。もう一服して落ち着いたら、ウンディーネさんと話してみようか。結論出ているかもしれないし」
「あー。もうちょっと後でもいいんじゃない？食べたばっかりだし」
朝から結構な量を食べたメアリー。

「食べ過ぎると太るぞ」
「なんかいった？」
女神の杖を向けてくる。
「ナンデモナイ。それじゃ、朝食代を払おうか。いくら？」
宿の親父に聞く。
「二人で1ギルだ」
「はい」

道具袋を開けてお金を取り出した。
その瞬間、シルフが頭を押さえて地面に落ちた。
「シルフ！！どうしたんだ！！」
「・・・大丈夫。ちょっと緊急の情報が入っただけ。あまりにやかましいから頭が痛くなったよ」
「緊急？なんだ？」
「とりあえず、部屋に帰ってウンディーネちゃんを呼び出そう。魔王城が大変な事になっているみたい。」
三人は部屋に帰って鍵を閉めた。

「ウンディーネさん（服つき）でろ」道具袋から取り出す。
部屋の中央に焦った様子のウンディーネが出現する。

「シンイチさん。よかった・・呼び出してくれたんですね」
シンイチにすがりつくウンディーネ
「だから、離れろっていってるでしょ！！」
無理矢理二人を引きはなすメアリー。

「ウンディーネさん落ち着いて。どうしたの？」
「じ、実は、魔王城内で反乱がおきて、イフリート殿が殺されて、結界が破れて・・とにかく大変なんです」
混乱しながらも、なんとか説明を終えるウンディーネ

「お願いします。魔王城の者達を助けてください！！このままでは皆殺しにされます！」
必死の形相のウンディーネ。

「わ、わかりました。ケルビムって奴を倒せばいいんですね。ケルビムの心臓でろ」
道具袋に手を入れるシンイチ
「熱ッ！！」
火の中に手を入れたような熱が伝わってきて、シンイチは手に大火傷を負った。
床を転げまわるシンイチ。
「シンイチ！！」「シンイチさん！」
あわてて手にヒールをかけるウンディーネとメアリー。しばらくして、シンイチの火傷が回復した。
「あ・・二人ともありがとう。いったいどうなったんだ？」
シンイチは理解できずに首をかしげた。

魔王城の中で、ケルビムの姿は炎に包まれた巨人となっていた。
イフリートの魔力を吸収したことで、自らを炎とかす『フレイムフィギュア』の魔法が使えるようになったのである。

「ふふふ。今勇者が余の心臓を取り出そうとしたが、炎に焼かれおったわ。待っておれ。袋の中の魔族を食らい尽くした後、この袋の世界をやぶり、じっくりと燃やしてやる」
イフリートから奪った『炎の剣』を振るって暴れるケルビム。もはや魔王アンブロジアを完全に超えていた。

「おそらく、炎の魔公の魔力を吸って、自らの肉体を炎と化す魔法を使えるようになったのでしょう」
ウンディーネが言う。

「そんな。それじゃその体を取り出そうとすると・・」
「シンイチの手がこんがり焼けるってことだね。それ以前に心臓も炎と化しているんじゃつかめないよ」
メアリーとシルフがあわてる。
（まてよ・・こういう時こそ今まで読んだ物語を思い出せ。何か方法があるはずだ・・）
自分を落ち着かせて、ケルビムの暴走を止める方法を考えるシンイチだった。

ケルビムが放った炎が魔王城を焦がす。
シルフィールドが張った姿をくらます結界からも、熱に耐え切れず飛び出す者が続出した。
「たーー助けて」
結界から出た者は、ケルビムの配下に見つかり、無残にも殺された。
その魔法玉を吸収して強くなっていく魔将軍の兵士たち。
「ははは・・新たな魔王の誕生だ！！」
「魔王ケルビム万歳！」
「このような古い城など、魔公どもと一緒に燃やしてしまえ！」
彼らの宴がひろがっていく。

「やむをえん。皆は逃げろ。私が奴を抑える」
ノームが結界から出ようとする。
「ダメだよ。ノームおじさん。しんじゃうよ」
シルフィールドが必死に止める。
「大丈夫だ。大地を燃やし尽くす事など誰にも出来はしない。」
ノームは結界からでて、ケルビムの前に立った。

土魔

「やっと出てきたか。ノーム公。余の糧になる覚悟が出来たか？」
炎の巨人となったケルビムが言う。
「・・残念だがそんな気はない。せっかくすべてが丸く収まるといった時に、わざわざすべてをぶち壊すような者など、私は認めない。
『スチールフィギュア』」
ノームは自分の体に魔法をかけ、巨大な鋼鉄製のゴーレムの姿になる。
「いいだろう。ならばその体を引き裂いて、魔法玉を得るのみ」
炎と鋼の魔人が交差した。

『炎の剣』がゴーレムを切ろうとするが、全く歯が立たなかった。
「無駄だ。この姿になった私は何物も寄せ付けない。そして、私にはこうする事ができる。」
『地魔の槌』を地面にたたきつけると、周囲に高重力がかけられた。
「ぐっ」
飛んで避けようとするが、堪えきらずに地面に膝を付く。
「たとえ水であれ風であれ炎であれ、土の支配からは逃れられん。おとなしくしておれ」
地面に魔法陣が現れる。
「な、何をするつもりだ」
「その魔力、危険すぎる。また皆に戻してもらうぞ。『ケセルシード』」
ケルビムの体の上にノームの魔力のこもった種が撒かれる。それはみるみるうちに成長してケルビムの体に根をはり、樹になっていく。
「こ、これは・・魔力が吸われる」。
「何も魔法玉のみが魔力を取り扱う方法ではない。その種はたとえ実体がない炎や風の状態でも、魔力そのものに根を張り巡らせる。

成長した樹は魔力を吸い、魔力をこめたケセルの実をつける。それを弱き者に与えれば魔力を回復させられる。本来は攻撃用の技ではないが、今のおぬしにはちょうどよかろう。ケセルの樹となって恵みをもたらすがいい」
「ぐわーーーー」
ケルビムが絶叫する。その姿は急速に成長する樹の根元に隠れて見えなくなった。

外
「ちょっと、どうなっているか知りたいから、道具袋開けて」
シルフがシンイチに言う。
「そうだね。状況をしろう。」
道具袋の魔法陣に片手を突っ込んで外の世界とつなげる
「んー。来た。あれ？ノームおじさん、ケルビム倒しちゃった？」
「え？本当ですか？」
ウンディーネが拍子抜けしたような顔をする。
「えっと、どうやったか・・・あー、シンイチ並にえぐい事するねぇ」
シルフが笑う。
「え？」
「ケルビムを魔力を吸う樹であるケセルの樹の苗床にしちゃったよ。そのうち魔力が吸い尽くされて、カラカラになったケルビムの干物ができちゃうね」
「・・・えぐいね。シンイチみたい」
「だから何で俺が・・」
「ふう。一安心しました・・」
ウンディーネが肩の力を抜く。
「みんな、お茶入れたよ。お菓子も買ってきたから食べようよー」
アンリが言う。なんとなく皆気がそがれて、まったりと紅茶を飲んだ。

魔王城
ケセルの樹の成長が止まる。
「息絶えたか・・ケルビム。今までの事を償ってもらう。」
たくさん実ったケセルの実をもぎ取ろうとノームが近づく。
その時、ケセルの樹の枝が動き、ノームの巨体を絡め取った
「な??」
あまりの驚きに動きがとまる。その間にも蔓が何十にも撒きついた。
「ふふ。さすがノーム公。余も危うく死ぬとこだった」
ケルビムの声が聞こえる
「貴様・・まだ生きていたのか?」
「ふふ。残念だが元の肉体は滅びたが、新しい肉体を得た」
「まさか!!」
「寄生魔法『パラサイト』。まさか使う機会があるとはな。何が幸いするかわからん。ケセルの樹は乗っ取らせてもらった」
「な??」
「余の強みは数百の種類の魔法を使える事だ。だからこそ魔王子の中でたったひとり魔将にまで上り詰めた。あらゆる状況に対応できる」
「くっ」
「魔力そのものに根を張るとは貴様の言葉だったな。ならばどんなに硬い体でも関係あるまい。余の糧になるがいい」
ノームの体に何百ものケセルシードが撒かれ、ノームの体を侵食していった。

外
「はっ　お茶を飲んでいる場合ではありませんでした。皆が傷ついています。魔王城に戻らなければ」
紅茶を一杯飲み干して、ウンディーネが焦ったように言った。
「もう帰るの?ゆっくりしていけばいいのに」

「ありがとうございます。また一日後にでも呼び出してくださいね」
シンイチに笑いかける。
「それじゃ『収納』」
ウンディーネの手を握って念じると、姿が消えた。
「やれやれ、忙しそうだな・・え？シルフどうしたの？」
「た、大変だよ。とにかく、早くノームおじさんを呼び出して」
「なんで？」
「何ででもいいから。絶対余計な事考えないでよ。『ノームさんだけ出ろ』って念じて」
「え？それじゃ真っ裸のおじさんが出てきて・・」
マッチョおじさんの全裸を想像してウェッとなる。
「い・い・か・ら」
ものすごく怖い顔で言うシルフに押されて、シンイチは頷く。
「わ、わかったよ。『ノームさんだけ出ろ』」
そう念じた次の瞬間、傷だらけのノームが出現した。

魔王城
「な？ノームが消えた。・・またあの忌々しい勇者の仕業か。ちょろちょろとちょっかいをかけおって、うっとうしい。・・ふふ。まあいい。代わりに愚かにも帰って来た魔公がいるようだからな」
ウンディーネの魔力を感知し、笑うケルビム。
ケセルの樹をさらに成長させ、蔓を触手として魔王城中に伸ばす。
「他の雑魚どもは後でゆっくり喰らってやる。まずはウンディーネとシルフィールドだ」
魔王城は蔓に被われていった。

「いや、勇者殿。助けていただいて誠にかたじけない。私は地と恵みのノーム。四大魔公の一人です。」
メアリーがヒールで治療を施し、動けるようになったノームが挨拶する。

「えっと、勇者のシンイチです」
「魔王（仮）のメアリーです」
二人が自己紹介する。

「しかし、もうダメだと観念したのですが、どうやって助けていただいたのですか？ケセルの種に寄生されたら例え魔王でも助からないのですが・・」
「へへん。私が機転を利かせたんだよ～。『ノームおじさんだけ出る』ように念じて出れば、ケセルの種も根も置き去りにして出られるからね」
「そうでしたか・・。シルフ殿。ありがとうございます」
ノームが頭を下げて、シルフが照れる。
「しかし、せっかく救っていただいたのですが、皆を助けないと。勇者殿、申し訳ございらんが、魔王城に戻していただけませんでしょうか？」
「ノームさん。今戻っても自殺行為です。それより、ケセルの樹について教えてください。なんとかする方法を見つけないと、結局無意味になってしまいます」
「・・・そうですな。では、お話します」

？ケセルの樹の栄養は空中や地中の魔力と日光で、日光さえあれば魔力を自己合成するので無害であり、魔国での作物になっている
？土の属性を持つ者は自分の肉体に種を植え、コントロールすることでケセルの実をつけて他者に魔力を分ける事が出来る事
？ケセルの種は自然の状態では日光がある肥えた土地にしか発芽しない
？他者の魔力をこめたケセルの種を生物の肉体に植え込み発芽させたら、コントロールできずに魔力を吸い尽くすまで絶対に離れず、助かる方法はない事等を説明した。

「え？作物なんですか？」
「はい。空中や地中の魔力を効率よく集め、日光のエネルギーを魔力に変換し、ケセルの実をつけるのです。それを食べれば魔力が回復するのです」
「空中や地中の魔力を集める。光合成をする・・」
「死んだ者の魔力が凝縮される魔法玉と似ておりますな。魔力自体は魔法玉よりかなり少ないですが・・」
シンイチは今の情報でどうにか道具袋で状況を打開できないか、考えた。

水精

魔王城

蔓に拘束されたウンディーネとシルフィールド。着ていた服が破れて、かろうじて体に引っかかっている。
「ふふふ、いい格好だなウンディーネ。一度こうやってお前を抱きたかった」
全身蔓に撒きつかれたウンディーネ。
目の前にはケルビムの顔が浮き出た巨大な樹があった。
「どうだ。我が妻として魔王妃にならぬか。二人で魔国を支配しようではないか」
樹の幹に浮き出た顔に近づけられるウンディーネ。

「・・あの～。ところで私は無視ですか？」
同じように蔓に絡め取られているシルフィールド。魔力そのものに絡み付いているので、逃げられない。
「お前はエサだ。それ以外の何者でもない」
「ひどい。美少女のサービスシーンなのに、無視？」
喚くシルフィールドを完全無視するケルビム。

「・・・エサ、ですか。共に魔国を支えてきた仲間を、エサと呼ぶのですか」
ウンディーネが静かに言う。
「そうだ。私のエサだ」
「もはや、貴方は魔族ですらありません。すべての存在から忌み嫌われる、表現する言葉もない化け物です」
「ふふふ。イフリートも同じような事をほざいていたな。今は余の養分として役に立っておる」

「その様な姿となり、これからどうするつもりなのですか？もはや、一歩も歩けない姿。どれだけ魔力を集めようと、道具袋の世界から出られるわけもありません。」
静かに諭す

「それもよし。この世界を支配する大魔王となり、永遠に魔族を統べるのだ」
「何が大魔王ですか。この何もない世界でたった一人、永遠の孤独に取り残されるだけですよ。他者が存在しない世界でいくら無双を誇ろうとも、無力な赤子と同じことです。」
「弱者の戯言だな」
「私達は魔王アンブロジアが無力な人間の若者に倒された時点で、力の無意味さを悟るべきでした。何度も世界と道具袋を往復してつくづく思いました。貴方はどれだけ強くなろうとも、袋の中で威張るアリと同じです」

「・・・・シンイチといったな。あんなひ弱な勇者に何ができる」
「私達がここで死んでも、貴方を永遠にこの世界に閉じ込め、二度と出さないでしょう」
「ま、しゃーないか。どうせこの『私』が消えても、いくらでも分身はいるんだし」
シルフィードがさばさばした顔で言う。

「よかろう。では、二人とも喰らってやろう。そうして他の魔族も喰らい、袋を魔力を込めた蔓で破り、外の世界のすべても喰らってやるわ！！」
ウンディーネとシルフィールドにケセルの種が植え付けられた。
ウンディーネはケセルの根に魔力を吸い取られながら、今までの事を思い返していた。

実はウンディーネの年齢は１２０歳で、魔族としてはむしろ若い娘だった。人間で言えば２０才である。
魔族の名門である水の一族の魔公の姫と生まれ、幼い頃から期待されてそだった。
父や母が死んだ後、一族の者は彼女を中心としてまとまり、魔公を継いだ。

今まで何万人もの魔族を癒した。
何人も自分を愛し仕えてくれる家臣や侍女がいた。
しかし、自分と対等に接してくれる者は、誰もいなかった。
誰もが自分を美貌と癒しの力を敬ってくれる。
それが当然の世界だった。
奴隷や貧しい人達を見て哀れにおもい、癒してあげることはしてきても、彼らを救おうとは思わなかった。
それは自分とは違う世界の出来事のような感覚だったのである。
自分に対して傷つける者がいない、誰からにも愛される世界に彼女はいた。

（ふふ・・どうして人生の最後に、あの少年の顔が思いうかぶのでしょうね）
最初に魔王城で見た時は、何の力も持たない勇者に憐憫の情が沸いたが。それだけだった。

しかし、その無力な少年が、魔王を倒し自分達全員を道具袋に封じ込めた時、彼女は初めて絶望というものを感じた。
１２０年の人生で、ここまで追い詰められた事はかってなかった。
どうすれば良いかわからなくなり、ただ幼い子供のころのように許しを請おうと思った。

自分の服や下着を取りあげられたとき、悲しくて泣き出した。

自分にこんな事をするような者は今まで一人もいなかったのである。
魔王城の中ではどんどん争いが起こってきた。彼女はひたすら助けを待ち、塔にこもり続けた。

ついに自分の手紙がとどき、外の世界に出ることができたとき、彼女はまたしても裸に剥かれた。
初めて異性に肌を見られた。
恥ずかしさのあまり、また泣き出してしまった。

シンイチと名乗る勇者は、申し訳なさそうな顔をして謝ってきた。
隣にいる少女に説教され、ひたすらペコペコと頭を下げてきた。
（なぜこの方はこのように謝るのだろう。すべての魔族を封じるくらいに強いのに、不思議なほど弱気だ）
その姿を見てウンディーネは思った。

改めて話をして、ウンディーネはますます不思議に思った。
彼は自分に対して、全く隔意がない。魔族に敵対する勇者なのに。
かといって、自分を尊敬したり崇拝したりする気配もないのだ。
先ほどは強いとのにと思ったが、改めて気配を探ると魔力も力も自分よりはるかに劣る。
（強いのに、弱い。弱いのに、相手を恐れない。それなのに、弱気で柔和だ）
今までこのような人間とは、ただの一度も会った事はなかった。

魔王のように強さを示し、自分を従えない
侍女や部下のように、自分に従わない。
貧民のように、自分を崇拝しない。
初めて「対等」に接してくる者に対して、ウンディーネは興味を持った。

奴隷を解放したい。戦争をなくしたいという彼。
彼はともかくも魔王を倒した勇者なのだ。魔王城の宝物財貨も彼のものだ。豊かに安全に生きていけるはず。奴隷を解放したり戦争を止めたところで、何の得にもならない。
それなのに自分の事のようにそれらを悲しみ、実例を出して奴隷解放、戦争停止の理想を語る。
彼が生きていた世界とは、どのような世界なのだろうか。
意を決して『知識共有』を提案した。
これはかなり親しい者同士でないと行わない魔法。
相手の知識だけではなく、悪意や劣情といったものも知ることになるのだ。
ウンディーネは今まで両親としかしたことがなかったが、どうしても彼の世界が知りたかった。

シンイチの世界の知識が流れ込んでくる。
今まで思いもしなかった発想、価値観が流れ込んでくる
（なんて素晴らしい世界。人が人として認め合う世界。私も行ってみたい）
新しい世界の事を知り、見るものすべてが珍しかった子供の頃のようなわくわくとした気分になった。
１２０年も同じような生活、同じような人を見続けていたのである。
（こんな気分になったのは１００年ぶり。シンイチ様は異世界への扉。）
あこがれがこもった視線でシンイチをみた。

恥ずかしかったが、取り上げられた下着を返してもらうように頼んだ。
シンイチは顔を赤くして下着をとりだした。
（ふふ。可愛い。このような面もあるのですね）

しかし、出てきた下着は男の匂いと汗が染み込んでいた。
恥ずかしさのあまり泣き出すウンディーネ。
（なぜここまで悲しくなるのだろう。シンイチ様に恥ずかしい所をみられたから？）

魔王城に帰り、魔公や魔将を必死に説得する自分。
シンイチの理想のために自分も力を尽くしたいと思った。
それは今まで与えられ続けた彼女にとって、初めて自分から動いて何かを始めたいと思ったこと。
条件付ながら、魔公たちが受け入れてくれた事も嬉しかった。

しかし、直後にケルビムの反乱が起きた。
今まで一度も戦闘などしたことがなかったウンディーネは、恐怖に震えながらシンイチに祈った。
（シンイチ様・・どうか私達を助けてください）
必死にけが人を治療したりポーションを作りながら思う。
いつの間にか頭の中はシンイチのことで占められていた。

そうしてついに呼び出された。その直後にケルビムが倒されたと聞いた。
今まで恐怖に張り詰めていたが、急に気が抜けた。
勇者達が暖かいお茶を入れてくれて、彼らと一緒に談笑した。
いつのまにか、シンイチだけではなく彼女達もウンディーネに対等に接してくる。
（楽しい。これが人間というものなの？彼らは敵だったはずなのに打ち解けている。私も彼等に対する敵意などカケラもかんじない）
人生で一番楽しいお茶会だった。

いつまでもお茶を飲んでいたかったが、魔王城では未だ多くのけが

人がいた。
「ゆっくりしていけばいいのに」
シンイチの言葉に頬がゆるむ。
また呼び出してくださいといいながら、魔王城に帰った。

魔王城に帰り、けが人を治療していると、突然蔦に被われた。
何重にも拘束され、根元に運ばれる。
目の前には巨大な樹があり、ケルビムの顔が浮かんでいた。

「ふふふ、いい格好だなウンディーネ。一度こうやってお前を抱きたかった」
ケルビムの顔が笑う。
「どうだ。我が妻として魔王妃にならぬか。二人で魔国を支配しようではないか」
情欲をむき出しにした顔。

（嫌らしい。汚らわしい。なぜこんな醜い情欲を向けてくるの。）

隣で拘束されているシルフィールドに向かってエサだと言い放つケルビムに、初めて力を誇示するものへの嫌悪を感じた。
（どんなに力を誇ろうとも、所詮この袋の中に限定される哀れな道化にすぎないというのに・・）

体にケセルシードを撒かれ、全身に芽が入り込んでくる
脳裏にシンイチの気弱そうな顔が浮かぶ。暖かい気持ちになる。照れた顔が可愛いと思う。

（シンイチ様・・もう一度会いたかった。貴方の理想がこの世界に広がり、皆が笑って暮らせる世の中を作りたかった。なにより、貴

方の側でわらいたかった・・。そうか、この感情。１２０年生きていて、誰にも感じなかった、この人の側で笑っていたいという感情。これが・・・）

ウンディーネの意識が静かに闇の中に落ちていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3978x/

反逆の勇者と道具袋

2011年10月29日22時07分発行